中央公論

本號目次

口繪
◉錫蘭塞泥の風光

公論
◉星亨氏と伊東巳代治氏　　龍北
◉常識以外の道德　　黄洋
◉世界的知識の養成所　　卑山

海外新潮
大勢
◉米國商工業の歐洲に及ぼす影響◉女皇治下の英國◉宗教より見たる前世紀◉墺地利の治國難

雜纂
◉博識先生の談片◉日本人の米國移住◉鐵道布教

雜錄
◉瓦礫　理學博士　坪井正五郎
◉東京府下の暗黑面　山形東根
◉小野湖山の詩を評す　岩山觀二
◉教界人物評　哄堂
◉芸窓偶筆　千河岸櫻所

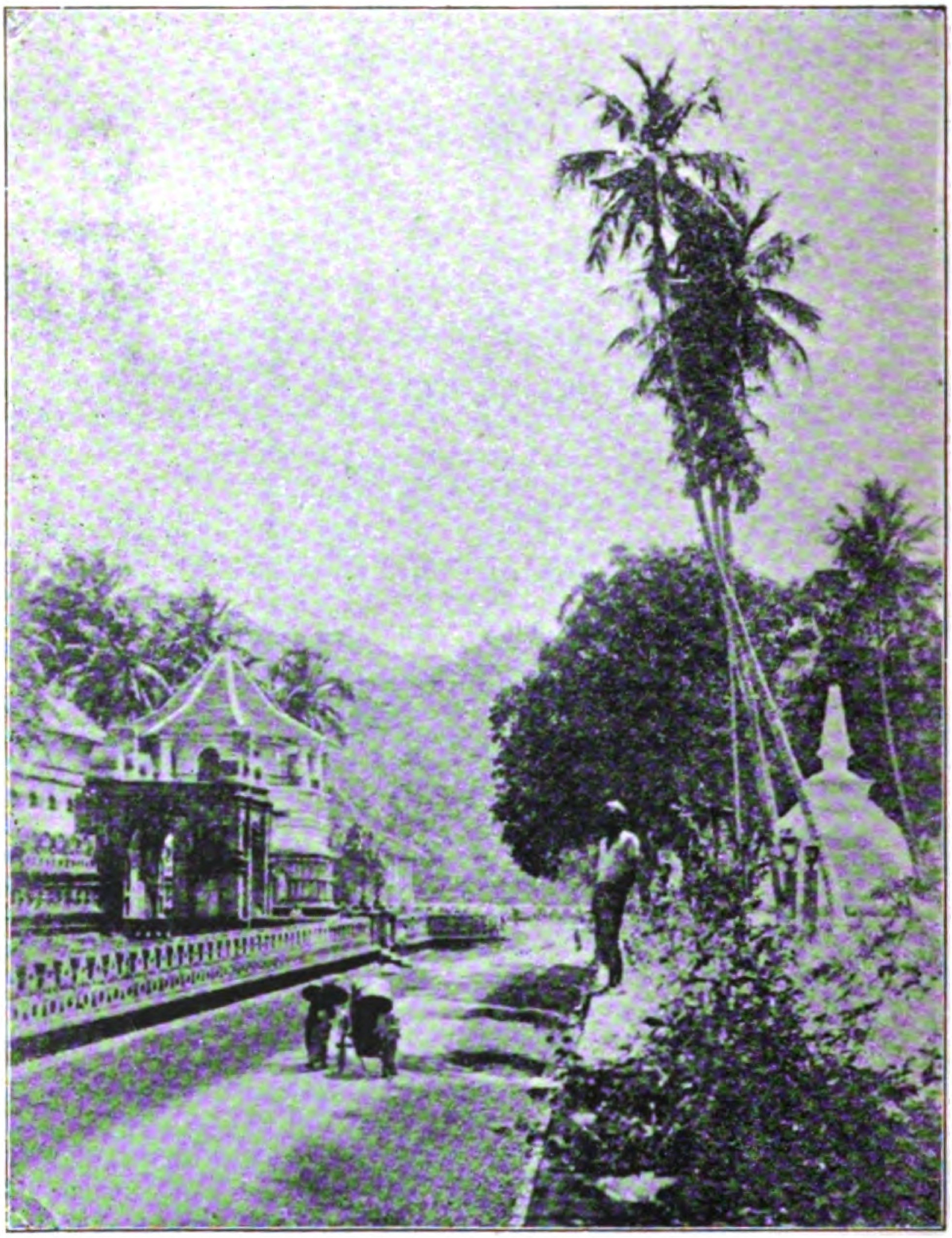
詞藻
◉俳句苗代　坂本四方太撰
◉漢詩數十首　町田柳塘撰

紀行
◉遊北紀程　源清蔭
◉航西通信　藤井愛梅

思潮
◉歐米學生の氣風(外八件)

評論
△政界漫言記(城陽政客)
帝國議會の變象◉英獨協商と滿州◉露の對韓運動◉政界の分水嶺◉政治家と宗教◉政界日
△教育特評
中學校令◉文部無定見◉松田文相を葬る◉馬博士の遺書◉言文一致◉ちりずか(竹友)
△文藝小觀
風俗壞亂◉文人と素行◉人を責むる道◉震件のモーラルトーン◉風塵紛々(觀測先生)
△宗教評論
救世軍の成功◉佛教界の統計◉卅日間の消息(桃華)
△社會小評
不品行者の德義談◉善行とは誰れのするものぞ◉社會日誌(斬虹)
△雜評
都下の論文豪(小觀生)◉一掃百藤(彗星)◉睥睨錄(白眼翁)
△短文(數十)△新刊紹介(數種)△近事彙報(社會敎育宗敎數十件)

鐵車載夢入層巒
忽見市聲林際讙
千古盛衰向誰問
一溪春水夕陽寒



錫蘭塞泥(紀行欄參照)

中央公論 第十六年 第四號

中央公論

星亨氏及び伊東巳代治男

吾國現今の最大政治家は誰なりやと問ふものあらば何人も先づ伊藤大隈の二人を擧けて答へざるものはあらざるべし。然れども此二人のものは年齡已に耳順を過ぎ前路の希望太だ長からず、加ふるに進歩黨總理として大隈伯の手腕頗る舊に似ざるものあり、伊藤侯は色を漁し酒を遣ひ矍鑠として鞍上尙顧眄の勇を示さゞるに非ずと雖も、已に政黨の改造を主唱し、其組織の始めに於ては彼か如く大言壯語したる政友會なるものゝ現状を見、又たその內閣を見、又た其貴族院に對する窮狀を見ば、彼亦元老たる哉の嘆を發せしめざるもの幾干もあるなし、されば今にして吾人が是等二人に次て起つ可き五年若くは十年後の二大政治家を數ふるも、亦敢て早計なりとなさんや、而して吾人は其候補者として現代後進政治家の中に於ては星亨氏及び伊東巳代治男に望を屬すること尤も大なるもの也。

吾國小なりと雖も尙五千万の人衆を有す、憲法政治に於て日尙淺きも未だ政治家として數ふ可きものなきに非ず、進歩黨には東洋的豪傑と稱せられたる大石正巳氏あり、機智一世を壓すといふ犬養毅氏あり、帝國黨には權謀術數に富みたる佐々友房氏あり、政友會には大臣學を修し得たりといふ進歩黨の落武者尾崎行雄氏あり、心機一轉を以て有名なる渡邊國武氏あり、外交に一種の靈腕を有すると稱す加藤高明氏あり、包量尤も大にして愛嬌多き末松謙澄氏あり、無所屬者として吾國のコブデン、ブライトと稱せらるゝ島田三郎氏、田口卯吉氏あり、皆是れ今日の政界に於て第一流の人物たるを失はじと云へども、而れども其能く風雲を制馭し、一代の群雄を驅使する力量と膽勇を有するものに至ては、吾人獨り星伊東二氏に待たざる能はず。

星氏が近來政界に於ける活動は人目を驚かすばかりなり、氏が尨大にして不統一なる自由黨を統率して政府に對し、進歩黨に對し、始終優勢の地歩を保たしめ、今や斷然一黨を供して伊侯に合し、更に大に自由黨の勢力を張れるか如き、氏の特得の手腕にして始めて見るを得可く、其一旦東京市疑獄事件に關聯して遞信大臣の職を失ふや、忽ちにして院内總理となり、却て政友會の實權を把握したるか如き、又た同し事件よりして有力なる黨員相次て獄に投せられ、市會に於ける自由黨の勢力に一大打撃を受くるや、氏は自ら市會議長の候補を爭ひて當撰し、能く自由黨の勢力を既衰の間に挽回したるか如き、苟も氏が勇往敢爲其目的地に向て達せずんば已まざる行動を見ては、氏を神の如くに尊崇する者は勿論、氏を惡魔として公盜と絶叫するものも尙且つ稱讃の辭を發せざる能はざらしむ、其毀譽褒貶を別問題として、都下日々の各新聞紙上殆んど星亨の二字を見ざる者なく、政治を談するもの必ずや先つ氏其人に及ぶ、凡て氏の如く社會の注意を惹き、評判に上るもの今古殆んど稀なり、氏は確かに現代政界の大立物として、今や殆んど其競爭者を有せざるものといふべし、而して氏年齒尙壯、その昂々の氣は今後俄かに衰却するものに非ず、經歷的金箔を以て人目を眩耀す所謂元老輩殊に伊藤大隈の徒の政界を退隱するの日に於て氏か横行大歩、更に大に其腕力を振ふ可きは何人も豫想する處にして、吾人か今玆に詳論するまでもなき事也。

伊東巳代治男に至ては身を刀筆の吏に起したりしを以て、世人動もすれば政治家の器量を有するものに非ず、唯便佞狎邪の一小人、伊侯に夤緣して纔かに今日の地歩を得たりとなすもの多し、爾り男は素より「俗吏上り」なるもの也、即ち等外吏より屬官となり、書記官となり、書記官長となり、男爵となり、農商務大臣となり、樞密顧問官となりたるもの也、其今日ある伊侯推挽の力與て大なるは勿論なりと云へども、其才識力量の自ら尋常に秀拔するに非ずんば安んぞ今日あるを得んや、况んや其二十年間官吏としての生涯は其力量

をして愈大ならしめ、才識をして愈發達せしめ、其經歷と地位とを以て今や伊侯なくも優に政界の一角に覇を稱す可き也、星氏の政敵として今後侮る可らざるは蓋し男なりと云はざる可らず。

想ふに伊東男の地盤は官吏社會に在り、男は自由黨の所謂土佐派なるものと關係を有すと云へども、男の地位出身よりして到底貴族社會、殊に官吏社會と切る可らざる緣因を結び居るもの也。男が所謂「なり上りもの」として貴族若くは官吏社界に輕侮さるゝ如きも、是の如きは一時の現象にして、彼等貴族官吏に於て尤も難有ものは官等位階也、今にては「なり上りもの」也、新參者なりと云へども、日を經るに從て新參は古參となり、「なり上りもの」は「なり上りもの」に非ざる樣に見えて、遂には樞密顧問正三位男爵といふ、いかにも立派なる肩書に彼等は三拜九拜するに至らん也、况んや彼等の中に於てこそ相排斥すれ、一度民間の政黨などに對しては、紈袴長袖亦何事をなさん、素より敏慧なる男の才識力量に假らさる可らさるもの之れ多きを以て多數の貴族官吏はイツシか相率ひて男の幕下に集合して怪しまざるに至らん。殊に男は伊侯の故智を學て、宮内省に勢力を扶殖するの必要を知り、九條公爵などを通して、漸次雲間に昇るの地歩を作りつゝあるが如し、他日伊侯に代て宮内省及び貴族官吏の間に一大勢力を張るものは夫れ或は男ならんか。

星氏の政治的實力は當世第一と稱すと云へども、氏の勢力は獨り政黨間に在て貴族官人の徒に及はざるのみならず、貴族等は感情上到底所謂一匹夫の星氏と和する能はざる運命を有す、今日貴族院が增稅案の如き極めて明白なる問題に對し、内閣を苦しむが如き其緣西する處現内閣が星氏の手中に在るといふを以てなりと稱せらる。されば今後氏の大飛躍を抗制し氏をして幾多の苦戰を重ねしむるものは進歩黨に非ず、帝國黨に非ず、實に貴族官吏の一輩なりと覺悟せざる可らず、氏の怪力は素より今日の大隈伯か二十年間經過し來れるか如き逆境に畢るものに非ずと云へども、星氏動もすれは此一點に於て伊東男に制せらるゝの虞あり。」

今二人の者を比較するに伊東男が官吏としての地位は星氏の遠く及ばざる處にして、星氏が政黨の首領として自由黨と稱する尤も强大なる地盤を有するは伊東男に之れ無き處也、伊東は智を以て勝り、星は勇を以て勝る、政友會內閣の組織せらる伊東が出てゝ大臣の地位を求むるに於て何かあらん、而も隱忍出てず靜かに他日の聲望を養はんとするか如き、其智にして志の小ならざるを見るべし。星氏の如きは苟も機會の乘ず可きあれは、悍然咆哮、進て取らずんば已まず、他の深思熟考而して後ち發するものに同しからず、磊々落々成敗を一賭に附するの槪あり此際亦注意す可きは伊東男が未だ一人の子分らしきものを有せざるに反して、星氏には已に氏に殉して悔ひさる數多の子分ある是也、蓋し伊東男は才を賴て自ら用ひ、子分を養ふの餘地なきか如きも、星氏の包容は其便々たる其腹と共に巨大にして更に一片稜々の俠氣人をして自ら恩に感せしむる者ありと傳へらる、唯その子分には太だ不潔の分子を混合し、氏をして往々其累を蒙らしむるものある亦已む可らざる處といふべし。

要するに此二人のものが伊藤大隈に代て今後の政界を兩分して、酣戰苦鬪、大に成敗を爭ふ可きは日尙遠からずといふべし、而して此際吾人が二人に惜しむものは其不人望なること是也、國民より未だ大なる信賴を得ざるのみならず、動もすれば指彈せられんとすること是也、政治家は宗教家に非ず、道德一片を以て律す可きに非ずと云へども、苟も公人として生活せんとせば自ら公人の德義に於て圓滿ならざる可らず、其二人のものか或は公盜と呼はれ、或は不潔漢と侮らるゝ、素より反對黨の中傷罵嘲に出てたるものも多かるべし、爾れども二氏未だ必らず潔白純正の名譽を負ふ可きの紳士にも非ざるか如し、吾人は吾國未來の最大政治家として二人の前途に尤も大なる希望を屬すると共にかゝる不潔の人物を以て神聖なる吾政界を代表せしめざる可らざるを悲しむ。大政治家に尤も必要なるものは國民の大なる信賴也、而して其信賴たる智を以ても得る能はず、勇氣を以ても得る能はず、實に誠心誠

意國を愛ひ、民を慮り、顧て一點疚しからざる正人端士にして始めて得可き也。想ふに二氏今後勝敗の分る處、事孰にてもより多く國民の信頼を荷ひ得ると得ざるとに在り。二氏たるもの今日に於て大に鑑みざる可けんや。

梅原龍北

常識以外の道徳

人の異常を喜ぶは一種の傾向として、普通に存する所なれども、自躰の角力取の如くならんを欲し、精神の鋭敏なる神經家の如くならんと願ふの類はこれやがて病的なるもの、決して穩健の調子とに見るべからず。即ち世人か其の理想標準とする所を常識の上に取らずして、常に之を天才の上に取り之を豪傑の架空なる傳說上に取らんとするか如きは、健全なる國民思想の養成上には、尠少ならざる害毒を流するものなり。教育上にて楠公の自殺談、孟宗の筍話しの如きものを以て、小兒の倫理思想を養成せんとするは、即ち常識に違かり、範を異常の人、及ひ場合、若しくは架空の傳說に求むるものにして、却て兒童の倫理思想を減退せしめ、所謂道徳と自己實際の境遇との間の連絡を絕ち、終に日常の細行は問ふ所にあらずなどいへる、雜駁極まる、病的倫理思想を張行せしむるの源となり、弊害の及ぶ所測るべからざるものあり、これ今日教育者の等しく認めて敢て異論なしとする普通の談なり。」然るに世には教育上に限らず、兎角一切のことを異常の標準に求めんとするの傾きありて、平凡にては面白からずと思へる結果、餘り意表外に奔せんとして、身を誤り、世を謬るもの少からず。これ一は人に異常を喜ぶ天然の心僻ありて、奇を逐ふ人情の常に基すものとはいへ、實は一個人としては個人の病性、社會としては矢張り社會の病的現象なれば、世を導く志あるもの丶、互に戒心すべき所なりとす。

偉人と天才との間には、何程の區別を立つべきものなるやは、甚た六ケしきことなるべしといへども、偉人とは常識を基礎として、其の總べての方面に圓滿に思

想の膨大せる人にて、天才とは精神の方面に充亢として頭角を現はしたるものなり。常人は常識の養成によりて、偉人を理想とすることを得べけれども、天才は一般に求めて得べき性質のものにあらず。例へはワシントンの如き人を思想中に浮ぶるときは、一種穏かなる情操心面に溢れ來るを覺ゆれども、ショッペンハウエルの如き人を想像すれは、何となく思想の一面亂調子となり、海波の洋々たる如くにはあらずして、彼浪の岩を嚙むか如き考を起すべし。其の何れか果して穏健なる思想の養成上の眞標準たり、何れか病的なる思想皷舞の魔藥たるべきかは言はずして明ならん。然れども穏なる者は面白からず、奇なるものは人を激するの道理なれば、ワシントンが他人と對談するさまを想像するより、ショッペンハウエルが婦人を罵詈する狀態を考ふる方、確に興味ありとは、誰人も一樣に感ずる所なるべし。斯く人の精神を引く力ある所、これ則ち病的思想の恐るべき所以なり。例へば人は立ちて步行すべきものなれども、越後獅子の倒行は甚た面白きか如し。さりとて立行は平凡なりとし、人々競ふて倒行を學ぶに至らば、其の受くる不便と、之より來す結果とは果して如何なるべきか。斯ることは固より實際上、世にあり得べきことにはあらざれ共、人か通例動もすれば、異常を標準とし、常識以外にて萬事を處せんとするはやがて之と同一理なり。而して今日の多くの青年子弟は、却て平穏なる偉人たるを期せずして、往々天才を望むの風あるは、則ち立行を止めて倒行を學ばんとするものにあらずして何ぞ。

又今日の人の一般に抱ける道德思想につきて觀察するに、忠といひ孝といふ其の理は固より動すべきものにあらざれども、甚だ形式に過ぎて實際に遠きの憾みなきにあらず。父母は唯其の病をこれ憂ふとか、冬は暖にして夏は涼うしとか、或は父母の側にありて常に侍養するとかいへば、支那の古昔にありては、兎も角も實際的のものなりしに相違なけれども、世の事情も變化して、子たるものが常に父母の側にのみ侍養するか如きことは、到底今の世にては行はるべきことにあら

ず、其の他支那にて實際なりしもの、今は實際に現はれぬことのみ多くなり、唯空に忠とは此の理、孝とは彼の理と、理窟のみを言ひ、實際如何にすればよきやと問ふときは、忽ち正成や孟宗が引き合ひに出さるゝことゝなり、家族が幸に風波もなく、十圓や廿圓の月給にて、通常の可もなく不可もなき生活をなし居るものは、誰人も彼を忠義者孝行者といふものはなく、一旦國家變あるの時、或は家事困厄に陷れる時など、之に處して志を致す時、忠臣と呼ばれ、孝者と稱へられ、世にも持囃され、新聞にも謳はるゝことゝなる。さらば忠孝は何處々までも異常の場合境遇に會せざれば、誰人も之を行ふ機會なきことゝなるべし。成程國家有事の時、家道沈淪の際、苦節を守り、艱難を忍ぶは、其の精神感服すべきことの極みなりとは雖、然し此等は唯其の開表せられたる時のみを以て、人の行爲の標準とすべきものにはあらずして、常に留意して圓滿なる常識の養成を期し、斯る場合に至りても、其の思想の堅確なるべき平生の用意こそ一般の心を置くべき所なれ。平日は空に形式的の實際に迂なる忠孝論を口にして、細瑾を顧みすなどいふ連中が、ひたすら異常の場合のみを妄想に畫き、之を理想とするか如きは病的の甚しきものなり。

且つ道德を始めより根本的に異常のことゝなすことゝ思へるものなり、甚たしき妄見にあらずや。勿論一般には斯る愚なる思想を有するものは更にこれなきか如しといへども、或る場合には、間ま此の弊害に陷りて自ら知らざることなきにあらず。世人は道德家といへば、雲照律師の如き人なりと直に連想し來りて、福澤翁の如き人なりとは從來思はざりしこと一般なりしは事實にあらずや。其の何の理由なるかを深く考ふるときは、まことに謂れなきものにして、唯其の道德家の標準を常識以外に求め、通常の生活は別段奇異にして眼を惹く所なければ、取立てゝ道德家といふほどのことはなし。然るに雲照律師の如きは、食は一日に一度なり、衣服は木蘭色か、鼠の木綿にて、すること爲すことが眼に立ち、奇にして面白しといふに過きす。

これ果して誤らざる健全の倫理思想が、世を指導し居ることを證し得るものなるべきか。

雲照律師が佛教の戒律を守り、今の世に於て腐敗せる僧侶中に一頭角を拔んでたるは、固より誰人も服する所なれ共、一定の主義あり、見解あり、信仰ありて、平和の生活を送る三田の故翁、否田舍の村夫子、長屋の漢學者、何故に道德家にあらざるべきか。若し此等の人々の行爲上の價値を批判せば、單に世人に及ぼす感化などの上より高下はあらん。よし高下ありとするも、なほ福翁は律師に上ること勿論なるべし。又高下なしとするも、此の場合に於ては、明に佛教の戒律流の道德が、日本の倫理思想鼓吹に適當なる眞標準を示すものなるやといへる理窟より見ざるべからず。余の如きは何の點よりするも、毫も目白派の道德鼓吹に贊成すること能はざるもの、之を以て穩健の思想を養成する道途に横はれる、妨碍物と見るの已むなきに至るを感ずるものなり。

彼の東亞佛教會托鉢行乞の時、各新聞社などが、何の見る所ありてや、之を歡迎して其の爲す所を助けたるが如きは、明に彼の病的思想の漲行に喝采せるものにて、其の影響する所は決して少しとなさず。斯る常識以外の道德思想の行はるゝことは、日本國家將來のために痛心すべき限りなり。（其の佛教を興隆せんとする赤心に出てたりとて、之れを感服するとは自ら別論なり。）況んや彼が如き行乞は、正當の意味にて釋迦の本意にもあらず、又釋迦の本意なりとするも、天下の最も卑しむべき行爲の、公然白晝に爲さるゝものたるに於てをや。

理性の發達せざる社會には、感情にて萬事万端一も二も裁斷するは常に見る所なるが、彼の世人が、動もすれば佛教の肉食妻帶を非難し、厭世主義を笑ひながら、しかもイザ實際となれば、忽ち態度を變じて、托鉢を歡迎するとは、何等の不明瞭なる理性ぞや。さらば彼等は果して心より佛教に歸依するかといへば、唯常識以外の奇行に驚きたるなりといふ位に外ならさるか如し。日本の道德界も、亦浮草の水上に標へるそれに似

たりといふべし。理性明瞭ならざれば、心の底には左にあらずと思ひながら、往々其の思ふ所に反對せる、意表外の行爲に拍手することあり。理性明瞭なれば、感情は一時我が心を動かすことあるも、終に能く截然と決斷し去りて一點遺憾の跡を止むることなし。若し道德に關する一定の主義見解あるものならば、其の行爲の稍人を動かすに足るものに遭ふも、能く之を將來の利害に照して、迷はず惑はず、俗論を排して直行し、顧みる所なかるべし。之によりて思ふに、常識外の幼稚なる愚昧なる奇異なる道德思想のなほ世に歡迎せらるゝものは、これ則ち社會全體の理性、甚だ低度の發達にあることを證するものなりと謂ふべし。

世界的知識の養成所

境野黃洋

完全なる博物館の欠乏

淺草公園に珍世界なる平民的博物館有り、入場券五錢、上野公園に帝國博物館なる貴族的見世物有り。木戸錢五錢、帝國博物館を以て實際博物館と稱し得べくんば珍世界も亦堂々たる一個の博物館なり、珍世界にして一個の見世物小屋なりとせば帝國博物館も亦憐れ千萬なる見世物小屋に過ぎず、只それ一は平民的、イラッシャイの掛聲にて客を迎ふると、他は貴族的、下駄の儘昇降を許さず此處脫帽すべしとの體裁の嚴めしき相違有るのみ、其出品や陳列の憐れにして意味無く統一無く、不秩序非學術的なるに至ては共に一なりとす、ア、堂々たる大帝國唯一の博物館にして此の如くなるもの、抑も帝國民全體の恥辱に非ざる無きか。

頃者聞くところに依れば、朝野有志の間、國立博物館なるものゝ計畫有り、已に調査委員を設けられ、從來の博物館とは全く面目を異にせる完全なるものを創設し、其費用の如き政府當局者に依りて次期議會に提出すべしと傳へらる、吾人素より其詳細を知らずと雖、我國の今日博物館需用の最も大なる時、其大體に於て既に歡迎の聲を發せざるを得ざるなり、博物館に對す

る吾人の所思を今日に披露する又無用の言に非るべし。

博物館の完成は大學の增設よりも急なり

博物館事業を以て泰平の餘事不急の事業と思へるは根本の謬想に屬す、博物館は獨り文明國の粧飾品國寶の倉庫に非ず、國民の世界的知識を養成し、實際的頭腦を發達せしむる一大學校なり、見よ最も世界に勢力有る國民は最も完全なる博物館を有する國民なるとを、即ち今日、我邦は二個の大學を增設するよりも、寧ろ一個の完全なる博物館を建つる方國民教育の上より見て遙に有効なるを覺ゆ。

吾人嘗て龍動サウスケンシントンの博物館を訪ひ、無量の感に打たれたることありき、その機械館を訪へば各種各式世界の有らゆるものを集め、その多くは電氣を用ひ觀者をして自由に運轉するを得せしめ、十二三歳の小學兒童までが來て嘻々思ふ儘に機械を弄するあり、その人類學の部に於ては保母に手を携へられたる幼兒が、北、ラプランド人の雪中生活より南、ニユーギニーの食人種狀態に至る迄一々實物に就て敎へられ彼は古代日本の甲冑を被たる武士是は現今支那の小足婦人なりと、僅かに五六歲の幼兒まで何等かの纒まりたる知識を得て出づるあり、或は生物室に書籍を携へ來て實物に對照して研究する學者あり、又繪畫室に古今の名畫に取り捲かれて己れの欲する繪に就て恣に描寫する妙齡の婦人あり、見來てあゝ幸福なる國民なる哉彼れアングロサクソン人が世界を見ること一家を見るが如き識見と、學術を直ちに事物に應用する實際的技能とは早く已に此間に於て養成せらるゝものなりと、吾人をして轉た健羨の情に堪へざらしめぬ。

吾人又嘗て伯林に於て諸種の博物館が學術的專門に分たれ、衞生博物館郵便博物館までをも完備し、我邦人が其郵便博物館に於て我國德川時代より今日までの郵政の沿革を初めて實物に就て研究するを得るが如き有り此現象は有ゆる他の我國事物に就ても悉く彼國各專門

の博物館に於て遭遇するを見、中心愧赧の情に堪へざりしと共に、彼獨逸國民が十九世紀末新興國の筆頭に數へらるゝ所以のもの決して偶然に非るを諒したることありき。

書籍を以て敎ゆるは學校なり、實物を以て敎ゆるは博物館なり、世界の縮圖宇宙の雛形、空間の上より渾球を一堂に縮むるのみに非ず時間の上より座して幾千萬年の古へを目睹し得、博物館の能事茲に至て了れりと云ふべし。

吾人は貧乏なる我國の今日に於て、沒分曉漢の多き我國の今日に於て、かゝる完全なる博物館の設備が一朝に望まれ得べしとは素より思はず、然れども已に博物館らしき博物館を要するの氣運となり、其設計談を耳にす、少くとも其方針は學術的のものなるべし、世界的のものなるべし、入場より出場其間何等かの纏まりたる知識を注入するものなるべし、唯田舍の赤毛布をしてデカイ金の塊りや鯨の骨にウッタマゲさするを本領とする見世物小屋流のものとは其撰を異にするなるべし、希くは一日も早く其設計の現實にせらるゝの日に會せんことを、唯望むところは此設計をして、單に短期に小規模を完成するものならしめんより、十年二十年三十年、他日世界に誇るに足る大規摸に進むの出立點となさんことにあり。

我國博物館將來の特質

世界的知識の養成所として秩序有り規律有る博物館の將來に發達せしむべきは言を待たず。其博物館をして世界に對し特に誇るべきの長所を具ふるに就て、我國が比較的利便多く、且つ亦我邦學者の義務として盡すべきは、印度以東即ち東洋の物品を蒐集するの一事にあり、各種の部門東洋の物品に關して完全の蒐集をなし、以て世界に類無きものとなし得るは我國最も好都合の位置にあり、此點は我國博物館將來の世界に誇るべき長所として今より注意すべきの事ならん。

憐むべし今日に於ては未だ内地のものすら整備する能はず、況んや隣國のものに於てをや、試みに我國人が東洋の宗敎に就て比較研究するところあらんと假定せ

よ、今日にては自國及び隣邦の事實を遠く西洋に到て研究せざるべからず、彼の伯林東洋博物館の宗教部、巴里ギメーの博物館等の整頓せる、博捜深尋到らざるなく、錫蘭孤島の悪魔踊（アビルダンサー）も、西藏山奥の喇嘛教儀も、緬甸僧の衣服も、支那道士の護符も、御嶽神社の御幣も、聖天様の本尊も、凡て禮拜所の雛形、其本尊、其經文、其敎具を集めて歷史的に分類し、印度教、火教、回教、喇嘛教、佛教、儒教、道教、神道、薩滿教、印度緬甸暹羅安南塞浦塞交趾の南方より支那日本朝鮮滿州蒙古の北方に至るまで、悉く一通りの比較研究をなし得るなり。只これ宗教に就ての一例なり、他東洋の事物委く然らざるはなし、是れ實に東洋獨立國の耻辱なり、我國將來の博物館は大に此點に意を注ぎ、少くとも東洋事物に關して世界に類無きものとせざるべからざるなり、而して此事たる我國に取て左までの難事にあらざるを信ず。

帝國東洋學會の創立は實に近時我國の世界に誇るべき新事業の一なり、能ふべくんば同會事業の一として將に起らんとする國立博物館と提携し、此點に力を致すあらんことを望まざるべからず。

富豪の密藏主義

我國富豪の所藏品に對するは總て密藏主義なり、箱入主義なり、持腐れ主義なり、獨り自ら樂んで衆と共にすることを思はざる主義なり、此主義は其物品を公開することを否むのみに止まらずして、博物館事業の如き社會公共の事に資を吝むの原因となれり。

今日此密藏主義の陋習を一朝に打破せんとする實に難し、止む無くんば恐れ多しと雖も、宮内省より其範を示し御物を公開し玉ふの一事有るのみ、此事曾て識者の議論に上りしこと有り、吾人も亦一言を費せしことあり、今更事新らしく呶々せんや、彼れ歐洲の各帝室が百事公開主義を採り、專制露西亞の如きすら皇城の内部皇帝の寢室まで衆庶の觀覽を許し玉ふあり、我皇室の尊嚴素より歐洲の各國とは同視すべからずと雖、差支へ無き限り我國の歷史、我國の美術等を研究するに材料となるべき御物の公開を許可し玉ふは、一面國

民の知識を增し、一面富豪の密藏主義を破る範例を示すの事となり利益計るべからざるものあらん。

思ふに平素我國に在ては平民の觀るを得ざる正倉院の御物も、其一部は昨年の巴里博覧會に送られ、錫蘭や埃及や亡國の建物と列を爲せるにも拘はらず、當局者の我國の美術を世界に紹介するの熱心なる、移に各國民に公開せられしを見れば、宮內省當局の意又決して密藏主義に非るを知るに難からず、希くば將に成立せんとする國立博物館の設置を機とし大に密藏主義を破るの範例を示さんことを。

述べ來て吾人の希望決して之に盡きずと雖、其細目を措て大躰の希望を述ぶれば此の如し、讀者の一顧を得は幸なり。

井上里山

龍動ブリチッシュ博物館は千七百五十三年に起原し千八百七十九年に世界第一のものとなれり

海外新潮

海外大勢

米國商工業の急進と歐洲の恐慌

「吾人は農業國民にして資金乏しく而も負債は積で山の如し」とは之れ前世紀の初年に於て時の大統領ゼファーソンが巴里の友人ディユポン、ドゥチムール氏に致せる書中の言なり蓋し之ミシシッピイ河口の島嶼幷に其左岸の一小地域を購入するに當り、代金支辨の資力なきを歎じたるものなり、然るに第十九世紀壹百年の星霜は斯くも憐む可く貧弱なりしヤンキーを化して以て世界最大の勢力たらしめ歐洲諸國をして却て之れが勢下に苦しめんとするに至れり、本年一月七日上院に於ける議員ロッヂ氏の演說に曰く

地圖を開きて一瞥すれば擴大なる國土は一政府の下に統一せられ、到る處として星條旗の飄々たるを見ざるなく、鐵道は太西、太平の兩洋を連結し湖沼海灣の間を串貫し、而かも歐洲は之を攻擊するに由なきなり、歐洲にありては幾多の邦國に分裂し、鐵道の組織は個々に分れ之が爲め生産費の上に於て非常なる增加を來し、彼をして到底我と相對立することを能はざらしむ、鐵、及び鋼鐵につきては現に彼を壓倒しつゝあり、他の商品に付きても亦着々として同傾向の進行しつゝあるを見

る、石炭市場の如きは實に其一例なり、極言すれば彼が最後の金城鐵壁たる運送事業も亦遂に我占有に歸す可きは照々火を見るが如く、最早一點の疑を容るゝの餘地なし、只剩す所は時期の問題のみ。……

其后旬日ならずして同じ事實は英國某商業會議所に於けるローズベリー伯の演說によりて確められたり、其一節に曰く

吾人の恐る可き强敵は合衆國と獨乙帝國なり、米國々民は廣大無限の富源を有し、營利に敏捷にして企業に長じ、人口は二十年を出でずして一億の上に出づべく、加之シンヂケート又はトラストの組織により團体協力して以て戰を挑み來たらんか、其鋭鋒盖し當るべからざるものあらん。

之れを英國以外の國に就きて見んか、米國炭は今や既に地中海諸港に侵入して充分の利益を收得しつゝあり、ニュー、ポート、モース及びマルセーユ間に三週一回の定期航路を開き、往航に石炭を齎らし西班牙の鐵鑛を載て復航しつゝあり、歐洲の毛織物幷に靴類につきても亦米國品の侵入頗る著しきが如し、獨乙に於ては之れが爲め五万乃至十万の靴工將に職を失はんとするの恐ありと云ふ、フランクフールテル、ツァイツングは米國が各國に對し債主たるの地位に立つに至れるは之れ實に時局を一變するものにして米國は米西戰爭以來世界歴服の世界的政策を初めたり、列國は將來國際的重要なる政治問題を解決するに當りては米國の發言の頗る貫目あるを了知せざる可らずと云々と云ひ、ヴィーネル、ターゲープラット、は曰く

列國が過大の軍事費に苦みつゝあるに乘じて無限の國富を有せる米國は次第〳〵に全世界の債主たるの地位を獲得しつゝあり、列國にして若し早くこれが警戒を加ふるにあらずんば、二十年を出でずして歐洲諸國は勿論濠州、日本、及び支那に至るまで悉く彼が債務者となり、遂に經濟獨立を失ふに至らん、而して之れが唯一の救濟策は現に各國の農工商業の發達に對する最大障碍たる軍事過重(ミリタリズム)の弊を一掃するにあるのみ云々

ジャーナル、オヴ、コンマース曰く

頗る重要なる關係に於て吾人は世界の債主國民となれり、吾人が倫動、巴里、又は伯林等の銀行力に依賴せるは最早や歴史的事實となり今や其中心は我米國に移り來れり。……現に歐洲の三大國たる英獨幷に露國は共に重要なる公債につきてはニューヨークに來るの必要あるを認め英獨は此に其功を奏したり、夫れ此の如しニューヨーク市は尚未だ世界財政上の唯一の中心たりと云ふ可らずとするも少なくも二三中心點中の主要部に立つものなりと云ふを得可し。

夫れ此の如し、歐洲諸國が一驚を喫するもの亦故なきにあらずと云ふ可し、米國商勢の侵入を防がんがため、歐洲諸國互に相聯結保助し一大同盟を以て之れに當る可しとの議は時節柄大に世人の注意を喚起するに至れり、之れ墺太利の外務大臣ゴルチロスキ伯の初めて獻策せる所にして以來勢力ある政治家幷に新聞紙によりて熱心に主張せらるゝ所なり、有名なる佛國の經濟學者モッシュー、レロアボーリューの主張せる要旨を摘めば

余輩の見る所を以てすれば今二十年にして其人口一億に達す可く五十年の后には一億五千万の上に出づ可き米國を眼前に控ゆる歐州は最早や經濟上幾多の小部分に分裂割據す可きの時にあらず、經濟的一大同盟を形成し聯合關税委員を常設し、漸々税率を輕減し以て歐洲諸國相互の間に於ける關係をして可成的密接ならしむるに力む可し云々。

ビクトリヤ治下大英國の全盛

ピクトリヤ治世の下に於て大不列顛の人口は千八百万より四千一百万に增殖し、之れに東印度、亞非利加の富源、香港、濠州及び其他諸島の獲得を加へて總計すれば三億八千八百万の生靈は一千一百三十五万五千平方哩の領土に繁榮しつゝあり、領域の大を以て云へば地球上また之に越ゆるの大帝國あることなく、人口に於ても亦僅に支那に讓るあるのみ千八百三十七年六月女皇位に即きて以來崩御に至るまで六十三年と半歲の間、其艦隊、その商業は向ふ所敵なく、その工業は世界を指導し、佛人が鐵と血によりて漸く得たる自由も英人は談笑の間に之を確立し其海岸は嘗て一度も外敵の爲めに汚されたることあらず。

文化の局面を一變したる蒸滊、鐵、幷に電氣は共に女皇の御代に於て其の效用を實現したり、鐵道、滊船、郵便制度、電信、及び電話等の應用は單に世界を縮小し人類をして益々密接せしめ、運送費の消畧によりて各般の供給を豐富ならしめたるのみならず、又同時に大に政治的關係を改良したることは已に評論家の等しく認むる所なり、下院代議士の撰出を平等にせる改革案は早くウィリヤム四世の時代(千八百三十二年)に於て通過したりと云へとも實際に其効果を見るに至りしは女王の御代にして遂に千八百六十七年の公權擴張となり又千八百八十四年幷に五年の改正法律となり、インクランド、アイヤランド、及びスコットランドに於て等しく普通撰擧の權を認むるに至れり、久しく貧民を困めたる穀物の輸入税は千八百四十六年に至りコブデン及びブライト兩氏の盡力によりて遂に廢止せらるゝこととなり、其結果社會一般大に活氣を加へ兵火に訴へて政治の革新を迫らんとせるチャーティストをして靜止せしむるを得たり、工業地幷に礦山に於ける男工、女工の憐む可き境遇及び幼者酷役等工業國に伴ふ可き各種の弊害は凡て一掃せられたり。



BARBARISM AND CIVILIZATION.
(From the *Cri de Paris*,)

殖民地の成功は實に特筆大書す可きものあり、就中千八百五十八年に於て東印度を收めたるが如きは其最たるものと云はざる可らず、濠州聯邦案は昨年を以て成立し其關係の確立せることは當時已に詳載せる所なり、北米に於ては千八百六十七年加奈太領の名に於て其地位確立し亞非利加北部にありては埃及國は事實上其領土となり了れるが如し若夫れ南亞に至りては世人の日々耳にしつゝある所なり。

女皇一代の成功は殆んど平和手段によりて得たる所なり、戰爭と云ふ可き程のもの只一度露國の南下を挫かんが爲め佛蘭西幷に土耳古と相結びて干戈を交へたることあるのみ、而かも此戰たるや實際に於てその戰局はセバストポールに限られたりしなり、然れとも其損害は決して少額ならず、英

國は二万四千人、佛國は六万三千人、而して露國は殆ど五十万人を失ひたりと云ふ、而して此戰爭によりて英國の國債は新に二億弗を加へたり、然れども女皇治下の英國は其一代を通じて云へば、世界に類無き平和的光輝ある大成功と云ふを得べし。

宗教道德界の前世紀

過去一世紀の間に於ける宗教界の進歩を評論するもの或は樂天的なるあり或は厭世的なるあり、マク、クルーア博士のハーパー週報に寄せたる所見を見るに氏は觀察の範圍を耶蘇教に限り歐米に於ける各種の文明進歩を以て凡て耶蘇教發達の賜なりとするの樂天觀なり、曰く、

政治的方面より之れを見れば耶蘇教理は國民生活と混和せられ、國家の健否は其治者并に被治者の行動が耶蘇教理に合致するや否やによりて判ぜらる、ジョン、スチユアート、ミルが國家に對する觀念も亦此に存するもの丶如し、立法を始めとして其他各種の國家の行動は凡て此に出でざる可らず、而して此の如きの國家のみ永く其生命を持續し其他の邦國は殖民地、屬國、又は勢力範圍等の名に於て前者の分割する所となる可きなり。

聖書の意義は領知せられ、其地位は確立せられ其効用は益々實現せらるゝこととなれり、批評激烈にして聖書中其効力又は効果に關係なき部分に於ては多少抹殺せらるゝ所ありしと云へども聖書其ものに至りては之れが爲め毫も其價値を損することなきのみか却て益々光彩を放つに至れり、前世紀は實に新舊聖書の眞偽、內容、并に目的に對する激しき批評の時代にてありしなり、其結果世紀の終末と共に聖書は方便にして目的にあらずとの定論を見るに至り、其職とする所は衆生を邪道より正道に導くにあること并に此目的を達するには聖書の最も適當なること一般に認めらるゝに至れり。

耶蘇教が次第に科學的となれるは十九世紀に於ける成功中顯著なるものなり、ジョウェット曰く宗教と云ふ名目は最も高く最も廣き意義に於ける科學と云ふことの代名詞なり、從て其性質は何人と云へとも其教理を否定することなく、任意に取捨す可きものにあらざることを認め、之れを離れては精神界の發達の得て望む可らざることを自覺する底のものならざる可らずと。

之に反してステッド氏が十九世紀の道德觀は爾かく樂天的なるものにあらず、即ち氏は前世紀に於ける物質的進歩の頗る顯著なりしに引かへ道德界に於ては進歩の更に人目を引くに足る可きものなく却て退歩の傾向ありとせり曰く

今日に於ける普通の男女は之れを一百年の昔に比して果して、より多く神らしき所あるか、各民族は果して理想的國家に近づきたるか、次來人類は著しく增加したり、此增加せる民衆は果して、よく善良なる人間なるか、社會の富は長足の增殖をなせり、而かも社會の愛は果して其量を加へたるか、愛の源は家庭にあり、其家庭は果して如何の變遷を經たるか。

二讃の黑雲は眼前に掛れり、家庭に於ける祈禱の衰微其一にして、離婚の增加其二なり、然れとも又一方に於ては兒童の幸福に對する注意は次第に惹起せられたり普通教育の强制は前世紀の賜なり然るに其結果として家庭教育衰へ從て兒童の教育上に於ける婦人の勢力は大に減殺せられたり只輓近に於ける女權擴張の運動は稍や之れを償ふに足るものあらん。

社會主義の發達は道德進歩の一と見る可きものならん蓋し是れ經濟界

に於て耶蘇教理を適用せんとするものに外ならざるなり、……奴隷廢止は十九世紀に於ける道德の偉績中最大なるものなりと云へども同じ事實は種々なる名稱の下に現存しつゝありて志士仁人の獻身を俟つもの決して少しとせず、云々。

墺地利の治國難

各派相確執し衝突に衝突を重ね遂に昨年開散を命せられたる同國議會は今回總選擧の結果只僅かに社會黨員の當撰を失ひたるものあるのみにして、大體に於ては形勢更に依然たるものゝ如し、元來同國は雜然として幾多の種族より成立し、各々固有の言語を用ひ、互に同族の權利を擴張せんことを之れ力めまた國家存立の安危を念頭に掛けず、互に相確執して融和することを知らず、之れが統治の難きは殆ど想像の及ばざる所なり、政黨と稱するものは之れ皆名のみにして其實各部族の相爭ふものに過ぎず、政治上の主義もなければ綱領もなし、獨り社會黨にありては其主張の善惡は兎も角主義を以て團結し綱領によりて行動し、而して人種の異同を顧みざるの團體にして同國唯一の政黨とも謂つ可く、世人は之れを以て各部族割據軋轢の寛和せらる可き徴證となせり、然るに事實は豫期に反して總撰擧の結果は却て同黨の衰勢を示し部族の確執は益々甚だしきを加へたり、同國々狀の通を以て自任する倫動スピーカーは曰く

渾沌たる墺地利の政治界にありて政見を以て立脚の基礎とする同國唯一の政黨たる社會民政黨は今回の總撰擧に於て一大打擊を蒙り其根據地たるボヘミヤに於て大に其勢力を失墜したり、抑も同國政治界に於ける焦眉の急務は黨派の基礎をして政見の上に確立せしめ以て從來に於ける部族確執の弊習を矯正するにあり、而して今や之れが幼芽たる社會民政黨さへ遂に腐敗し社會的、商工業的並に經濟的革新の綱領を棄て、再び部族割據の悲劇を演ぜんとす、云々。

昨年六月開散を命ずるに當り皇帝宣言して曰く改撰の結果若し一政黨又は政黨聯合の能く議會に多數を制し豫算を成立せしめ、次て國務の進捗を計るに足る可きものなくんば斷然憲法を中止し以て獨裁の政を行ふ可しと、而して改撰の結果は依然として舊の如く一政黨又は政黨聯合の能く議會に多數を制するに足るものなし、皇帝は果して如何の處置をとり以て此難關を排せんと欲するか。

海外 雜纂

博識先生の談片

▲クリミヤ　戰爭以來世界各國の戰爭費少く見積りて二百四十五億三千萬圓と算へらる、全世界の人間、男にも女にも小兒にも有ゆるものに二十圓づゝ與へて猶餘りあるの額なり

▲西歷紀元　より今日迄戰爭の爲に死せる人類は四十億万人に上る

▲平和時代　猶三百七十万人の現役兵を養はざるべからざる今日の狀態なり、其兵器、衣服、軍需品、食料、給料凡て陸海軍備の爲に世界は一日に就き百五十万磅を費やすと稱せらる

▲米國海軍　の全部完成せるは千八百八十八年以來の事なり

▲製艦費用　戰鬪艦は通常三百万圓より一千万圓、巡洋艦は百五十万圓より五百万圓、水雷艇は三十万圓まで

▲二重甲板　の船は初めて千五百九年、英國にて作らる、ヘンリー八世の命にて製造せしもの、名けて「グレートハリー」といへり、其製

造費一万四千磅にて噸數一千、當時の一万四千磅は現時の十二万磅即ち百二十万圓よりも高價なり

▲難破船數　バルチツク海にては毎日一艘の平均

▲最古燈臺　西班牙コルンナの燈臺さす、ツラヂヤン時代に創設せられ千六百三十四年に再築し今日までその儘なり

▲西班牙は　歐羅巴第一盲目者多き國なり

▲鑛物の種　類に富めるも又西班牙なり、地下採鑛の爲に働くもの六万人

▲西班牙の　領地全躰にて鐵道の延長僅に七千五百四十八哩、人口一万に對し四哩强の割合なり

▲音樂専門　の日刊新聞を持つは米國のみなることを斷言し得べし、シカゴ市に發行せらるゝプレスト新聞は之れにして年中無休刊

▲日耳曼は　佛蘭西より二倍の新刊物を出だす、則ち日耳曼は毎年二万種より二万五千種に上り、佛國は一万種に出でず

▲北米合衆　國の新聞、雜誌、報告等、定期新刊物、一万九千五百八十二は英語にて、七百四十一は獨逸語にて、六十五はスエデツシユ、五十六はスパニツシユ、五十一はプレンチボ、ヘミヤン三十五、ボーリツシユ三十三、イタリ二十五、ポーランド語さへプリユ語は各十八種

▲世界第一　の大形金貨は現今にては英貨の五十圓金なり、最小なるは波斯の八十錢强の金貨なり

▲英國金貨　に全國王の肖像を入れしはヘンリー三世を以て初めとす

▲歴山大帝　の崩御時代まで人頭が貨幣に鑄られしことなし、それ迄の貨幣は神像のみを入れたり

▲海豚の皮　にて靴組を作るは普通なれども之れにて靴を作ることを知るものは少し、海豚皮の靴は柔かく恰もゴム靴の如くして且つ水中を歩むに適す

▲五十噸の　重量ある鯨は馬力百四十五に匹敵し、一時間の游ぐ速力十二哩

▲五十九呎　の長さを有せる鯨魚を計りしに重量十四万ポンド、其中鯨脂及び鯨油の量六万ポンド、鯨油のみにては四万八千ポンド、鯨骨は三千ポンド

▲鰻が人間　を苦むるはボストン市のみならん、同市近來小き鰻が水道の濾過器を越へて鐵管中にて太り、時々流れを妨害することあり、家々の供水鰻の爲に止めらるゝこと頻々

▲鰻の皮を　以てナメシ皮の模造をなす製造業は、世界珍奇なる職業の一なり、普通のナメシ皮より柔かくして膠質に富む

▲亞弗利加　の蠻地ダホーメのウエルダーさ云へるところには蛇を本尊とせる祠あり、縱長き室内に一千の蛇を放ち僧之を守護せり、總ての色、總ての形、大小青黑種々の蛇が群居蜿轉せる状見るものをして戰慄せしむ、日々土人は小鳥蛙等を持ち來て此蛇神に供養す

▲細腰蜂の　頭をむしり取り、針の上に乘せて水及砂糖を與ふれば生時さ同じく口を開ひて吸ひ、直ちに食道より滴り落つるを見る、併しかゝる殘酷の戯れはなすべからず

▲動物にて　火を恐れぬものはなし、唯 Driver Ant のみ燒死するまで炭火を物ともせずして進み來る特性あり

▲金魚の原　産地は支那にして十七世紀初めて歐洲に輸入さる

▲ロンドン　ブリチツシユ博物館内には蛇の白骨のみにて又は鼠の牙計りにて作れる珠數有あり

▲無毛の犬　はメキシコが本場なり、支那にもあり

▲巴里には八万の犬あり、人口三十に犬一疋の割合
▲龍動巡査の數一万四千人、巴里は六千人、紐育は三千八百人、その巡査の取扱ふ事件の數、一年間に紐育は八万五千件、巴里は十万、龍動は十五万
▲ロンドンの巡査は一人に付き一年間に七人を拘引する比例なり
▲世界最高の家屋を有する紐育市も千八百五十年には僅に五階の家が最高のものなりし
▲萬里長城　最近の測量にて平均十八呎の高さ、一千三百哩の延長と確定す
▲北米合衆國は一千七百七十七年の十一月二十七日より仝三十日迄三日間ランカスターを首府としてその後引續きバルチモーア、ヨーク、プリンストン、アンナポリス、ニユーヨルク、ヒラデルヒヤに遷都し一千八百年費府より華盛頓に移り初めて永久の首府となれり
▲大英國の支配地は佛國の面積より五十三倍獨逸の五十二倍歐洲全面積の三倍半
▲三大聖地　佛教の佛陀伽耶、回教のメツカ、基督教のゼルサレム、其中佛陀伽耶は古代の遺物最も完全に殘り、次はメツカ次はゼルサレム、ゼルサレムの舊蹟周廻三哩、岩石を以て成れる山頂にあり、只古代の面影のみ殘る
▲耶教聖地のヨルダン川は世界河流の中、其長に比較して最も勾配の急なる川なり、一百二十哩間二十四の瀑布ありて三千呎の低地に注ぐ
▲マホメツトの墳墓ダイヤモンド、サフワー、ルービー等にて飾られ、其寶石の價のみにて二千五百万圓に上る
▲アルプス山は六國に跨る、墺地利最多く其分け前を持つ

▲ヘリゴランド、は漸次海に洗み行く
▲世界諸川の毎日海に注ぐ水量約三十六キユービツク哩
▲世界最深の鑛坑は白耳義のランバート鑛坑なり、地下三千四百九十呎に達す
▲露西亞のヤクツク鑛坑は地下七百呎に掘り下げて漸く土地の凍結を見ざるに至れり
▲地球若し大氣の溫熱を包擁する無くんば直ちに華氏の零下三百三十度とならん
▲月世界の山は最高三万六千呎あり、その三万呎以上のものは數個あり
▲燐寸最古の製造場を有する瑞典は毎年燐寸箱十億を國外に輸出す
▲墺地利の四人その死者百人中四十迄は肺病なり、獄窓の暗黑等種々の源因に依る
▲英國婦人は米國婦人に比して通常二吋脊高し
▲白耳曼は全國何れの地へも三分間五十錢にて電話を通じ得
▲電報の數　英國にて千八百七十年には六百八十五万九千百七十七通なりしもの、千八百九十七年には八千三百零二万九千九百九十九通に增加せり
▲卵の長帶　北米合衆國最近の公報に依れば全國卵の產出額一年八億五千万打(ダズン)、此卵を並べて帶させんか、地球を赤道に依りて十二週匝して猶餘りあり
▲獨逸には九千年間保險の時計あり
▲橙の木は通常百五十年間の古木にて猶實を結ぶことを得、最も古きは五百年を經たる全樹にして實を結ぶあり
▲バナヽを食料とせば一エークルの土地にて小麥を植ゆるよりは二

・十五倍の食料を得

▲亞剌比亞　人は握手の回數を以て親疎の度を示す、通常六回又は八回、握りては又握るウルサキコト此上なし

▲マニラ人　五歳以上となれば大抵煙艸を吹かす、家族團欒の時翁婆は素より妻君小兒迄悉く烟を吹かせ居るは奇觀なり

▲葉捲煙草　を日給の一部として兵士に給與するは伊太利のみなり

▲衣服流行　の變化全く無きはラプランド人ならん、一千年前の昔しも今日も全く異ることなし

▲モスコー　のカセドラルは羅馬のセントピーターに次げる金錢のかかりし寺院なり、外面の金粉のみにて目方九百ポンドの金を費せり、入口の戸は重量十三トンありそれのみにて六十二万圓を費せり

▲石鹸を使　用すること三千年前已に行はる、バイブルにも二回石鹸の字顯はる、數年前ポンペー市街の發掘にて石鹸製造屋を發見せり、千八百餘年の長日月當時の石鹸毫も形を變へずして其家に殘れり

▲滿月を見　ざりし月は千八百六十六年の二月なり、今年は一月にも三月にも二回の滿月を見て、二月には一度も見るを得ざりし、世界歷史有て以來一月全く滿月の無かりしは只此度のみ

▲ガラス窓　は鐵道よりも危嶮なり、毎年英國一國にて五百の人命は窓ガラスを拭ふ爲め高處より落ちて損す、但し此危嶮は日本の家屋にては無き事なり

▲大英國人　一日の生計平均して約二シルリング即ち一圓弱なり

▲教會堂に　て自由に煙草を吹かせ得るは和蘭の田舍のみなり

▲白人の髮　毛は其幅一吋の四百分の一

▲晝夜兼行　休みなく歩めば、世界一週に四百二十八日を要す、勿論世界を海山無き平地と見て

▲自轉車を　十哩間走らせば、その二十八吋の輪が回轉の度數七千二百回なり

▲印度人は　箱の中に反射鏡を用ひ太陽熱を利用して物を煮る機械を發明せり

▲記憶力は　冬よりも夏に強し、過食は記憶力の大敵なり、運動も然り、過度の教育も又然り、彼の四時夏の國に生れ世界第一の少食人種たり靜座を好む人種たる印度人が又世界第一の記憶力強き人種たるは之を以て說明し得らるべし

日本人の米國移住に就て

箕作佳吉氏の書簡

米國に於ける支那人の移住制限法は十ヶ年の期限を以て千八百九十二年五月五日より實施せられたるものにして明年を以て其効力を失ふ可きものなり、然るにカリホルニヤ州に於ては更に制限の必要を認めジュリナス、カーン氏は一月を以て同法律の十年延期案を提出し日本人に對しても亦之れを適用す可しとの修正を加へたり蓋し其理由とする所は千八百九十年に於ては日本勞働者の移住せるもの僅に二千人を出でざりしが以來十年を經過したる千九百年に於ては其渡航し來るもの毎週平均二千或は三千に上り、唯に米國勞動界を攪亂するのみならず、引て一般社會の利益を侵損するに至ると云ふにあり、而して同修正は兩國政府交涉の結果一時删除せらるゝに至りしと云へとも太平洋岸に於ける一般の感情は頗る激昂せるものありて何時日本人排斥運動の再燃せんも知る可らずと云ふ、本件に關し箕作佳吉氏が米國スタンフォード大學總長ジョルダン氏に寄せたる書簡は載せて米國評論二月の紙上にあり、文章流麗

立論確實優る見るに足る可きものあり（林董氏の「日本の進歩」などはトテモ比べものにならず）其内容を約言すれば先づ筆を幕末以來日米の干係に起し面白く而かも秩序正しく親交の次第を畧述し、斯かく親密なる友邦の間柄にてありながら、日本人排斥の企ある可しとは全く想像の及ばざる所なり、日本の移住者中には元より無頼の徒も亦少からざる可しと云へとも此等の弊害は兩國政府の交渉により外交上の手段を以て之れを除去することを得可し、然るに只單に日本人たるの故を以て玉石混合の排斥を企つるが如きは其何の故たるを解するに苦む所なり、米國は元之れ日本を誘ひて列國共同生活の伍に列せしめ、之を導きて文化の光明を拜せしめ又之れが國際的地位の改進には率先して大に力を致したるの友邦にあらずや、然るに今突然之れと對等の交際をなすを拒まんとするが如きは果して責任あるもの丶行動なりと云ふを得可きか、殊に東洋は二十世紀の中原にして米國の袖手傍觀するを得ざる所なる可し、然るに今好で日本と隙を生ずるが如きは果して米國の得策となす所なるか云々と云ふにあり、而して評論之評論記者は之に附記して、思慮ある米國人は冒々旬々氏の所論に對して賛同せざるを得ざる可し、吾人は特別なる干係ある日本との親交を破るの斷じて不可なるを知る、然れとも生活の程度を異にせる米國勞動者が日本人の競爭によりて受くる痛苦も亦甚だ大ならずとせず、而て日本の人口は耐へ得べからざる程過多なるにあらず、新領土台灣を始め其他附近の島嶼に於て十分之れを收用するの餘地ある可し、日本政府に於ても宜しく時局に鑑み相當の處置に出づ可きなり云々との意を述べたり。

◎鐵道布教◎

鐵道布教は米國西部に於ける傳道の新方法なり、布教列車に關しシカゴ、トリビューンの記する所を摘譯すれば大要左の如し。

布教列車の構造は大林に於て普通の列車と異る所なく只其結構の大なるのみ、室内式壇を設け優に一百人の聽衆を容れ、別に宣教師幷に其家族の住室あり、常に各町村の間に往來し凡五六週日の間一所に止まるを例とす、其成績頗好至る所として住民の宗教的幷に社會的精神を鼓吹し寺院の建立を見ざることと殆ど稀なり、現在八個の布教列車は西部諸州及びウィスコンシン、ミチソタの間に於て布教に從事しつゝあり、列車は良好の材料を用ひ其構造亦精巧なり、全長八十呎にして内五十呎は說教室に當て二十呎は宣教師幷に其家族の住室なり、絶えず修膳を加へて些の損所なし、列車の製造費は一臺七千弗を要したり、鐵道會社は大に本事業の爲めに同情を表し布教列車は無賃にて各地の間に逓輸せられつゝあり。……

鐵道布教の事業は九年前始めて之れを開始したり、以來之れによりて得たる所の成績を云へば七十の寺院建立せられ、五十四の俱樂部設置せられ、五十五人の牧師に對する永久の倚子を作り、百三十五の日曜學校は組織せられ、九百六十五人の洗禮者を出し七千五百人以上の歸依者を得たり。

コロラドの鑛業地、ウィスコンシン幷にミチソタの林業地を始めとして其他幾多の西境町村は布教列車によりて見舞はれ、到る所に歡迎を受くること巡業芝居に異らず。……

雜録

瓦礫

坪井正五郎

世間では不用の物の事を譬へて瓦礫と申しますけれども、日常生活上から評したら不用かも知れませんが、學術眼を以て見る時は必しも捨てた物ではありません。瓦の中にも色々有る。礫の中にも色々ありますが、今私の記さうと云ふのは石器時代の土器の類、石器時代の石器の類の事であります。先づ石器の方から記しませう。

我々が地上で拾ひ又は地中から掘り出す所の小石の中には角張つた物も有り、圓い物も有る。更に注意して角張つた石を見れは自然の結晶として角張つて居るのも有り、或る物の重みの爲めに壓されて割れたのも有り、間隙に延び込んだ植物の根の膨脹の爲め、又は間隙に染み込んだ水の氷結の爲めに破れたのも有りますが、是等と異つて或る目的の爲め故らに打ち欠かれ、扣き破られたとしか見られない物も有ります。圓みを帶びた物の中にも水中を轉げた爲め表面の自然と滑かに成つた物と、故意に擦り磨き、研ぎ減らされた爲め滑かに成つたとしか見られない物との別があります。」故意に破つたとしか見えない石缺け、故意に磨いたとしか見えない石ころは十の八九、否、百の九十八迄は石器時代の遺物であります。

又全部に人工が加へて無くとも一部故意に破つて有るとか、扣いて有るとか、凹まして有るとか、孔が穿つて有るとかして有る物も多くは石器時代の遺物で有ります。

扨破れた面や滑らかな面を見て自然の結果で有るか人爲の結果で有るか如何にして見別けるかと申しますに、先づ結晶體は自然形として取退け其他に於ては缺け方なり磨れ方なりに付いて次の諸點を注意するが必要であります。

(一)表裏兩面が好く對して居るかどうか。(對して居れば人爲と認められる。)

(二)左右均整で有るかどうか。(均整ならば人爲と認められる。)

(三)缺け方或は磨れ方が一點に向つて居るとか、周邊に向つて居るとか、或る定つた方向に従つて居る

かどうか。（若し左樣ならば、人爲と認められる。）

（四）缺け方或は磨れ方が放射的均整を保つて居るかどうか。（保つて居れば人爲と認められる。）

是等諸點の一つ或は多くに由つて人爲と考へられた上は、其石片の形狀を見て次の表の中、何の部に屬する物で有るかを考へ定めるのが肝要で有る。

（甲）打製、即ち打ち缺いて作つた物の中

（イ）主な部分が直徑二分位、長さ一寸位の棒で一端が尖り、一端が膨れて居る物は錐の用をなしたと思はれる。之を石錐と云ふ。

（ロ）長さ六七分、多少三角形或は菱形をした薄い物で、緣が刄に成つて居るのは矢の根の用をなしたと思はれる。之を石鏃と云ふ。

（ハ）長さ二三寸から五六寸位、扁平で紡錘形を成し、且つ緣が刄に成つて居るのは、主として槍先に用ゐられた物と思はれる。之を石槍と云ふ。

（ニ）長さ通常二寸内外、扁平で、三角形、楕圓形、長方形を成し、緣の一部に短い柄が付いて居り、之に反對の緣が鈍い刄に成つて居るのは、現存石器時代人民の所爲を參考すると獸皮の脂肪を削り去る爲めの物と思はれる。併し形に由つて是は飯匙又は石匙と呼ばれる。

（ホ）長さ通常三寸許り、扁平で、長方形、楕圓形又は分銅形、一端或は兩端に刄の有るもの。是には斧として用ゐられたのも有らうし、鍬として用ゐられたのも有るらしい。製作と形とに由つて之を打製石斧と呼ばれる。

（乙）磨製、即ち研ぎ磨いて作つた物の中、

（イ）長さ二三寸乃至五六寸、多少扁平で、全形は長方形、楕圓形、丸みを帶びた三角形等通例一端、極めて稀に兩端に刄の有る物は、或は庖丁の用を爲し、或は斧の用を爲したと思はれる。製作と形とに由つて之を磨製石斧と呼ぶ。

（ロ）幅二三寸、全形稍〻短刀の鞘に似て、一方の緣に鈍い刄の有るものは用は詳で無いが形に由つて石劍と呼ばれる。長さは完全だと一尺以上。

（ハ）長徑一寸五分位、或は更に大きな楕圓柱形の棒で、一端或は兩端に球が付いて居るか、又は兩端の細く成つて居る物は、是も用は不明で有るが、單に石棒と呼ばれる。完全な時には長さ二三尺。

（丙）諸技術混用製品中には

（イ）直徑三寸計り、蛇の目形で周邊に打製の刄の付い

て居る物が有る。之を蛇の目形打製石斧と云ふ。現存石器時代人民の所爲に比べて考へれば、中央の孔には棒を貫いて柄とした物と思はれる。

(ロ)右に似て周邊に磨製の刃の付いて居る物が有る。之を蛇の目形磨製石斧と云ふ。用も前と同様と思はれる。

(ハ)長さ一尺内外、長方形又は楕圓形で皿形に掘り凹めた物が有る。之を石皿と云ふ。但し其用は粉を製するに在るので寧ろ石臼の一種と申して宜しい。此事は完全な物の形と、現存石器時代人民の所爲とで推知出來る。

(ニ)長徑三寸計り、稍々扁平の楕圓躰で、一面或は兩面に煙管の火皿位の凹みが一個或は二個作つて有る物が有る。之を整形凹み石と云ふ。用は不明。

(丁)自然形に多少の人工を加へた物の中には

(イ)不規則形の石に煙管の火皿位の凹み數個を作つた物が有る。之を不整形凹み石と云ふ。用は不明。

(ロ)直徑二寸内外の扁平な圓石で、線の相對した部の打ち缺かれた物が有る。錘りとして用ゐたと思はれる。之を錘り石と云ふ。

(ハ)長さ二寸内外の細長い扁平で長軸の兩端に截り目が付いて居たり、兩端を過ぎた溝が作つて有つたりする物が有る。是も何かの錘りとしたらしいが、糸を掛ける様な形に成つて居るから糸掛け石と名付ける。

(戊)使用の結果摩滅或は欠損した痕を有する物の中には、

(イ)磨製石斧の刃の部に好く適合した幅の凹みが一條或は數條付いて居て、如何にも磨製石斧の砥石として用ゐられた様に見える物が有る。之を石斧砥と云ふ。

(ロ)細長い石で一端或は兩端に他の石を扣いた様な疵の付いた物が有る。之を扣き石と云ふ。

以上の諸品は皆石器時代の遺物で有りますが、此の如き石を調べて考へ得べき事柄は

第一　使用法　大小形狀使用痕跡等から推究し、又は現存石器時代人民の所爲と比較するが肝要で有る。(但し此比較は參考書或は諸人種日用品の備へて有る所で無ければ行ひ難い。)

第二　附着物　磨製石斧、石鏃、石槍には往々漆の様な黒色の物の着いて居る事が有る。是は柄を添へる爲に着けたものと思はれる。此の如き附着物

の有無も注意すべき事で有る。
第三　附屬物　漆の樣な物の着いて居る石器には柄
が添へて有つたと思はれる。附着物が無くとも形
に由つては柄を付けたと思はれる物も有る。錘り
石、糸掛け石の打ち缺き或は溝を見れば之を縛つ
た糸又は紐の存在が推知される。
第四　產出品　石皿を見れば粉の製られた事が分か
る。
第五　製造法　缺けた痕を見て缺き方を知り、擦れ
た痕を見て、磨き方を知り、孔を見て穿ち方を知
る事が出來る。
第六　原料質　石器の質を見て其發見地近傍に產す
るものか、遠隔地方でなければ產しないものかを
慥めるのが大切で有る。
第七　製造地　石器と共に未成品、缺け屑、原料等
が發見されゝば、其所が製造地と考へられる。是
等が見付からなければ、製造地は他に在ると云は
なければ成りません。
一寸した石片と思はれる物でも注意すれば斯く樣々な
事が知れて來るのであります。
前述の石器と共に左の諸性質を有する素燒きの土器の
破片が發見される事が有ります。
質　粗にして間に砂小石を含む。
色　濃淡の茶褐色、稀に黑色。
厚　二三分。（土偶、土版は更に厚い。）
模樣　沈紋即ち凹ました模樣、粗布を壓し付け又は
棒を以て線を畫いたのを常とする。時としては浮
紋即ち突起した模樣。（土を紐の樣にして表面に附
けたもの。）
此の如き土器は石器時代の物で有りますが、其中に左
の數種があります。
（甲）容器　飲食物其他の入れ物に用ゐたと思はれる
物。（椀、鉢、壺、高杯の類）
（乙）土偶　衣服を着た形に出來て居る。大小種々。
（丙）土版　長方形或は楕圓形。長さ三四寸。
是等の土製品を精査すれば次の諸事が分かる。
第一、用法　大小形狀使用痕跡で推察される。
第二　製法　土の固め方、重ね方で轆轤の有無、型
の有無が推知される。
第三　補修　破れ目を隔て相對して揉み抜き孔が有
れば、糸で結び止めたと云ふが知れる。又破れ口
に漆の樣な物が附着して居れば、繼ぎ合はせたと

云ふ事が知れる。

第四　装飾　時としては赤色に彩つて有る。又時としては土中に雲母の細片の雑ぜて有る事も有る。

第五　押紋　腹部の表面に存する粗布の痕、底部の下面に存する編物の痕を検すれば、布や編み物に關する事が知れる。（此爲めにはパテ或は柔い土を以て押紋の部を覆ひ強く押し付けて原形に戻して見るが宜しい。濡れ紙を扣き付け乾し上げ張り子の様にしても原形が現れる。）

一見價値の無い様な土器片でも調べ方に由つては是等の事を知る根據と成る。

石器時代の遺物は尚ほ他にも種々有りますが、此所に掲げたのが先づ主なので有ります。石器土器に關する事實を總括すれば更に左の諸事を考定する基礎となります。

第一　石器時代人民生活狀態

第二　石器時代人民美術思想

第三　石器時代人民交通貿易

本邦石器時代人民は何種族で有るか。其棲息時期は今を距る何程の昔で有るか。彼等と日本種族及びアイヌとの關係は如何で有るか。世界諸地方現存の石器時代人民に對する異同は如何で有るか。是等の大問題も斯かる調査の進歩に連れて漸次に解釋されて來るので有ります。瓦礫の學術的價値も又大なるものでは有りませんか。

此一篇は元來或る地方の學校の同總會の爲に起草したのですが改めて中央公論に掲げ、廣く世人の注意を乞ふことに致しました。

東京府下の暗黑面（其一）

山形東根

◎暗黑社會の一面として、娼妓に關する大躰の話をしたいと思ふであるが、讀者は斯かる問題を提出すると、實に汚はしいと感ずるであらう、併し現に同胞姉妹の中に其稼業をして居る者があるのであるから、其社會の半面位は承知して居る必要がある、題目は好ましくないが、之も社會研究の一端と思へば何んでもないのである。

◎さて東京の有樣を云ふに先たちて、全國の一般に關するとを話したい。勿論皆な統計的だ。併し全國のは新らしい統計は分らん故、三十一年の八月調査による。

先づ遊廓地數を見ると、五百四十六個所で、北海道の五十九は最も多く、次は三重の四十一、山口の四十一、新潟の三十一、靜岡の二十九等で鹿兒島は唯一ヶ所で最も少ない。中國は概して多く四國九州は少ない方である。

◎貸座敷數は一万百七十二軒で、大阪の千六百五十軒が全國の頭である。次は京都の九百九十五、沖繩の五百三十八、三重の四百九十九、東京の四百七十七、新潟の四百六十七、北海道の四百六十で、此等地方は娼妓の出稼を奬勵する地方だ、其自國に於て多いのは怪むに足らん。全國中最も少きは宮崎の十五軒である。

◎娼妓數は四万九千二百八人で、東京の六千六百五十七人、大阪の六千〇八十四人、三重の二千九百九十九人、神奈川の二千六百五十九人、北海道の二千四百九十四人、長崎の二千六十四人などは最も多い方である、それで東京は一軒に平均十四人、大阪は一軒に平均四人弱である。

◎娼妓周旋人數は、千二百七十人あるが、東京の二百三十四人、新潟の百八十三人等は最も多い方である。全國の娼妓に就ては、今述ぶるのが目的でないから、之れだけに止めて、東京の一地に限りて左に詳く記さうと思ふ。全國に涉ると非常に面白い現象はあるが、夫は他日に讓る。

◎東京の娼妓、貸坐敷と云ふのは、新聞などで時々見えるが、其時々の事だけて、詳しい調へを載せてないから、玆に少し累年比較て一般の狀態を記さうと思ふ。

◎明治二十四年より三十二年迄九ヶ年間の貸坐敷數累年比較

	新吉原	洲崎	品川	新宿	千住	板橋	八王子	府中	調布	總計
廿四年	一二四	九四	六二	三九	三五	一四	一八	七	一〇	四二〇
廿五年	一二八	九五	六二	三九	三三	一四	一八	七	一〇	四二四
廿六年	一三三	九一	六二	三九	三三	一四	一八	七	一〇	四三五
廿七年	一四七	一〇二	六二	三九	三三	一四	一八	七	九	四四八
廿八年	一四七	一〇八	六二	三九	三二	一四	一八	七	九	四四四
廿九年	一四九	一〇九	六〇	三九	三三	一四	一八	七	九	四五七
三十年	一五八	一二二	六〇	三九	三三	一四	一八	七	九	四六九
卅一年	一六六	一二五	六〇	三九	三二	一四	一八	七	九	四八〇
卅二年	一七五	一三三	六〇	三九	二九	一四	一八	七	九	四九六

◎此表によると、九年間で總躰で七十六軒增して居て、年々增減無きは。板橋、八王子、府中で、品川、千住、調布は五年來一軒づゝ減じて居る、增したのは新吉原と洲崎の二ヶ所に過ぎない。次は娼妓の數はドーであるか。

◎明治二十四年より三十三年迄十ヶ年間の娼妓數累年比較

	新吉原	洲崎	品川	新宿	千住	板橋	八王子	府中	調布	總計
廿四年	二、〇三四	九五八	五四七	四五四	四三五	一三九	一六五	五一	三六	四、八三九
廿五年	二、二八一	一、〇八二	六七八	五〇〇	四八四	一三二	一六九	四八	三六	五、四三〇
廿六年	二、〇八七	九九八	五一七	四六八	四一六	一五三	一五四	五一	七六	四、九二〇
廿七年	二、二三五	一、〇三四	五六八	四七四	五八〇	一五五	一五五	五五	三七	五、二一三
廿八年	二、四三七	一、一三六	五八〇	五〇八	三六一	一六五	一六一	六七	三一	五、四三六
廿九年	二、六〇七	一、三二四	六三一	五三四	四〇二	一七五	一四九	五九	三七	五、九一八
三十年	二、七三五	一、五七四	六八七	五三四	四〇八	一九三	一六七	六四	六八	六、三九三
卅一年	二、九三五	一、六三〇	六九一	五三七	四三〇	二一四	一七八	六〇	六八	六、七三三
卅二年	二、八九一	一、八三三	六八七	五三四	四三三	二三三	一六一	五五	五七	六、八七一
卅三年	二、四一七	一、四八九	五二八	四三三	三九五	一九三	一三八	五二	五八	五、六九一

◎二十四年より三十三年迄十ヶ年間の娼妓數は、各年末の現在數である、三十三年は自由廢業の結果で特別であるが、九ヶ年間の所で見れば二千餘人を增して居る、特に二十八年よりは驚くべき增加だ。新吉原と洲崎は、二十四年に比すれば八百餘人づゝ增したので、千住、八王子、府中、調布あたりは年々概して同じである。品川、新宿、板橋は多少づゝ增して居る。

◎然るに三十三年は例の廢業で、前年に比すると、千百八十人を減少して二十八年より少し多い位になつた。即ち

新吉原	四百七十四人
洲崎	三百四十三人
品川	百五十九人
新宿	百〇一人
千住	三十七人
板橋	六十九人
八王子	三十三人
府中	三人
調布	一人
計	千百八十人

を減じた次第である。今三十四年は如何であるか、恐らく減ずるであらう。

◎新吉原は人數の多いだけ、夫れだけ廢業も多く、洲崎も同樣である、八王子は人數の少ない割には廢業多い、救世軍の運動が影響したのである、板橋は靜かで運動はなかつた、人數の少ない割に廢業が多い、府中の三人、調布の一人は偏僻でもあり、影響が及はなかつたのである。

◎娼妓の年齡は、昨年色々注意もあつた故、今後は丁年未滿者は少なくなるが、二十八年と三十二年とを比較して見ると左の如き結果である。

	二十八年	三十二年
十六年以上二十年未滿	一、八二七	一、六三八

二十年以上二十五年未満	二、七二一	三、四八〇
二十五年以上三十年未満	七二八	一、五三八
三十年以上三十五年未満	一七六	二〇一
三十五年以上	四	一四
計	五千四百五十六人	計　六千八百七十一人

之で見ると二十年未満が少し減じて、二十年以上より三十年迄の者が大に増して居る、三十年以上が二百一人、三十五年以上が十四人とは實に驚くべきことだ。尤も昨年の廢業は老年者に多かつたが、三十五年以上で此醜業を稼ぐとは所謂山に千年川に千年の代物であらう。一方より見れば悲慘の極といふべきことで、可憐といふも愚かなる次第ならずや。

◎次に娼妓の生國別を見ると、東京の娼妓が何處の者が多いかゞ分る、從て國の習俗も察せらるゝのであらうが、二十八年と三十二年とを比較して見たいと思ふ。

	二十八年	三十二年	
東京	一、五八六人	二、一八二	▲
三重	六四三	八八一	▲
京都	四〇四	三二三	減
新潟	三六一	七八九	▲
愛知	三三二	五一二	▲
兵庫	二九九	一三六	減
大阪	二五五	一五三	減
岐阜	二二〇	五〇三	▲
神奈川	一八八	一六八	減
高知	一四三	一二四	減
廣島	一三三	五九	減
石川	一〇七	五九	減
埼玉	八五	一二〇	
和歌山	七五	三八	減
滋賀	六二	八三	
岡山	五九	二九	減
群馬	五三	八〇	
千葉	五三	一三四	▲
靜岡	四九	五九	
徳島	四九	二八	減
奈良	四七	三五	減
茨城	三四	七九	▲
栃木	三二	五七	▲
愛媛	三〇	一〇	減
長野	二六	四七	▲
福井	二四	四七	▲
富山	一九	二三	
島根	一九	一三	減
山口	一七	八	減
香川	一二	一六	
鳥取	一一	六	減

山梨	九	一一	
山形	四	一八	▲
福島	三	一五	▲
大分	三	一	減
長崎	二	|	
宮城	二	一七	▲
青森	二	|	
福岡	二	三	
鹿兒島	二	二	
熊本	|	一	
岩手	|	一	
秋田	|	一	
計	五千四百五十六人	計　六千八百七十一人	

◎二十八年に一人もなかつたのが、三十二年になつて出たのは、熊本、岩手、秋田で、前にあつて無くなつたのは、長崎と青森である。流石は東京だ、帝國の首都といふので、全國から娼妓出稼者を集合して居る。一二縣の外は表にある通り隅から隅まで女の標本が出て居るやうな有樣で、よくも斯う集つた者である。

◎▲印は前と比較して非常に增加したのを表したので、之で見ると、東京、三重、新潟、愛知、岐阜等の女が年々增加もし、又一番多數のものである。中國のものは概して減したが、關東は增して居る、東北人も增して來た、▲印を見ると關東と東北にあるであらう。之は何の現象か能く調ぶれば面白いと思ふが、千葉、茨城、栃木は特の外增し、埼玉、群馬も增して居る、又山形、福島、宮城もそうだ。

◎京都、大阪、兵庫等の減少は、何の爲めか、遊客の意氣變じて上方者を好まない風のあるのか、彼地方にて工業が發達して、日清戰爭後は紡績など非常の盛大で、女工の不足を訴へた位であるから、それも餘程原因して居ると思ふ。併し一昨年頃より大阪地方の工業は大に弱つたから、夜業も廢し、解雇者もあり、昨年の如き二万餘の女工が失業した、それで此後ドンな變化があるか、工業の關係で經濟が豊かであつたので、減したと云ふとは一理由とすべき價値があらう、東北や關東の增加は遊客がまさか、夫等國々の婦人を特に好むといふ樣なとでなく、矢張經濟の關係であらう、又關東や東北にもソロ〳〵おきやんが出て、少し開けたのであらう。滊車の便もつき、ヅー〳〵言葉の宮城野、忍などいふ昔かたぎの者が諸方に見るとであらうが、兎に角、關東、東北の不景氣は一因となつて居る、尤も女としては氣はきかず、ボンヤリであるが、俠氣や親切氣が多い、或は增加する恐れがあるとも思ふ。

◎次號には遊客の關係に就て統計的研究をしたものを揭ぐるが、餘程妙なものがある。

（未完）

湖山翁の詩を評す（續）

香山茂

弘化三年　仁孝天皇崩御の時翁、東叡山花下記事と題して、左の一絕句あり、

一陣風來寒夕陽。長歌短笛攪愁腸。如何遏密八音日。醉向花前各自狂。

詩工みならずと雖も、當時將軍あるを知りて天子あるを知らざる、關東士人の狀態を寫して、感慨自ら見はる、尊王論の勃興實に止むを得ざるなり、

嘉永二年彥根の藩老宇津木某海防準備のため相州の海岸を巡視するに當り絕句十二首を賦して時事を論じ警告する所あり、

夷舶蠻船來去頻。眼看瀛海結氛塵。戍樓近接鎌倉地。爲弔弘安英斷人。

何人慷慨策夷情。後有君平前子平。先見是明言已驗。莫將迂濶目書生。

其他、「神州萬古武風盛、莫作清兵孱弱看、」「太息近來輕薄子、却乘邊釁巧營身、」「鎖國堂々良法存、通商通信愼休說、」等是嚴の間部侯に呈する二十五絕句と同一の筆法、當時の詩史と稱すべし、

安政五年春初の作に曰く、

有魚在俎未全貧、有酒盈樽亦頗醇、唯怕諸賓談世事、機談世事不成春、

此年幕府勤王攘夷の徒を以て一網打盡、處士橫議の口を箝せんと欲す、戊午の大獄即ち是なり、翁の知己頼三樹諸人多く其羅網に罹り終に命を殞す、翁の如き亦殆んど免れざらんとす、然れども齡已に四十五、世故に長じ機智に富めるを以て、能く虎口を脫し、鴻飛杳冥、其跡を江湖に晦ます、此に於て北遊剩稿の著あり、曰く己未（安政六）北遊實に已むを得ざるに出づ、强て杯酒を借り、憂悶を排遣す云々、

孩嬰無智喩來難、問我遊山幾宿還、災後新居點突未。又將行李試閑關、

醉中隨處送居諸、身是昌朝放棄餘、狂放不成憔悴色、恐他漁父識三閭、

力めて語言を愼むと雖も、其中不平慷慨の心自ら言外に溢る、ア、人安んぞかくさんや、殊に昌朝放棄の餘といふに至りては、煩悶抑塞慰むるに由無きの極、反

言を以て之を出す、即ち脱網の魚と云へる意ならん、尊王攘夷は當時處士の流行熱なり、之に感染せざる者は人にして人に非るの看あり、而して幕府の有司は之を杜絶するを以て唯一の政策となす、之を抑壓すること愈々甚しければ、反抗の力更に加ふ、客氣に驅らるる者危難の其身に及ぶを顧みず、勇猛直進、幕府を倒さずんば止まずと覺悟せしに、湖山翁の處世に巧みなるや、左顧右盻終に深入りせず、隱忍韜晦以て明治の昭代に遭逢す、然らずして三樹輩と共に血氣にはやる事あらば、夙に靖國神社に合祀せらるゝなるべし、安んぞ今日の高齢を保つを得んや、翁自ら戯れて曰く、早く死んで神に祭らるゝより、一年も餘分に生きて、うまい酒を飲むことこそよけれと、曠達風流の言味ふべし、第二集は初集に比すれば老成圓熟を以て勝り、自ら一家の躰裁を具す、今其近躰に就て數首の佳作を擧ぐべし、

青山一髮海之東、目斷煙雲杳渺中、故人歸帆何太
晩、昨日今日好南風、（寄懷鷲津毅堂在房州、）

陸子辱名韓宅胃、青蓮坐罪永王璘、誰知吳下佯狂
客、早祭他年謀逆人、（唐伯虎）

孰爲有用孰無用、瞞遍圖書小院風、笑比删詩夫子
意、聖賢兒女一編中、（揚蠹魚自嘲）

酒旆招々夕陽斜、此生隨處弄春華、種花只種路傍
地、不要風光屬一家、（池塘栽花）

風調を以て勝るもの前一首のみ、他三首は意を以て勝る、種花只種路傍地、春光を壟斷せず、衆と共に樂むの心欽すべし、此の花を栽るの地は不忍池の傍にて、他年人健花能盛、或見湖邊勝事傳の句あり、事は五十餘年前にありて、爾來滄桑の變を經、翁も亦東奔西走、其栽植する所一株なりとも今日猶存して、春風爛熳の態を呈せば、實に文壇の一勝事ならん、鷲津毅堂曰く、小西湖東岸の櫻樹は、江湖社の諸人金を醵して栽る所なりと、詩人の用心須らく此の如くなるべし、唯杯を啣み筆を舐るのみを以て能事畢れりとなすべからず、信州地震の七律、蘭亭集字、等誦すべきものなり、余は殊に十二愛の第一、盆蘭を詠ずる詩を愛誦す、

我愛盆中蘭、意態何麗嫻、撮土同九畹、片石如深
山、靜坐聞幽馥、妙在有無間、

安政大地震の五言絶句は、翁の創格に係る、即ち湖山躰とや云はん、或人は評して新聞記事躰と爲す、猶一種の妙味棄つべからざるものあり、

一震威何厲、轟然翻地軸、家々皆倒摧、人々盡號哭、

震蕩勢未休、纔以親讐怒、四顧皆炎烟、逃避竟無路、
直疑滄桑變、更見玉石焚、一死免爲幸、其餘何足云、
東舍亡兒女、西鄰失僕奴、撥灰覓遺骨、焦爛無完膚、

菊池三溪の詎圖一炬咸陽火、焚盡三千銅雀花の如き巧妙無しと雖も、人を動かすの力却て此にあり、

湖山樓第四編は王政維新後に成れるもの多く、中に就て時事に關する作一二を轉載すべし、

鑾輿遠度幾山川。文武衣冠儀粲然。北狩南巡微古史。未聞盛典似今年。（戊辰十月朔恭拜東幸儀仗）

錦旆揚々照薜蘿。群靈掃路百神呵。翠華不用六龍駕。如此關山容易過。（函嶺）

唐室中興韓子筆。淮西勳業號無雙。我皇震斷真神武。剿賊功成不殺降。（恭讀十二月十日詔）

眼看祥光耀大瀛。嵩呼共祝頌承平。政權復古三千載。征討宣威十萬兵。恩賜杯深增喜色。陽和氣暢足歡聲。迎鑾有日知非遠。到底新京勝舊京。（己巳元旦朝東京城）

晴曒含瑞氣。天意表維新。兵燹去年夢。鶯花今日春。南山祺頌壽。東海豈揚塵。朝野齋懽際。深哉化育仁。（元日當直府仰有感呈山内容堂秋日古香二君）

天祖神靈長照臨。紀元開曆亦天心。二千五百卅年後。更頌泱々德澤深。（明治六年一月一日作（今年始頒太陽暦紀元二千五百三十三年））

回首曾遊癸甲際。何思此地有今年。萬燈照徹玻璃障。不夜城中被酒眠。（宿橫濱聚遠樓）

これらの諸作を誦すれば、維新中興の光景宛然目に在り、千百載の後史を編むものをして、參照する所あらしめん、殊に感歎すべきは平易の文字を使用して、自ら莊重典雅の躰を得るにあり、是れ翁の本色、名聲隆々他の詩家を壓倒するもの偶然にあらず、試に今日の詩人が此種に似たるものを作るを看よ、徒らに字書多き僻字を用ゐ、鈎章棘句艱澁に失し、以て古雅なり典麗なりと相誇る、其實一時を糊塗して人目を眩ますのみ、

名在朝班僅十旬。鶯花風暖故郷春。老親喜我歸來早。言笑如志病在身。

此詩明治二年故山に歸省して作る所、十旬朝班にありとすれば、翁も亦功臣の一人、されども平々凡々を以て青雲の志を逞うせんこと到底望むべき覺束無し、餘程うまく往きて巖谷一六、三島中洲位なものならん、寧ろ江湖に睥睨して詞壇の耆宿と仰がるゝこそ、異日の地を爲すに得策なりと、翁の處世に巧みなる早くも看破して、身を閑雲野鶴に委せり、文房四詠の中に

巻舒猶有時、用捨豈無地、可以補破窓、莫以爲名刺。（殘筆）

干戈纔戢後、功利盛興時、拈起禿殘筆、閑寫迂拙詩。（退筆）

物に寓して身分を寫し、感慨自ら見はる、ア、翁の身分を忘れず、巧に地步を占むるは、獨り詩に於てのみならず、詩人として處世の秘訣を得たり、此點に於ては故海舟老伯と相似たるものあるが如し、一は政治家として一は詩人として、世外に超然たるが如きも、其實巧に世間を瞞過し、優遊自適放言壯語の中用意細愼の處あるは、所謂年の功と云ふべきか、彼は旗本氣質の大成したるもの、此は江州氣質の老熟したるもの、江戶と江州、文字も亦多少の因緣あるに似たり、

六十歲兒三歲兒、日食牛乳滋味厚、大人不失赤子心、此語鄒孟許我否、

游戲の作と雖も亦翁の詩風を窺ふべし、

粗率凡庸是我詩、敢忘前輩賜箴規、腎雕肝琢孟郊派、孰若香山平直辭、

愛讀前賢高古詩、六朝金粉奈浮詞、師門去短尋常事、罵祖家風亦一奇、

粗率凡庸平直の辯、是れ翁の自ら揚言する所、即ち白樂天に尸祝して、金粉塗抹の作を喜ばず、故に翁の詩を讀むもの亦其意を領すべし、然れども翁今日の地位を得るは文字よりは寧ろ經歷と氣象にあり、單に詩人としては枕山春濤に及ばざること遠し、是れ恐らくは余一人の言にあらず、翁自身と雖も然りと首肯せん、されば區々の毀譽翁に於て何かあらん、讀者漫りに余が先輩に對する妄言を咎むることを勿れ、

教界の人物

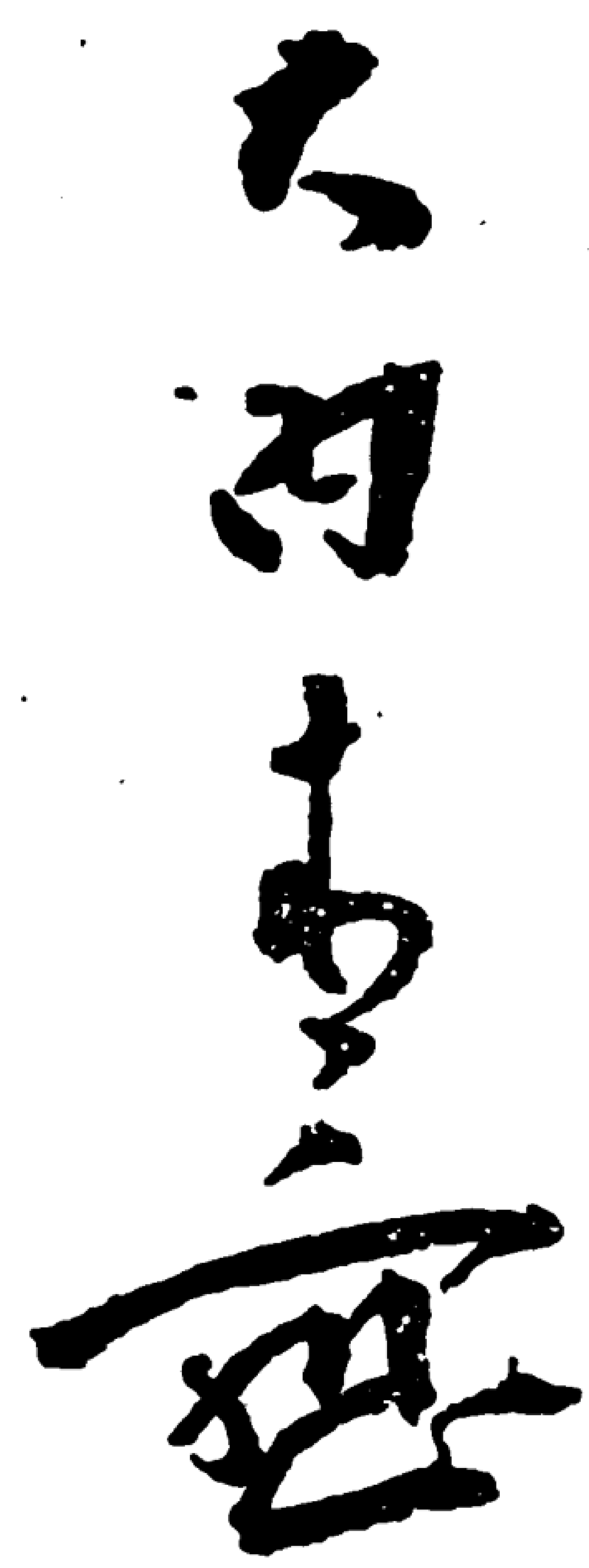
哄堂隱士

（七）大内青巒氏（佛教信徒禪宗派に屬す）

演說家として流暢の辯、能く聽者をして感動せしむるに足り、文章家として圓熟の筆、能く讀者をして首肯せしむるに足る、漢學あり、佛學あり、詩を吟し、歌を詠し、書を能くし、篆刻を能くし、顏豊にして肌肥、容躰如何にも大家らしく而も人をてらさぬ愛嬌あり、口も八丁手も八丁、殆んど完全に發達したるか如きは夫れ大内青巒氏なるか。

想ふに尊皇奉佛大同團の出來たる時分より「宇宙の光」の歌はれたる頃までは氏が教界の流行兒として得意の

絶頂を踏みたる時なりしか如し、都下の如何なる演說會にも氏の出席を見ずしては何となく物足らぬ心地を起さしめ、如何なる講筵も氏か出講を見るに非ずんば・多くの青年學生を惹くに足らざりしは實際なりき、氏は是の如くして到る處に喝采せられ、到る處に感服せられ、一方には青年學生を率ひ、一方には都下有力なる實業家を誘ひ、身は白衣の一居士を以て天下滔々たる僧侶を睥睨して隱然敎界の大先達たらんとするの地步に進みたりき。



爾り而して爾來七八年、上宮敎會の面白からざるより氏は稍く社會に遠からんとし、社會も亦稍く氏を忘却し去らんとするか如し、少くとも都下の青年學生は今や稍く氏其人の名を口にせざらんとするが如し。人は之を以て氏の思想辯舌のモハヤ今日の青年を揺撼するに足らざるに歸す、而れども吾人は信ずる能はず、よし若し然るものあるもそは唯氏自ら求めて然かする處にして氏の頭腦素より健全なりと云ふ能はずと云へども未だ是の如く耄碌するものとは覺へざる也。想ふに自ら理由あるべし、理由とは何ぞや、曰く氏が田舍巡りのみ、一年三百六十日殆んど中央敎界を顧みずして汲々として田舍ものゝ機嫌を取りあるく是のみ、中央敎界に在らずして中央敎界に忘れらるゝは自然の結果にして演說を以て稱せられ、講義を以て感嘆せられたる氏が演說をなさず、講義をなさずして人の稱する處とならざる今更怪しむに足らざる也、爾れども注意せよ、如何に萬能の氏なりとゝ爭てか時勢の變化を制せん、今日時勢の急轉は一日見ずんば茲に一日の變化をなし、二日見ざれば茲に二日の變化なす、矧んや一年の殆んど過半を通して中央都府を離るゝの間、思想界は如何に大なる變化をなすかを想ふ可き也。注意せよ注意せずんば氏の思想も辯論も所謂「時勢後れ」の陳腐論となりて耳を假すもののなきに至る可し。殊に氏が能辯と氏が才力と氏が名聲とを以て質樸なる地方人士を動かすに於て素より易々たらんのみ、それ唯易々たり、氏を刺激し氏を琢磨し氏の人物及び思想を練試すべきものの一もあるなし、得る處は唯尊大の風、コケお

どしの風、謝金を貪るの風ならんのみ。人素より匏瓜に非ず、繋て食はざるを得ずと雖も其食ふことにのみ熱せんとするに至ては先覺者の責務亦何の處に在る、吾人は氏を以て先覺となす、教界が氏によつて警覺せられ、奮興されたるの事、何ぞ一にして限らん、而して今日の教界が倘氏の腕力に待つ可きもの蓋し地方廻りの演説のみにして止まんや、而して氏、今や稍く先覺たる資格を失して世の貲談僧、演説ッカイの徒に之れ隋せんとす、氏に於ては取らざるのみならず、教界の爲め尤も惜しまざる可らず。

聞く、氏曾て其門下の士に語て云へり、卿等若し予が退隱す可きの時到れりと想はゝ遠慮なく忠告をなし見るべしと而して人の未だ退隱を忠告せざるに先ち氏は既に自ら退隱の策を取らんとす、豈又た惜しむ可きの至ならずや。

芸窓偶筆

櫻所居士

〇秋月侯種穎

上杉治憲侯は世に鷹山公と稱して、仁徳の名高し、然るに同侯の實弟たる秋月佐渡守種穎侯も、小身とはいひ乍ら頗る仁政を施されし人なり、兄弟文學を以て名を知られ、或は兄弟武勇の名あり、又は兄弟顯貴に至るなと其例少なからす、兄弟仁徳ある治憲種穎二侯の如きは、蓋し太た稀れなるへし、而して鷹山公は人之を知らさるなし、秋月侯の事人之をいふもの寡し、故に特に左に揭く、

或年高鍋（秋月侯の居城ある所）大旱なりけれは、諸寺諸山に雨乞の祈禱ありしかとも、其驗しなく民の歎き大方ならす、侯深く悲まれて、城下より二里計り隔りし三山の麓に在ます、御氏神比木大明神へ炎天に跣足にて社參ありて、雨を乞ふへきなりと既に出らるゝ所に、長臣強て諫むるに因て種々の供物等を献せられ、丹誠を凝し祈念ありけれは、俄かに大雨降出して、他領佐土原飫肥まて潤ひけり、

又近頃城下に火事ありて、人家多く燒失せしかは、急に粥を以て人別に下され、且平時鷹野なとに用ゆる假小屋ありけるを、悉く出して急に掛させ、窮民は當分爰にて住へしと申渡され、其上普請料助として、一人別に大なる材木四本つゝ下されたり、皆冥加に餘れはとて辭退せしも多し、

又領分へ觸られて困窮の者大病の節は、醫者は別して太切に療治すへきなり、何者によらす高直の藥種求め兼る品あらは願出へしと仰られし、

又丑年打續き凶作故、好の煙草まて用ひられす、御手元此の如くなれは、下々も心服して何に限らす費へのなき様を第一とせり、故に此領分は餓死する者一人もなし、

又或時鷹野に出られしとき、百姓ともの辨當を田の側に置しを見られ、此を自ら拔き自られしに、芋の葉の如きを多く入れたるあり、或ひは荒き稗粟の團子計なるもあり、つく／＼と見て涙を流され、強く働く百姓とも、麥飯たに食ふこと能はす、斯く乏しき食物なり、何れも是を知て自分を愼み下を憐むへしと、其日供にありしもの呼出し各一口つゝ之を食せよと、先自身より召れけり、替りに今日携へられし辨當を百姓へ下されし、皆其御仁慈をありがたく思ひて、只上の安泰を祈りけり、故に上納の事は催促を待すして力を竭して致しけり、又自作の書に卿黨學規と名付て、人々心得の事を假名に記し在所へ一部つゝ下され、毎月朔日に町は年寄在は庄屋の方にて、其支配の者へ讀聞すへしと命せられしとそ、

○滑稽の效用

滑稽は中々効能あるものなり、故に司馬子長はその史記を書くにあたりて滑稽列傳といふを置き、淳于髡。優孟。孫叔敖なといふ人物を列記した、併し是れ等は兎に角立派な人物てあつたと思はれる、そこて天道恢々豈に大ならすや、談言微中亦以て紛を解くへしと冒頭を置てある、淳于髡や東方朔は專制の君主を眞面目て諫言しても容れられぬ様なことを、談笑の間に君主をして曉悟して其非を遂けさらしめたのてあるから、其功力は直言直諫にもまさるのである、是は滑稽の上乘てある、

さて其次は機辯即ち頓智を以て人にへこまされぬと云ことか、滑稽家の長する所てある、四方に使して君命を辱めすといふことかあるが、目今外交官として外國に駐剳する人、又は外交上の事を措辦する官吏、その他議員となりて議場に辯論を鬪はすものなと、專ら自衛の爲に三寸の舌を揮て、人の爲にへこまされぬ用心なかるへからす、へこまされぬと申て徒に惡言怒罵を以て之に報るは大人氣かない、そこを圓轉滑脱甘く敵手をやり返すのか滑稽の妙てある、こう云所の才辯は法律家てもいかす、演説家てもいかぬ、まづ禪學ても

、やつた人が甘いかも知れぬ、
昔し一休和尚が一路(和泉堺浦の人)和尚に戯れて曰、萬法皆有レ路。如何是一路と、一路聲に應して對て曰、百事皆可レ休。如何是一休、是は一寸道化問答の氣の利た樣なものだが、禪僧でなければ斯いふ風に甘くは出ない、
昔し南郭が徂徠の所へ尋ねて來た、折ふし小倉百人一首を取出して、其中の人名と歌の初の言葉とを結ひて、大江千里月といふ詩句にとりなして打吟したれは、南郭も考て春道列樹風とうたつたといふ、是は人のよくいふ話なれとも、徂徠と南郭の腕前が見ゆる、
山陽か書生の時分に菅茶山と同伴して歩行た、茶山の羽織を見て

　いつ見ても久しくなりぬ麻羽織

とやつた、茶山取敢ず

　足下のはかまいくよへぬらん

とつけたといふ、是は山陽がいつもよこれた袴をはき居たれはなり、
又或人が山陽に詩を作る法を問ひしに、答てなに六かしき事もなし、唯起承轉結といふことあり、それを知るには童謡にも自ら起承轉結ありて心得やすし、この頃の流行謡に、

大坂新町紅屋の娘(起)姉は二十一妹は十九(承)
諸國諸大名は弓矢で殺す(轉)紅屋娘は目で殺す(結)

是よく起承轉結の法に合へるものなりと語りしと、
又滑稽を述懐めきたる事に用ゆることあり、狂歌柳樽なとの類に多し、例せは太田南畝が或時品川の妓樓に宿し、翌朝引手茶屋に來りて書付を出し拂を乞ふ、その頃は貳朱といふがお定りなりしに貳朱と百文といふ締高なりしかは、

　ほのぼのと品川沖を見渡せは貳朱は定り百惜ぞ思ふ

又白川越中侯が補佐職となり、文武に出精せよと大に文學武藝をはけましけるとき、

　夏の夜に蚊程うるさき物はなしぶんぶ／＼と耳に障りて

又そのころ

　靜謐(青漆)といへともはげる紙合羽油斷のならぬわめか下かな

なといふは、多少諷刺の意を寓したり、
東坡といふ人は宋代の一大奇才であつたと云ことは論を待たぬ、此先生滑稽にも長じた人であつて、百東坡なと丶いふものがあつて東坡の面白いはなしがある、

其中の二三を玆に錄せは、或時東坡か佛印に戯れていふには、拙者嘗て古人の詩を讀むに、「時聞啄レ木鳥。疑是打レ門僧、又云、鳥宿池邊樹。僧敲月下門、古人か必す鳥を以て僧に對したと思へは、未た嘗て歎息せすんはあらす、自ら深意かあるといつた、佛印曰く、是老僧か今日常に學士（東坡を指す）に對するを得る所以てござると、流石の東坡先生も返答かなかつた、」

東坡の小妹も詞賦を善して敏慧多辯なり、其額廣くして中高し、東坡之に戯て曰、蓮步未レ離香閣外。梅妝先露畫屛前。妹即ち之に應て曰、欲レ叩ニ齒牙一無ニ覓處一。忍聞毛裏有レ聲傳と、先生鬚髯多きを以てなり、時に年十歳なりしと、聞く者絶倒せさるはなかりしとぞ、

僧貫休機辯なり、杜光庭其鋒を屈せんと欲す、相見る毎に必ず其擧措を伺て戯調す、一日轡を通衢に舞すに因て貫休か馬忽ち糞を墜す、光庭大師大師數珠地に墜つと連呼す、貫休曰、數珠に非ず蓋し大還丹のみと、」

盧思道陳に聘す、陳主觀世音の語を以て思道を弄して曰、是何の商人か重寶を齎持するさ、思道即ち觀世音の語を以て報して曰、忽に惡風に遇て羅刹鬼國に漂墮すと、陳主大に慙たりといふ、

又この滑稽を實行する人かある、日野權中納言資朝が内大臣實衡卿と上直したるとき、奈良の僧靜然の參内するあり内大臣は其腰曲りて眉毛の白きを見て敬ふ色あり、資朝他日老たる狗の皮毛悴落せるをつなきて、實衡卿に贈て曰、此物敬すへき資格ありと、是は滑稽を實行したるものとも謂はんか委くは徒然草に見ゆ、支那にも是に似たる事あり、李寰といふ人か晉州に武官て在勤したとき、其表兄武恭といふものか性質誕妄にして、然も有道の君子を氣取り、且古物を蓄ふ、李寰か誕生日に何も贈るものかない、乃ち箱に一の古き皂襖子を擎て寰に與て曰、此は是李令公が京師を收復せし時服する所なり、願くは僧か功業一に西平に似んことをと、寰書を以て謝した、後に武恭か生日を聞知り、箱に一の破れたる幞頭を擎けて恭に餉て曰く知兄深く高眞を慕ふ、一の洪崖先生が初て仙を得し時の幞頭を求得たり、願くは兄道を得ること一に洪崖が如くならんことをと、賓僚大に笑はぬはなかつたとある、又江夏の王義恭といふ人も性古物を愛し、常に遍く朝士に就て之を求めた、侍中何勗も已に此に送る所ありしかとも、王は猶微索して已まぬ、何勗甚不平てあつたか、或時出てたるに道にして狗枷と敗れたる犢

鼻褌のすてゝあるのを見付た、即供の者に命して之を取らしめ、家に還てこれを箱に入れさせ、恭しく之を王義恭に送る、その牋に曰、復古物を須ることを承はる、今李斯か狗枷相如か犢鼻を奉る云々と、是よく前の李寶の事に似たり、

維新後土佐の士族か大隈參議の邸に古犢鼻褌を奉書につゝみ太水引をかけて進物にした者かあつたか、是は唯臺灣事件の差もつれか、大久保辨理大臣の渡淸して平和に局を結びたるを不平とし、當路大臣にその不平を漏さん爲なりしかば、遂に汚穢なる犢鼻褌を音物とし、大隈參議の邸宅に推參したりとの廉を以て、不應爲重きに問はれた、是は滑稽の大失敗とも謂ふべく、また滑稽の部類にはかぞふべからざるものである、

九年母の江南より渡りし初に是は珍菓なりとて、濱松の德川家から相州小田原へ少しばかり使者を以て贈られた、すると北條の君主は九年母といふことを知らず、小大名が十個か十二個の蜜柑をはる〳〵少しばかり贈たと大に冷笑し、跡より蜜柑一千個を大きな箱に一ぱいつめて人足數十人でかつがせ三河へ使にもたせてよこした、家康公之を御覽じて、北條も遠からず亡ぶるであらう、小田原の主從未だ九年母あるを知らずして之を蜜柑と思た（即ち菽麥を辨せざる愚人なり）と見えると申されたと云、是等は滑稽の大失敗であつた、

序に記す、滑稽の解釋は史記の註に二樣に說明してある、滑は亂なり稽は同なり、辯捷の人非を言ふ是の若く、是を言ふ非の若し、能く同異を亂るなり」と、是は烏を鷺といひ鷺を烏といふ如きものか、又一に云酒器轉注すべし酒を吐て已ます、俳優の人詞窮竭せず、滑稽の酒を吐て已まさるが如し」と、是は酒器の名としたる解釋なるが、前の能く同異を亂るといふ方、機辯を弄すといふ意に叶ふものゝ如く、詞の窮竭せずといふのみにては面白からぬ樣に思はる、

○玄宗帝の斜視

彼沙上鳧雛傍㆑母眠といふ詩句を、唯尋常に解釋しては妙味が分らぬ、沙といふたは胡沙の沙て胡人を指していふ、鳧雛といふは安祿山か事て、楊貴妃は祿山を子とした、然るに貴妃は祿山と私する所ありしを、沙上鳧雛傍㆑母眠と作つたのである、斯解釋すれはどうも此詩には言外の妙味かあるなといふことだが、又かの君不㆑見路州別駕眼如㆑電。左手挂㆑弓横撚㆑箭といふ詩の注に、路州別駕は唐の明皇なりとあつて、尙書譚錄に明皇は一目微く斜なるあり、故に横撚箭の將と

なすとありて、この詩の横にといふ字か、明皇の斜視であつたことを云のであると、中々唐詩の解し難いといふことは、是等ても知るべしてある、

○蘇東坡と司馬温公

東坡は宋代屈指の文豪て、また有數の奇才である、然しあの人は才餘りありて德行が足らぬ、是が温公に若かざるは勿論、君主の信任も王荊公の樣にはいかなんだと知らる、何となれば薄々酒といふ詩とその自序で分る、

薄々酒

膠西先生趙明叔。家貧好ㇾ飲。不ㇾ擇ㇾ酒而醉。常云。薄々酒勝ニ茶湯一。醜々婦勝ニ空房一。其言雖ㇾ俚近ニ乎達一。

薄々酒勝ニ茶湯一。粗々布勝ニ無裳一。醜妻惡妾勝ニ空房一。

是が宋代の尋常儒人の口より出たる否筆に成る者とすれは、左まで怪むに足らぬ、それても宋祚の漸く衰頽に傾く士風如此であるといはねばならぬ、然るに當世第一の文豪たる東坡先生にして、尙且如此俚言を達に近しと贊成し、之を韵語となして天下に吹聽するに至りては、沙汰の限りと謂ふべし、そうして見ると平生の言行人に語るべからざるものなしと言はれた、司馬温公は宋代の聖人である、當時譏ると譏らさるとに論なく、温公が薨ぜられたとき悲まさるはなかりしといふ、左もあるへきことなり、文章巧みなりと雖ども才識絶倫なりと雖ども、德行に於て闕る所あらば、決して一世に推尊せらるべきに非ず、宋代の昔しのみならず、宇内萬邦共に二十世紀の今日と雖も、此軌道を脫することと能はざるものと知るべし、



詞藻

俳句

四方太選

苗代

芽も見えず苗代水の澄み渡る　晴月
苗代や山吹垣に咲きくづれ　嚴子
瀬に荒されにけり苗代田　輪月
初雷や苗代小田の底濁り　奇瓢
垣越しに柿の木の芽や苗代田　寒樓
苗代に三角の田を仕切りけり　稻青
苗代の水流れ入るや隣の田　秋子
苗代に日當る村の出口かな　笑亭
籾の芽のまばらに寒し苗代田　吐月
苗代に影さす榛の梢かな　柳居
苗代や穂を莟みたるこぼれ麥　若湖
苗代や小川に落つる濁り水　白澤
苗代を限る畷の小草哉　六里
苗代の田螺踏込む跣足かな　溢川
水口に蝌斗や苗代田　梨窓
苗代や沈みて見ゆる籾の色　湖村
苗代の前の小川の家鴨かな　無香
篠立てゝ糸を張りけり苗代田　石峰
苗代の苗も伸びけり夏近く　千古
苗代に鳥も來ぬ日や小雨ふる　生巣
苗代を我家に近く作りけり　北洲
苗代の早稻と晩稻を別つ哉　鬼水
せきとむる苗代水や土俵　一村
苗代に桃の花ちる夕哉　里川
苗代に背戸田の隅を選みけり　六郎
苗代に道の車の埃かな　耕村
たそがれや水せき入るゝ苗代田　柳家
苗代に繩張りもして麥の中　啞子
苗代に切割の土くづれけり　萩水
苗代や小學校の塀の外　吐霓
苗代の雨傘さしてながめけり　梧葉生
苗代や雲流れゆく山の裾　仝
苗代の横にくる〳〵水車　逸笑
苗代や畷の道の右左　仝
苗代の縁にちるや畦の梅　虛靜

苗代の水靜なり菜種さく　仝

苗代や筑波根颪尙寒く　一堂

苗代の水口狹く流れけり　仝

苗代や彼岸の入の雨もよひ　松濱

苗代の月夜となりぬかへる鴈　仝

稻荷堂の前と後や苗代田　霞松

苗代に通ふ徑の菫哉　仝

苗代に驚の下りたる話かな　快雨

傍に堀扱出來て苗代田　仝

苗代のあなたにかすむ柳哉　紫溟郎

苗代の上を燕の往來哉　仝

苗代に門の眺や草の宿　仝

苗代の泡もぬるみて彌生かな　天風

苗代にころげ落ちたる田螺哉　仝

春淺き苗代水や冷かに　仝

苗代にうつる伏家の灯かな　吾空

苗代や苗代櫻咲き初むる　仝

苗代や蛭泳ぎ居るさゝ濁　仝

苗代や泥足ぬぐふ畦の草　時雨

苗代や向の岡の遲さくら　仝

慈姑掘苗代風に尻寒き　仝

藤

粽

四月十二日まで

五月十二日まで

谷中八景次國分屏東韻　伊藤壺溪

筑波晴嵐

山雲開曠野。嵐氣晴崢嶸。双闕春空峙。恍疑仙掌擎。

諏訪臺歸帆

柳烟籠碧水。花氣滿春衫。臺上留餘照。暮天點遠帆。

螢澤晩鐘

百年螢澤水。水涸樹蒙籠。燦燦飛猶亂。一聲風外鐘。

七面坂夕照

斜日石頭輝。流泉林下濺。涼飈吹月升。天掛氷紈扇。

天王寺秋月

金風入化城。玉露浮清樾。寶塔湧層霄。禪心是秋月。

田端落雁

候雁此來賓。呶々野田宿。莫驚茶室眠。人在螢南陸。

日暮里夜雨

夜雨蕭條濶。空林落木時。燈殘無客至。靜坐獨刪詩。

千馱木暮雪

珠閣隱瓊樹。寒光透雕疏。詩思澹無迹。晴雲暮歸驢。

造句之妙、有可入選躰者、如珠閣寒光十字、殊妙、

聞香園即吟　梅原龍北

枝々破蕾影橫斜。匹似孤山處士家。吸得寒香千萬斛。吟身直欲化梅花。

亦是化身千億之意、

雪後步月　日野梅溪

微醉尤宜移屐行。黃昏踏雪月輝清。一條溪水琳瑯響。滿地梅花篩影橫。戶々皆乖瓊玉粧。山々都築水晶城。神澄骨冷將仙處。孰若灞橋驢背情。

閒適

香篆烟消夢醒時。盤臺如水復奚疑。泉聲響枕知風定。梅影橫窓覺月移。

聞梅溪君、實爲旭川師令嗣、旭川師詩名與釋五居相抗衡、讀此篇、知君亦吟詠自適、有乃父遺風、書香連綿、欽羨々々、

謝人贈盆梅　大島豐南

多謝寒梅遙被寄。老鱗苔皺臥盆中。詩魂燈影長相伴。不願化龍冲大空。

法界無大小、芥子納須彌、三尺瓦盆、臥龍得所、

天台山居三十律第一　釋　掬雪

浩々天風起。窅然花頂峯。禽窺齋後鉢。月出定時鐘。地古苔皆長。雲來松自封。石橋羅漢寂。空印虎之蹤。

作者所寄五律、多是日本新聞調、有句而無詩、此一首獨可誦、

寄松本波峯　澤野丹陵

黃鳥喈々日斂陽。微吟抱膝坐茅堂。已迎佳景春三月。偏恨故人天一方。楊柳如烟烟貼水。梅花似雪雪吹香。與君何日談懷抱。傾盡甜醅酒百觴。

一讀無奇、而句々相承、作法完密、

櫻花

課題櫻花、集稿五十七、選錄得十首

町田柳塘撰評

（甲）　水本吁堂

徐福昔求仙藥日。祖龍方駕鮑魚車。燒天豈是咸陽火。隔海猶疑蓬島霞。陶菊林梅唯氣韻。姚紅魏紫奈驕奢。如今禹域風雲慘。三月燕京不見花。

五十六字唯是引典故、詠時事、無一字及櫻花、而後聯借梅菊牡丹、抑彼揚此、默題讀之、亦知爲櫻花、加之感慨係焉、絕奇之作、不

得不推爲絕唱、

（乙）　西田鷗村

萬花如海亂繽紛。一白微茫望不分。
十里笙歌芳峽雪。滿堤裙屐墨陀雲。
高樓對酒宜微雨。古寺尋碑恰夕曛。
休向武陵徵故事。凡桃俗李漫云々。

後聯不即不離、以韻致勝、詠物之詩、悟此妙訣、不陷謎置窠臼、

（丙）　時田蘭陵

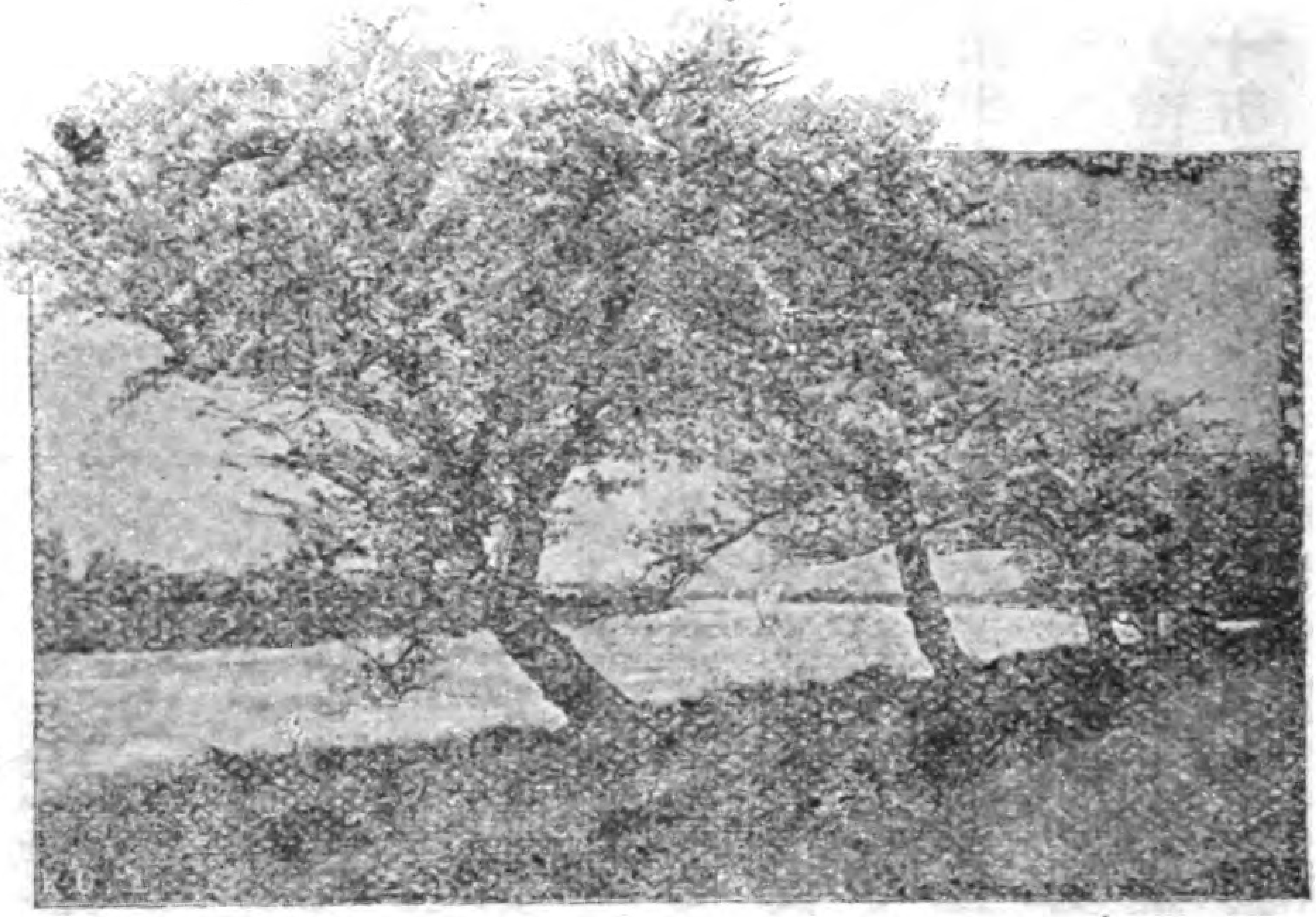
宮闕空啼鳥。干戈亂似麻。
少陵憂國淚。不許濺櫻花。

自杜陵感時花濺淚翻案、傷彼亂離、頌我太平、何等簡勁、

（丁）　關青山

溶々東海靜。爛熳捧紅暾。
香雪曉埋屋。彩霞春滿軒。
誦來敷島詠。養我大和魂。
笑酌花前酒。酣歌亦聖恩。

既醉遺意、頌櫻花、可謂得鉢矣、



（戊）　加藤江村

雨後芳姿露未乾。多情含笑倚欄干。
錦茵瓊蘂凌桃李。國色天香壓牡丹。
滋賀都荒殘月落。芳山陵古夕陽寒。
如今海內太平久。須向花前尋舊歡。

滋賀芳山寫興亡之感、辭理並妙、七八撇開、以頌太平、作法頗好、惜前半稍陳腐、

（己）　淺野芳陰

陽春三月綺羅群。恰好當爐認卓文。
嬉似朱唇催一笑。艶於粉頰帶微醺。
宜晴宜雨又宜月。訝雪訝霞仍訝雲。
日暮東風無賴甚。胡沙漠々裏昭君。

格調卑々、然措辭之巧、意匠之奇、非凡手所辦、

（庚）　齋藤碌太郎

明治中興久偃戈。賞春懷古意如何。
無情花亦知忠義。偏向延元陵上多。

感慨淋漓、使人興起、竟非徒作、

（辛）　望月桂村

白樹題詩人已空。芳姿歲々媚春風。已辭枝上猶輕薄。
斜趁羅裙舞態工。

人情變遷、亦及花卉乎、

（壬）　香洲生

放翁呼做海棠顛。未見此花眞可憐。若見此花驚且死。
白頭難保八旬年。

善謔解頤、

（癸）　鈴木天遊

春到櫻花最熱鬧。世間忙殺幾多人。孰如茅屋竹籬畔。
梅冒雪霜臨水濱。

戟手罵花、其人可想、

詩課題

◎**晩春書懷**（七言律、四月十五日締切）

◎**綠陰移榻**（五言絕、五月十五日締切）

用箋郵便はがきにて東京谷中三崎町十八番地
町田柳塘宛投稿すべし

紀行

遊北紀程（四）

源清蔭

七月廿一日快晴五十四度
午前九時過ぎまでは寒烟濛々として物色を辨せざりしが、十時頃天候一變して此地方に稀なりと稱する好天氣となれり、一行相勇んで小蒸滊に乘じ東方山麓の雪崖を見る、此雪崖は山間低地の氷田が直ちに海に臨て斷崖を爲せる者にして、此灣内の氷田中最も狹少なる者なれど、之に近き見れは約四哩の間高十數丈の雪を以て一帶に城壁を築きたるが如し、且當季の暖氣に融解して崩壞の痕より碧光を放てる處或は分裂して推せば倒れんと欲するもの、或は轟然響を發して眼前に氷洲を作るもの等變幻無窮なり、一應巡航後歸途は小灣の間を過ぎて無數の氷塊を衝破し、本船に歸る、晝食後甲板の日陽に背を晒して遊眺を恣にするとき、船長及運轉手等は更に小蒸滊を以て陸に向んとするを以て他の二三客と共に便乘し、昨日探撿せんとせしグレッ

シャーの崖下に到る、是は今朝のものに比し甚雄大、且附近の氷塊は皆巨大なるものにして高さ數丈、長十數丈のものゝみ、或は既に融解して水中に暗礁の如く横はれるものあれば、之に乘上げて進退に困難せし事も少なからざりしが、壯快亦物の比すべきものなし、巡航一時間餘にして船に歸れば間もなく解纜、午後四時を過ぐ

スピッベルゲンは人の知る如く、十六世紀に蘭人の發見に係る、全く無人氷雪の境に過ぎざれど此附近には鯨、ヲットセイ、アザラシ、海馬等を産するを以て、夏時一二ヶ月間は諾威デンマルク露國北部和蘭等より出獵船少なからず、其内蘭人大部分を占めて一年の漁獲を積算すれば瓜哇の首府たるバタビヤの收入よりも超過すと

六時船側に二頭の鯨を見る

七月廿二日曇無事五十三度

七月廿三日陰晴屢變五十三度

午後又鯨を見る

七月廿四日曇又雨五十三度

終日船躰の動搖甚し、此夜假裝演劇の催しあり、新婚夫婦の訴訟を法衙にて公判を開く仕組也、出場者は乘船員混合にして法官及辯護士等は服裝及其證迄も英國古式のものを取揃へしは感服なり

七月廿五日快晴五十四度

稀れなる好天氣滿船頓に活氣を生ず、午前は乘客の運動會、午後は水夫の懸賞競伎又夜は昨夜の續き演伎あり、十時日沒再び暗夜の世界入る

七月廿六日快晴五十八度

午前十時右舷にアイスランドの陸影を見次てモントヘクラ山の半腹を認む、四時ライクヤビック港外にて水先を取り、全四十分着港、航程千二百九十六浬、上陸、市街公園博物館敎會堂等を見、六時半歸船す、此地は氷蘭(アイスランド)の首府にして三万五千の人口を有す、人家は亞鉛張りの平屋にして道路粗惡人馬寂寥たり、産物は家畜鳥毛及若干の海産物なりと謂ふ、

七月廿七日陰晴屢變五十八度

此日は最後のエキスカーションにて大小二隊に分れ、小は四哩を距る温泉場に遊ぶもの、大は卅二哩を距るチレグヴィルに遊ぶとの二なり、チレグエヴィール行は往返六十四哩間乘馬の勞あるが爲め廿五六名と五名の女子に過ぎず、予等此行に加はり十時出發す、市街を出れば茫々たるラバの磧原にして、一條の直路は天

より天に接し、間々少許の牧場の外一戸の村家をも見ず、四哩を歩する頃兩側の大山脈は漸く近接し來り、路は徐々と山阪に入る、更に二哩にして少しく青草の生する處あり、此地海を抜く千呎の高さあり、小休後發足す、天色慘憺として時々降雨あり、衣帽皆濕ふ、更に六哩餘にして山間の一寒驛に着、人家僅かに三戸、皆周圍は土壘を以て堅め、光線を受くる一方のみに窻戸を設けたり、恰も駄馬の着せるを以て行厨を開き、飢渴を醫す、二時半雨を衝きて發し小丘を越へ二回の休息を爲して更に進めば、前方大山脈の麓にチレクウイールの湖水を望む、前途既に遠からざるを知り勇を鼓して疾驅すれば進むに隨て湖は愈遠ざかるが如し、一行漸く疲勞と倦怠を覺へ或は合し或は離れて嘌々として馬を驅る、路は忽ち左方に轉じて山麓に沿ふ、偶ま三戸の人家を見る、或は今夜の宿泊處ならんとて疾驅し、近き見れは普通の農家なるに失望し、馬に任せて行く、路は又右方に轉じて廣漠たる燒石原に出づ、此間二哩許りにして一青坡あり、此を繞れば風景一轉、路は峽中に下りて兩側は直立せる岩石の蜿蜒長城を築けるに似たり、此間一哩余清冷なる溪澗を渡り、峽を橫截すれば湖畔平原の中央に一旗亭あり、荷馬は一行に先ち其前に行李を解けるを望み、一鞭疾驅して六時三十分到着す、

此家は探勝者の爲めに最近新造せしものなれば甚だ清潔なり、食堂厨房の外九戸の小家屋ありて船房に擬し毎室に客を容るべきも、一行の爲めには不足なるを以て、約四町を距る湖岸小寺の客堂を以て補充す、晩食後余等は此寺に赴き分宿す

七月廿八日快晴五十九度

十時寺を出てゝ附近を散策すれば、昔時大震の爲めに龜裂したる痕跡は平原の間に幾條の大溪澗を作り、忽ち廣く忽ち狹く、岩石崎嶇の下には碧深底なきが如く又巧妙なる園藝家の手に成りしかと怪まるゝ天然の園池あり、又千年已前にファイキング族が創設したる議院の廢跡を訪ひて岩丘を橫斷し、昨日經過せし絶壁の一端に在る瀑布を見る、懸崖直下約七十尺巾三十尺餘峽を隔てたる岩上に踞して觀望、後路を求めて峽下の溪畔に出て對岸絶壁の上に到らんと欲し、纔かに足掛を發見したるを以て崩壊せる岩窟の間を匍匐し、辛ふして頂上に達すれば、唯是坦々たる蹟原に一條の野川あるのみ、此處より四邊を望めば周遭せる大山脈の半腹には數十哩に渉る城壁の如きものあり是皆此峽と同

しく陥落せし痕跡なり、午後一時昨夕到着せしホテルに歸り、晝餐を終へ更に湖畔の風景を採り、晩食後天然の園池の岩上に倚りて讀書を試む、此時案内者來り告けて云ふライクヤヒックより每週一回此地に往復するメールコーチ來着し、明朝八時を以てライクヤヒックに向ふ、若し便乘の意あらば速かに申込れたし、車は僅かに四客を容るゝに過ぎざればなりと、依つて便乘の約束を爲し九時過ぎ寺に歸れば此寺に二週間以前より滯寓する畫工の筆を擱へて歸り來るに會し、畫に依りて未見の勝景を賞し、房に入れば四境闃寂として時に天風の瀑聲を送るあるのみ、

七月廿九日曇又雨五十九度

乘馬の一隊は午前六時に發足する筈なるも余等は徐々に床を離れて又天然の園池に散策し、ホテルに趣きて朝食を畢へ、八時コーチに乘りて發す、九時頃より天氣陰濕時々寒雨襲ひ來りて不愉快なれと乘馬の勞に比すべくも非らず、一昨日倦厭せし處も談笑の間に通過して十一時山間の小驛に着し、乘馬の一隊と合し乘馬隊は匆々食事を畢へ出發せる後、土人と二三の談話を試み、喫飯後發車しライクヤヒックの近郊にて乘馬隊に先んじ、埠頭に出れば端艇は余等の歸着を待受け居れるを以て、直ちに棹を急かし風雨を衝きて二時三十分歸船すれば此行に加はらざりし諸客は甲板に群集して拍手歡呼せり、五時三十分拔錨、風雨急にして激浪甲板を洗ふ、八時頃少しく靜穩に復す、九時より舞踏會あり

七月三十日風雨六十二度

七月三十一日風雨五十九度

朝來船躰の動搖甚し、十一時二隻の漁船を見る、午後四時トルスハーフェンに着、航程四百九十二浬、此地もデンマルク屬島の一にして人家二百餘戶あり、七時解纜

八月一日曇六十一度

風波漸穩、稀れに日光を見る、朝來讀書室に繪畫の展覽あり、同船畫工の手に成れるもの皆探勝中の風景を描きしものなり、此夕八時より舞踏會を催し十時より船客の催しに係る夜食會あり明日エヂンバラに到着するを以て航海中の慰勞及送別の意を含むものなり、席上一應の挨拶及數回の滑稽演說ありて次て相互の健康を祝して散會す、

八月二日晴六十三度

九時リースに着航程四百廿五浬此地より下船するもの

少なからず、余等共に上陸しエッンペラの市街を散策しフヲスプリッに遊び三時歸船四時解纜
八月三日風雨六十三度
八月四日晴六十七度
午後二時チリブリー投錨航程四百二十浬臨時滊車にて五時半歸着

（完）

航西通信（錫蘭より）

藤井宣正

明治三十三年、十二月廿八日は、余が亡父の命日にて、錫蘭の舊都カンディ市に佛牙寺を拜するには、最も恰當の日と存候間、前夜より同船の服部宇之吉瀨尾昌宗の兩君を勸誘致し候處、同意せられ候が、丹羽翊彦君は公事の爲め港役所へ參られ候筈故、一行三人は日歸りの小旅行を企て申候、出立を取急き候儘、茶とパン一片を朝餐に代へ、「ボーイ」が作り呉れ候「サンドウヰッチ」を古新聞に包み、二艘の「ローイング、ボート」に三人分乘、櫓を早めさせて上陸、直に人力車にて停車場に參り候に、日歸りの旅ならば、車賃は一人四「ルーピー」にてよしと聞き、先つ大儲仕候と車へ飛び込み候、同車中に耶蘇舊教の僧四人と、馬來人にて首に十字架をかけたるもの一人と、外に一二人の馬來漢居り申候、道は沼澤の間を十數哩進み候が、眼に入りしものは、我國の所謂唐蓮が深紅、淡紅、さては純白の花を開き、水面より香風を吹き送り候と、見渡す限りの椰樹林が、冬をも知らずに榮え居り候と、此處彼處の浸水牧場に、幾群となく水牛、又は、例の駱駝牛が、草を咬み居り候とに候、稻田は既に苅取りて再び籾を播かんとし用意せるもの、青苗長じて七八寸と相成り居り候もの、穗少しく垂れて稈の黄色となれるものなど、交互致居候て、此地方には秋收冬藏など申す千字文は通用致し兼ね候、漸く山地に入りては雜草茂生、如何にも蛇などの住居には便利ならんと相見え候、日廻はり葵の、小枝に着ける如き黄花は到る處滿開にて、丈四五尺位の灌木か、深紅の丁字科の花の咲けるは、「ツラジロ」様の白花を着ける喬木と、對映致し居り候中を進み候は、何やら極樂參りを滊車にて致し候かと怪まれ候、土地漸く高まり來り候に連れ、茶樹は岡阜に培殖せられ候が、土色は眞赤決して膏腴とは見え不申候へども、茶には適し候ものと存せられ候、此島の茶が、現下、世界の市場に大勢力を有し居り候を想出致候ては、何となく一種奇異なる感も起り候が、是は詳記せざるが花ならんと存候、滊車は急行故、カンディ迄七十四哩、十數の車停場の內、駐車を省き候もの七八にて四時間を費し目的地に到着致し候、此七十四哩の三分の一位は險峻にて深谿を瞰下致し候、眺望は絕佳と申す外無之、里芋は山門の清水出づる處に栽培せられ候が、野生も澤山有之候、巨岩を戴ける高山、恰も人工を以て造り爲せるが如く、其中、腰に白雲を抹して藍を流せるが如き靑空に反映仕候處などは繪師も筆を擲つならんと存ぜられ候、岩間より流るゝ清水を集めて一條の瀧となし、米昼黑膚の土人が、其水を頭より浴する樣子は、生ける瀧の不動と申す可く、座に京都高雄の神護寺なる、弘法大師の大日如來を想出せしめ候、玉子と、「レモン」と、「パン」とを籠に入れ、停車場內を呼び廻はり候菓子賣の呼聲が、如何にも可笑しき聲音に聞へ皆々哄笑致候、「ペラデニヤ」停車場は、吉倫坡より山を登り詰めたる高處にあり、其附近には、東洋第二と此道の人には稱揚せらるゝ植物園之有候由にて、此處より下車致し、馬車にて園を横ぎり、夫より「カンディ」に赴き候ものも有

之候へ共、吾人植物官には、彼南若くは新嘉坡のものと大同小異なる可しと聞き、そを乗越し、次の停車場にて舊都へ這入り申候、さて、此舊都見物を記し候前に、少々都城の古今を述べ候ことは、全く不必要とも不存候間、忍耐一讀を煩はし度候、山城カンディが、市街の形を爲すに立至り候は、西歷第十四世紀の始めにて、「ブラクマ、バーフ」第三世王の治世に、佛牙、其他の法寶物を奉置す可き堂宇を建立し、此地を錫蘭佛教の中心に定めし時に在り、此佛牙寺の存在する處は、取りも直さず王城なれば、之れ全島の首府と定められしは、西曆千五百九十二年にあり、爾來、葡萄牙人、和蘭人、及英國人の、侵入焚掠を蒙りしもの一再ならざりしに由り、第十四世紀の遺物は、殆んど存するをなしと云も可ならんと英國の記者は申居候、其中、葡萄牙の羅馬舊教の僧侶が、此市に布教の根據地を得んと、千五百五十年に千餘の兵を率ゐて侵入候時はカンディを距る僅に三英哩の地に於て大敗を取り、七百の兵（其過半は歐洲人なりしと云）を失ひ候ことも有之候由、外患、内亂、引續き、錫蘭最後の王「スリー、ヴェクラマ、ラーヂヤ、シンハ」は、西曆千八百三年、英國の將軍「マクドヲル」の爲に一時都城を占領せられしこともありしが、十五年に至り、王は英兵に擒はれ、「ヴェルロール」と云ふ印度城砦に幽死し、カンディも英國の所有に歸し申し候由、其後多少の反亂は土人中より起り候へども、十八年に至り、飢饉と流行病に力を失ひしかは、英國政府は、反亂の孤注させる佛牙をカンディに奉還し、二十年に至り、奉行「エドワルド、バルンス」は、一大軍用道をカンディに通じて其主樞者となり候由、是、土人の豫言に、岩石を破りてカンディに道を通し佛牙を保護するものは全島の王たらんとあるに契當せしめ候ものゝ由、此都城をシンハレス人は、マハ、ヌハラ（大市の義なり）と申し候が、北緯七度十八分、東經八十度四十分に位し、海平上千六百八十呎の山上にあり、熱帶地方には珍らしき温和なる氣候を有し、一年の平均は、華氏の七十五度少餘と申し候、千八百九十一年の人口調査に由れば、此市の人口は、

歐羅巴人	歐亞合ひの子	シンハレス人	タミル人	回教人
二五三	一、五一七	九、七〇四	三、七一二	三、六三九
馬來人	其他	合計		
一、一六二	三八八	二〇、三七五		

の割合に候が、此中、回教人は、亞剌比亞商の子孫の移住せるものにて、耶蘇紀元前二世紀頃に東に移り、此に來りて土人と婚嫁せるものと申候、馬來人の多數は雇兵の子孫にて、其他とある三百八十八人の中には、「アフガル」人の子孫もあり、倔強の軀幹を有し居り候、此他のシンハレス男子は、古倫母とては平地土住する同族の如き、環形の鼈甲を頭に飾ることは無之、又、其婦人は丈け長き衣を着け、平地の婦人の如く襦衣は用ゐ不申候、カンディは停車場には、肩より紅綬を帶べる馬車の世話人居り、忠實らしく相見え候間、其者に托し一輛の馬車を貸し、監獄及市場を右に見つゝ、恰も東京入谷の植木屋の園中、さては、小石川植物園の暖室内かと思はるゝほと、紅紫色の花あり葉ありて、眼も一般明るく感じ候植込みある街路を、右岸よりカンディ湖を一周仕候、此湖、其面積は不忍池よりやゝ大に、東西に長く候が、其水は清澄玉を連ねたるが如く、之を圍める四山には草木繁茂し、其際より黄に白に塗込めたる樓堂隱見して其影を湖面に映じ、風無きも氣冷に、人をして轉た身は仙境にあるかと疑はしめ候、かゝる靈地を撰出して佛牙を奉置し、全島の都城を寘めし「バーフ」第三世の恩澤は長く島民に謳歌せられ候ならん、

何事ぞ、湖山は舊に依るも其主は換り、「テニス」戯場には三四群の洋客無遠慮に球を弄びて長日の閑を消さんとを求め、國王燕居の地は、衛戍病院と變し、病兵をして水上を渉り來る涼風に疾を養はしむ、余はシンハレスの子孫には無之候へ共、感慨に堪えざるもの有之候、湖の左岸、即ち北岸へ廻りしに、柱を水中に浸せる木造の巨館あり、元は王の浴水殿にして、實に王宮の一部を形成せしものを、今は圖書館と致居候、此館よりの湖面の眺望は、南に聳ゆる翠轡の倒影に候、浴水殿の前より北に曲り候に、彫刻を施せる花崗石垣石段石門は數百年の風雨に古色滴るが如く、門前の小池には小龜を飼養し、神龜に候と案内者は指示致候が、格別注視仕候要も無之候間、直にカンデハ王ノ謁見殿に入り申候、導者此は建物を「オッンショール」と云ふ御殿なりと申し候か「カッチェリ」と申すが本名に候、是はカンデイの古建築を見るには尤も適當なる木造巨屋にて、柱にも梁にも唐草の深彫を施し、又、梁間には佛像を刻み置候、柱上の大斗小斗（カピタル）は、菊花様の草花の外面に曲れるを、柱の四方に方柱形に造り候が、是は華美なる印度式の標本なる由、此木材は「ナーランダ」と申す遠地より此に運搬せしめ候由にて、建立は西暦千五百九十二年、「ヴェマラ、ダルマ」王が、獅子王第二世を破りて此地に佛牙を奉ぜし後、即、千六百年頃にありて、現今の佛牙奉安殿と共に、葡和の兵燹を免かれたるものなるが、之を築造するには、葡萄牙人の捕となれるものを使役仕候由なれば、建物の或る部分には、歐洲風をも留めて、遊客に少からざる興味を與へ申候、目下、此建物は法庭に使用致され候も、曾てはカンディ王、即位の大禮を行ひ、又、英國が此地の主權者となりし時の宣告式も此に擧行せられたりと申候へば、この家神こそは、人生幾多の榮枯を目睹致し候ならんと一段の哀れを催し申候、佛牙の奉安殿へ參詣仕候が、殿は長方形にて四方にひさしある木造の建物、梁五間、奥行十間位に候か、柱梁の彫刻は彼の謁見殿よりも密に、四壁には、二十八宿、其他、華文を、極彩色にて畫き、長押の上には册劣なる地獄の變相を描き置候が、殿扉には金銀珠玉を鏤め美麗を盡し申候、殿前に眞黑なる高麗狗二軀を置候處は、恰も我國の神社の如く、又、此殿の屋根の高からず、四方の垂木に數十の大硝子燈を吊し、其内に、別に青黄赤白の香水を盛り置候樣子は、何となく人間の住宅の樣に感ぜられ候、殿前には乞食然たる案内者と、二人の尼佇み、乞食小供五七、花片を手にして人々に附き纏ひ、其うるさかりしことは限りなく候、開扉勤行は日々午前五時半、九時半、午後六時の三回にて、太鼓、鉦、寶喇叭の吹奏は、騒々しく、此に開扉を致し候が、白銀製の卓には賽者の供養物陳列せられ、其の向に、鐵網（アミ）を隔てゝ風鈴形の銀寶龕あり、其中の六重の寶龕は、悉皆黄金地に種々の寶石を嵌入したるものにて、一見目を驚かす程のものと承り候が、余等の參詣致候時は十二時なりし故、殿扉は固く鎖され候、尤も若干の金を投し候時は、特に開扉致し候由なれど、同行者には之を拜せんと欲するものも無之、余は又更に此地、及此附近を探撿可仕心算に有之候故、外より拜禮して立去り申候、此殿を「ダラダー、マーリガワ」と申し候は、牙宮の意味にて、錫蘭人はカンデイより來れりと聞けば、「マーリガワ」へ參詣せしかと、知らざる人にも尋ね候程雜有饒場と相成り居り、國王は、此殿を圍繞して、其宮城を搆へ候儀なるが、此佛牙に就ては珍奇なる話有之候て、幾分か余が拜見せんと思ふ心を抑止致候、一寸此に其大略を可申上候、そもこの佛牙舍利は、西暦紀元三百十一年、支那西晉の法顯三藏が此島に到着致し候少し已前に、南印度の東北偶なる伽陵伽（カリンガ）國の王女が其頭髮裡に納めて此島へ傳持せしが、千三百十五年頃、「コラバル」人に掠奪せられて、再び印度へ持て行かれしを、「プラクラマ、バーフ」第三世、更に之を印度より奪ひ來り

て穆藏せり、然るに千五百六十年に至り、葡萄牙人之を發見し、南印度の西岸なる其殖民地「ゴア」に送りしに、佛敎の深信者なる「ペグ」王、莫大の金銀を出して之を得んと求めしか、「ゴア」駐在の葡萄牙の大僧正は、極力之に反對し、遂に之を焚燒し、其遺灰を「ゴア」の總督及其官人の面前に於て海中に投し候に由り、「ヴエクラマ、バーフ」王、長二吋、直徑一吋弱の牙を、無色の象牙にて造りて金臺上に安直し、七重の風鈴形なる黃金の寶龕中に納めたり、其形は、人の牙よりは寧ろ鰐魚の牙に似寄り居り候由は、千八百七十五年英國皇太子の叡覽に供し、次て八十二年、同國皇孫の電覽に供へし時陪覽せるもの丶申す處と承り候、但、佛徒は佛牙の「ゴア」に送られしことは否定不致候へ共、そは其物にあらずと申居り候、何れか眞か、容易に判斷は致兼候へ共、佛牙か人牙に似ず鰐牙に似、且、長さ二吋もあるとは如何にも奇怪と奉存候、佛牙殿の前に、寺僧か說法用の高座有之、曲　彔の如きものに候、其傍の佛殿には數多の佛像有之候へ共、別に取出でゝ記し候樣のものも無之、たゞ緬甸佛の金光燦然たるもの目につき申候、湖水に面して佛牙殿の畔に六角の高臺有之、是も「ヴエクラ、ダルマ」王の遺物にて、其形式には歐洲風を六七分迄加味致しあり、面白き建物に候、土人は之を「パツチリプヤ」と申し、國王は、大祭の際には此臺上に臨して、民庶に其身を示し候由、今は佛牙殿附屬の貝乘藏經の貯藏場に宛てられ候か、其經文の多數は巴梨とシンハレス語との對譯にて、緬甸文も少々は有之候、又、英文の錫蘭に關する圖書も數部有之候て、人は東洋圖書館と申候、番人は黃衣の僧に候が、自巳に參觀の手數料を與へよとは不申候も、案内人に目配せして、喜捨箱に錢を投せよと勸め申候、是、彼の徒は、律法上、親しく金錢を受授するを能はざる故に御座候が、內分は隨分其內より「シーレ」の代も引去ることならんと被存候、石門を出候處、道を停で獨乙軍艦形の大碑塔二基ほど有之候湖畔に、錫蘭の奉行たりし「ヘンリー、ワルド」氏の銅像を見、女王旅館は此地第一の旅店と聞き、其門前へ登り候が、如何にも湖水を下瞰したる一大巨屋に候、但、一行は「サンド、ウヰツチ」にて午餐を濟せ候間、「ホテル」の散財をやめ、市街を前後左右に馬を驅り申候、佛牙殿の附近には、僧侶の住居致候樣なる建物無之候が、日々三回の勸行は、湖南なる「マルワツタ」寺、及、市の西北貧廓にある「アスギリヤ」寺より出勤仕候者と被存候、兩寺共に各々三十餘の僧侶を住せしめ候由、「マルワツタ」寺の樣子を遠見致し候に本堂は無之、僧房のみの樣に候へは僧伽藍と申し候方適當と存候、此地の風色殿堂とては佛牙寺の寫眞など購求致し、市場を素見し、午後一時半頃停車場に歸り、二時の滊車にて歸途に上り候、「アスギリヤ」寺は、「プラークラマ、バーフ」王が、其妃の爲めに經營せるものにて、其岩洞內には三十呎の石刻退拌像あり、又、伽藍中には九軀の佛躰と、二軀の印度神(國天及大自在天の子なる「カメラガコ天」)を藏しある由なりしも、往詣の時間無之候、



思潮

本號より此欄を設け前一ヶ月全國各新聞雜誌に顯はれたる各方面の有益なる議論を摘要して掲ぐ

▲歐米學生の氣風　（新戸部稲造）

●米國の學生　若し米國學生の氣風如何を一言すれば、宗教心盛なりと云ばんのみ、之を青年會等種々宗教的事業に餘力を致すを見るも明なり。次に最も感すべきは、彼等の着實なることこれ也、彼等の學を爲すや、リード（讀書）にあらずしてスターデー（勉强）なり。彼地の教科書を見るに譬へは我國に於て中學或は大學の初年級に於て用ゆるもののあるを見る、然れども米の學生は我國の如くたゞリードするにあらずして、よく之を玩味し、之を批評しよく其心に了解するを勉む。畢竟教授及ひ學問の方法、我國の現在と異なれり。

●英國の學生　英國民は一般に保守的にして、一旦事を爲すや變更を沒にせず、從て學生も亦この氣風あるを見る……此地一般の學生は遊戯、運動を盛に努む。彼等の遊戯運動をなすや、唯身體の健全のみを欲するに非ずして實は一種のキャラクターを練るにあり。されは一般に公平にして、卑劣の心なく、性情淡快にして、狹少ならず、余嘗て歸朝の途次、船中の徒然を慰せんが爲めに、日、英の人々分れて綱引を試みたりしに三回中二回は日人勝を占めたりき、然るに敗者たりし英人は、却て日人の爲に萬歳を唱へて我勝利を祝したりき。嗚呼諸君假に地を代て日人をして敗者の地に立たしめは如何、余は詳言せざるも、我國のベースボール會或はボートレースに於て諸君は其實際を見るなるべし。

實に彼等は敗れてもゼントルマンの品格を失はざるなり。抑もかゝる美性の根原は孰れより得たるか、他なし其大部分はこの運動によりて得たるなり。

●獨逸の學生　獨國はすべて規則的にして幼稚園より大學に至るの間、組織整然として秩序あり統一あり、從て教育も亦器械を製造するが如き觀あり、故に所謂融通のきかざるもの多し、然れども應用に至つては實に驚くべきものあるなり。概して獨國學生の智識は深邃明確にして、詳密なり。而して元氣滿々たるを見る

●佛國の學生　佛國は上述の各國に劣れり、概評すれば所謂だらりとしてしまりなきが如し、此國古來文學美術に長ず、されは從て服裝に注意せざる學生

また多きを見る…………余ラビス氏に問ふに佛國青年救濟策を以てせしに、ラ氏は無しと答へたりき云々。（東京每週新誌）

▲中學校の倫理科に就て　（澤柳政太郎）

玆に一の誤解を招かないやうに能く注意をしなければならんのは倫理科と云ふものと、學校の德育と云ふもの丶此二つを混同しないと云ふ事柄である、學校に於ける德育と云ふものは無論生徒をして不都合なことのないやうに善行を進めるやうにして往かんければならない、倫理科は德育其物ではない學校の德育の方法と倫理科の敎授と云ふものは密接の關係を持つて居ると云ふことは云へるけれども、若し倫理科を以て學校の德育を爲して往くものであると考へたならばそれは甚だ間違つて居るし、且又效能が甚だ少ない德育であると云はなければならん、（中略）詰り學校の德育と云ふものは將來社會の風儀が改まり家庭の有樣が進んで相俟つて往く時代に於て始めて十分に行はれるものであると思ふ、

斯の如くに學校の倫理科の目的は主として知識を授けるものとし又學校の德育も今日に於ては十分に功を奏しないとしたならば學校以外に於ても倫理運動の如き大に社會に起らなければならんのである其に付いて簡單に自分の希望を云へば第一には宗敎家が大に起つて社會一般の倫理運動に從事すると云ふことである、世の宗敎家と云ふものは動もすれば敎育の力を借りて其宗敎を廣めやうと云ふやうなことを考へて居るけれども之は不見識の甚しきもので、敎育の力の足らない所を宗敎家が補ふと云ふ考を以てやらんければならん、決して敎育を利用し若くは敎育の驥尾に附し或は看板の下に隱れて自分の宗旨を廣めやうと云ふやうなことは甚だ取らない所である、既に敎育家の手を離れて若くは敎育家に反對して居る所の此社會一般の有樣と云ふものは今日非常なる有樣であるから、此社會の改良德義の上進に向つて宗敎家と云ふものは全力を注いで注意せんければならん、又盡力する餘地が澤山ある、今日の宗敎家は佛敎も基督敎の方の側の人も甚だ賴みにすることが少ないので、夫故に此宗敎の手にのみ社會の風紀問題の解釋を求むることは出來ない、どほしても有志者が此間に立つて宗敎家と別に倫理運動に從事すると云ふことは甚だ必要なことゝ思ふ。（倫理界）

▲本年に於ける敎育的社會問題　（敎育實驗界）

本年に入りて教育に關する論題として最も世の視聽をひかんとするものは、第一公德養成に關すること、第二女子教育に關すること、第三體育奬勵に關することにして、更に國語改良に關すること、女子の衣服改良に關することも、昨年以來の繼續問題にして研究愈々盛なる重大問題なり。（とし女子衣服改良に就て曰く）よしや完全なる改良案を得たりとしても、そを廣く實際に行はしむることは甚だかたきことなるべし。唯教育的方面の急務は、人生は全く活動その者にして、女子といへども決して社會の飾り物にあらざるの意義をしらしめ、進歩を妨ぐるが如き舊慣を去らしむるにあり、思ふに社會の趨勢は日々益々生存競爭の激甚を來して、自然に世人を覺醒せしむるの機運忽ち到るべしといへども、豫め此の機運に會する準備をなさしめて、聊かにても國の發達に益あらしむるは社會改良家の任とすべき所なり。必要は生むの母なりとは實にこの場合にもあてはめて其の驗あるを知る。世人の之を要せざる間は如何なる名案も施すに由なかるべきなり。然れどもまた舊慣を改めんには多少の強制と適切なる材料と、果斷なる實例とを要するものなれば、教育者及び改良家はこの點に就て充分の用意なかるべからず、實に斯の如き社會的事項は主として社會そのものゝ發達の爲めに謀るべきものなりといへども、之を單に教育の方面より見るもその效果は頗る大なるものあり、暫く之を單に童女等の衣服の袂袖等の大なる爲めに生ずる障害幾何ぞとかへり見よ、活潑なる童女の活動全體は之がために沮害せられ、從つて又活動せんとの希望の發生も妨げられ、教授上訓練上の理想の行はれざることと意外に大なることあるを知るべきなり。故に教育者は社會改良者たるの地位を外にしても、單にその地位に對する直接なる責任として、これらの改良に熱心し以て社會一般の勢力とならしむべきものなりと信ずるなり。

▲女子の運動に就て　　大澤　謙二

女子の御方にはどうも適した運動が少ない、昔から致す逐羽根などは大分宜しい運動でありますが、どうも御婦人方は一體に男子に比しますると運動が少ない、先刻も段々御話が出ましたし、私も段々考へて見ますと、婦人の運動を妨げることが色々ある、頭に妨げる、顏も妨げる、足も妨げるどうも色々のことに妨げられる、學校なぞで體操を致すに、日本風に髮を結ぶと破はれるのを恐れることもございまするし又足は下駄

で、就中駒下駄なぞは活潑に運動をするには、適當して居らぬ、それから顔は別段關係はないが日中は日に燒けて困るなぞと言ふのが、一の原因となつて、外出を嫌ふことがある、それから衣服が運動に適當して居らぬ、手を動かすには振袖なぞは勿論普通の袖も邪魔になる又腰卷なぞがあり帶を幾重にも卷付けてある、是も運動を妨げる原因になつて居る、是等の事はどうか改良を致さなければならぬ、其外にまだ婦人は育兒の義務を持つて居る、又家事を一般に掌つて居ると云ふことでありまして、是又男子に比して外出を致すことの少ない原因であります、それから又衣服も家に居る時のと外とへ出る時のと換へなければならぬと云ふことはないが飾りたいと云ふことが原因で是又出嫌の一原因になつて居ると思ひます、斯樣なとで日本で婦人のことを奧さんおかみさんと云ふが奧さんと云ふは奧の方へ引つ込んで居つて外とへ御出にならぬから奧さんといふ、又御かみさんと云ふは疊の上に坐つて居つて下に御出でにならぬからだと云ふ小説がある、何れにしてもどうか御婦人方が御外と樣、お下樣と言はれるやうに致したい夫には先づ今申した妨げを除くと云ふことが必要であらうと思ひますが、然らば是を如何にしたら除き得るやナカ／＼良い考が付かぬのであります、先年來贈答廢止會粗服會抔を企てましたが永續しない其他筒袖袴抔も勸告したけれども是又行はれない兎に角婦人方は男子に比して運動の少ない者でありますから成丈け多く運動を致すやうに、戶外で步く丈でも宜しい、內から外とへ出ることを希望致すのであります。(私立衞生會雜誌)

▲我國の體育に就て　（日　本）

今日の體育法は總して未定の有樣にて、行はるべからざるが如くして意外に行はるゝ者もあるべし、行はるべきが如くして意外に行はれざる者もあるべく、唯だ其の道に志ある者は各自己の信ずる所に據りて愈々益々奮勵すべきのみ、然れども茲に深く注意すべきは、國民の體育を盛んにせんとする宜しく人をして嫌厭を感ぜしめず進みて事に勵ましむるが如く爲さゞるべからざるの一事なり、日本體育會の形式的なるは學校の運動會を掌る者の非難する所なれども、其の學校の運動會も局外者より觀れば亦頗る形式的なり、一二度は興味のあるあらんも、竟に人をして熟せしむるに至らず、之に反し試みに相撲を看よ上下貴賤皆な一齊に歡呼し、其の間少こしの隔てもなく實に國民相樂の狀を

見るべし、是れ洵に自然に人の情に合したるものなり、他の運動會の如きは頗りに差別を設け、ハイカラーのハイカラーと居並らぶ有様頗る厭味あり、義務的に參觀する者は兎に角、他は皆な一二度にて懲り、三度びするの勇氣あらざるが如し。儀式の重んずべき者は則ち重んずべしと雖も、尙も國民の體育を念とする、他の爲めに此を犧牲にする所あるよりは寧ろ此が爲めに他を犧牲にする所ありて可なり、凡ての體育に於て形に拘るよりも實を擧るを先にせんこそ最も望ましき所なれ

（六合雜誌）

▲青年の醜行

他人の意志を枉げて其身を汚すが如きは男女に拘はらずこれを大罪として數えねばならぬ、或種の青年の心には實に間違ひたる思想が勢力を占めて居る、彼等は娘義太夫の爲に熱中するが如きことを以て卑劣なるとと思ふて居るであらふ、これは素より宜しき考である、然し彼等が男色を以て娘義太夫に近づくよりも勝れりとして居るのは大なる誤謬ではないか、吾人の立場より見れば白袴隊も「ドースル」連も同じ位のものである、否吾人は今日の形勢を以て見るに白袴隊の方が「ドースル」連よりも更に大なる罪惡を犯しつゝあることを斷言する「ドースル」連が刄を以て娘義太夫を脅迫したといふことは餘り聞かぬ處のことであるが、白袴隊に屬する獸行書生は種々なる脅迫手段を以て他人の意志に屈辱を加ふるのである、吾人は彼等を責むるに通常の淫猥罪を以てするだけでは滿足が出來ない、彼等は慥に暴虐を實行しつゝある無賴漢である。

何故に此の如き忌むべき現象が我社會に流行しつゝあるかといふに、吾人は軍隊氣風の旺盛が慥にこれを助長したのであることを斷言して憚らない、

（倫理界）

▲海國民の敎育

盛んに海を好む氣風を養成して、一般國民をして海國男子の事業は海上にありとの觀念を抱くに至らしめざるべからず。其方法としては海事談も盛にすべく、海上運動も奬勵すべく、又時には航海をもなさしむべきなり。近來何れの學校に於ても毎年一二回は修學旅行又は遠足と稱して一二日間の旅行をなすに至れりと雖も、未だ生徒を卒ひて一日の航海を試みむとするものなし。海國男子としては、幼年より海上の生活に慣るるは極めて必要なることとなれば、時に生徒を引率して、一二日間の航海を企つるも亦甚だ必要となす。要するに現在の國民敎育は、海軍的興味の養成には、甚だ冷

淺にして、海國の國民教育として大に缺くる所あるものと謂はざるべからず。

▲犯罪者と宗教　（鈴木券太郎）

日曜日に熱心に讃美歌を會堂に謳ひ、月曜日に姦夫密室に招引する基督敎徒あり、本山に献納する爲め百圓の金を胴卷に入れて遙々上洛したる一向宗徒にして六條の辻に於て十錢を値ひせざる飮食の喰逃を爲すとを憚らざるあり。最も信仰に富める慣習犯者あると獄中の異と爲すに足らざると同時に阿彌陀樣を口癖の如くに禮拜する毒殺婦人も亦往々看る所たり。十字架の下に全幅の精血を捧げて上帝の恩に感謝する所の女子にして修身不貞の生活を營むものあり、高野山の大檀那にして殺人强盜を稼ぐもの、宣敎師に依て最も信賴せられたる新敎徒にして殘忍なる高利貸業を爲し時に詐欺取財犯に觸るゝもの亦出奇の事實にはあらず誰れか犯罪者に宗敎心なしと云ふや。

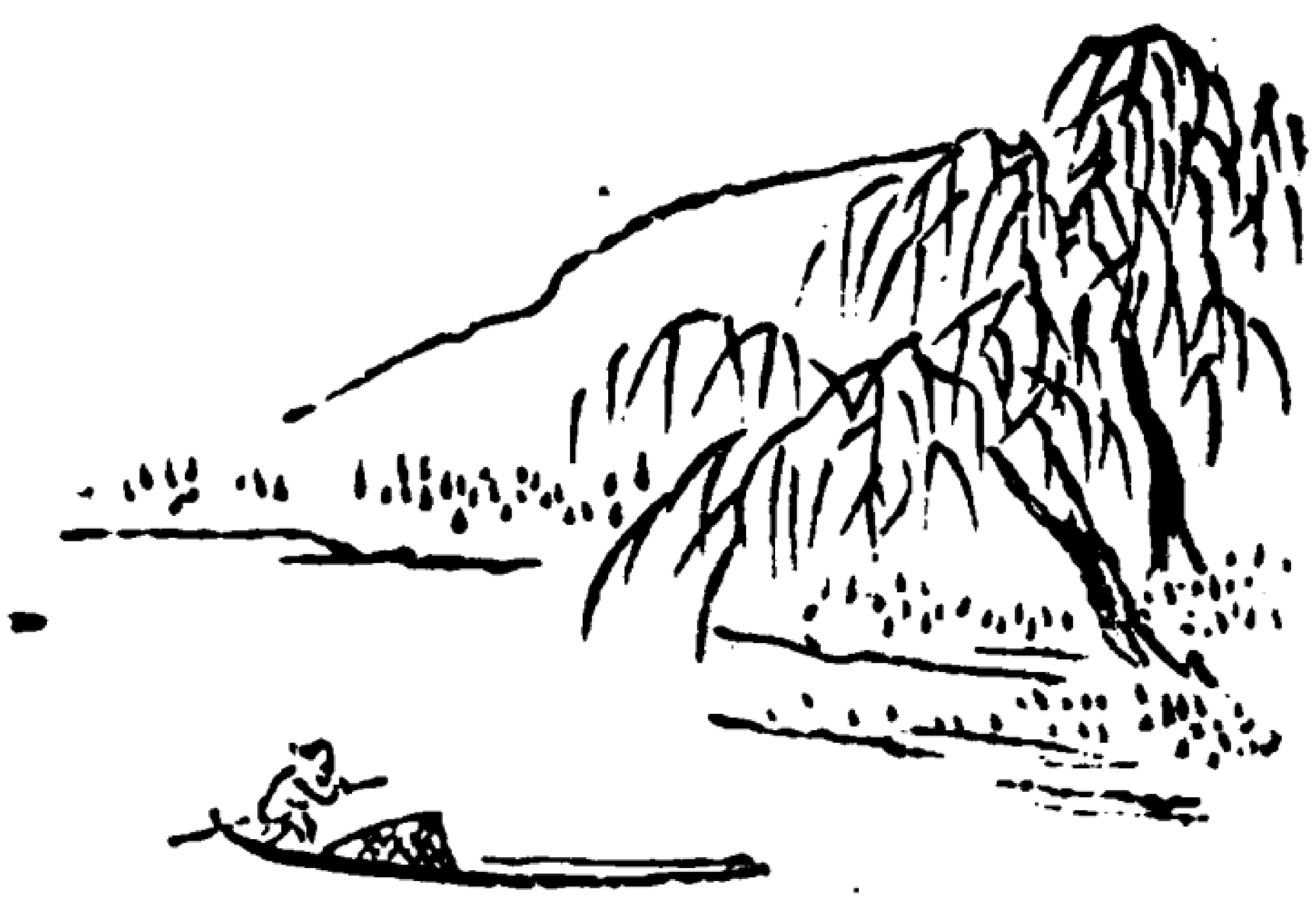
或者は云はん、宗敎信徒より犯罪者を出すことあるも、そは小部分ならんと、否な事實は信徒にして犯罪するもの極めて大數を占むることを示す、是れ歐米諸國の日本と俱に一致する所の普遍現象たり。犯罪者の最大多數が獨り名目上宗敎の信徒たるのみならず又屢々熱心なる信徒たることとなり、甚しきは宗敎は犯罪者の犯罪行爲を防止せざるのみならず、反て之を助長し奬勵することとなり。（中略）試みに隣邦の支那の社會を看よ、基督敎に改化したる所謂敎民は殆ど悉く犯罪者及准犯族にあらずや。基督敎の宣敎師は良民の財產權利を輕視し又些少の迫害者を地方官に求刑して斬に處せしむることを得意とするにあらずや。露佛軍人の姦淫、英獨軍人の偸盜亦隱れなき事實なるが、之を以て彼等軍人に宗敎心なしと云ふものあらばそは全く謬れり、彼等は皆な耶蘇の信徒なり。此くの如き醜劣なる行動を見聞する在支那の基督敎師も日本の基督敎宣敎師も平氣の平左衞門にて默過するの事實に看て彼等宣敎師は僞信者なりと云ふものあらば、そは不幸にも眞ならず、彼等は皆な「現金懸直なし正札附の」布敎者のみ。彼れが如き實象、如何か解釋すべきが、此くの如き矛盾如何か調理すべきか。（精神界）

▲家庭及社會敎育と寺院　（井上圓了）

一體家庭敎育と社會敎育と云ふ點は是非とも是れは宗敎の方を應用せぬといかぬと思ふ、唯今のところ地方へ行つて見ますと、宗旨の何たるは論じません、宗旨の何たるは論じませんが、寺と云ふものは今日でも隨

分行渡つて居る「葬式丈けの寺院としては多すぎる」是非とも今後の教育と云ふものは家庭と並びに社會教育だけは是れは寺或は會堂で引受けると云ふ方針を執つて、學校教育だけで之で教育は濟んだと云ふ考でなしに、先づ家庭にあつて父兄が子供を教育する上には、唯自分の家の汚い無規律の處で教育の出來るものでないから、五日とか或は一週間に一遍とか云ふものは、子供を連れて寺へ行く會堂へ行くと云ふ習慣をつけるそれから小學校を卒業した中年以上の者は互ひに集るにも料理屋へ集ると云ふことをせずに寺へ集り、或は會堂へ集るやうにして、さうやつて段々この學校以外の教育の改良方針を執つたならば、隨分地方の風俗習慣などを矯正することは容易い事だらうと思ふ、（中畧）僧侶の改良など丶云ふことは私の考では六ヶ敷い事でないと思ふ、それが今日改良が出來ないと云ふのは、一方に於ては政府が更に斯う云ふ事に心を措かないのと、それから又一般人民もさう云ふ考を持たないので、そこで改良が出來ないのである、今日まで何事によらず改良々々と言つても、政府で手を下さぬで出來たものは一つも無い、學校が行渡つて來たのも政府が勸めたからさうなつた、醫者の改良が出來たと云ふのも矢張りさうである、若し政府が教育などに少しも手を下さなかつたならば、決して今日のやうに小學教育は進歩して來ない、矢張り彼の寺子屋と同じやうな教育で來つたに相違ないと思ふ、若し亦政府がこの醫者の改良と云ふことに着手しなかつたならば、今日も矢張り草根木皮で昔通りの醫者であつたらうと思ふ、然るに其醫術或は學校教育などが能く今日まで進んで來たと云ふのは畢竟政府が着手したからである、奬勵したからである、唯今宗教の方へは政府が成るたけ手を出さないと云ふ方針であるから宗教が改良される筈はない、今一つは一般の人民が宗教の改良などには一向心を用ゐて居ない、（中畧）兎に角一般人民の考から改良せんといかぬ、一方に於て學校教育が進んで來ると共に先づ家庭教育社會教育と云ふものはどうするかと考へ、それに就て外に方法があれば宜いですが、若し無いとすれば私は宗教と云ふものを利用せねばいかないと思ふ、宗教を利用するには僧侶の改良と云ふとが必要である、さうすると矢張り政府も國の爲にさう云ふ方針を執つて學校教育醫術の改良を奬勵したるが如くに、宗教僧侶の改良を一ッ奬勵するやうな方針を執り、一般人民も之に伴つて改良して行くやうにした

い、一躰我國の宗教の改良と云ふことはさう六ヶ敷い事であるまい、然るに今日のやうに何でも放任して置かるゝは甚だ困つた事と思ふ、(教育實驗界)



評論

政界漫言

帝國議會の變象

城陽政客

帝國議會は既に十有餘年の歴史を有し十有五回の開會を見たりき。開設以來或は解散せられ或は停會せられ或は延期せられたりと雖も而も其變象たるや悉く之れ政府對衆議院の關係に因らざるはなかりき。伊藤内閣の衆議院を解散するや貴族院は滿腔の同情を以て政府に贊同を表したりき。松方内閣の衆議院と衝突するや貴族院は非常の熱心を以て政府の後援者となれりき。山縣内閣の衆議院を操縱するや、貴族院は懇篤なる同感を以て政府の措置を是認したりき。要するに帝國議會の歴史は政府と貴族院と合體して以て衆議院に對抗したる波瀾を表示せり。

第十五回帝國議會の變象は實に空前の奇觀を呈したり。政府を困苦せしめたるは貴族院なりき。貴族院は伊藤首相を戰慄せしめたり、貴族院は所謂元老なるも

のを無勢力たらしめたり、貴族院は國民に對し大なる元氣を發顯したり、衆議院は政府に賛同して貴族院の進撃に發抗せり。政府は衆議院を味方として貴族院を敵軍と爲すに至れり憲法實施以來政界の波動は一起一伏或は激甚に或は靜穩に種々の顯象を呈したり、而も十五議會の如き變象は未だ曾て之れあらざりき、政府對貴族院の衝突たる果して國家の凶事と爲す可きか。吾人は寧ろ國家の慶事とて之を祝賀せんとす吾人は憲法上の美なる結果として之を賛同せざるを得ざる也。

英獨協商と滿州

北清事變の終局夫れ如何。英獨協商の發表せらるゝや吾人竊に惟へらく英獨協商にして鞏固なる一致誠實なる目的を以て運用さるゝに於ては北清事變の終局を近からしめ以て世界平和の慶事を見んと。然かるに不幸にして吾人の豫想は誤り禍因は却て英獨協商彼れ自躰より顯出するに至れり、事變の終局を早からしめんと欲せば列國の協同一致を要す、東亞の平和を回復せんと欲せば列國各々過大の要求單獨の交渉を避けざる可らず英獨協商の効果たる必ずや此等の點に向ひ大なる勢力を有し鞏固なる保證を與ふるものと信ず、然るに現下の狀況は却て之を破壞し之を紛亂せしめんとす、そは露國の滿州に對する大々的野心の發顯と英獨協商の解釋が列國間に異議紛々たると即ち之れなり。

帝國の外相加藤高明君は衆議院議員の質問に答へて曰く。英獨協商に所謂支那領土の保全と云ふは滿州を包含せり故に帝國政府は英獨協商を解釋するに滿州保全を認定すと獨國宰相フヲン、ビユーロ伯は議會に於て演說して曰く、滿州問題は英獨協商に何等の關係を有せず清國に於て獨露の間何等利害の衝突あることなしと。

英國は默々として未だ滿州問題に關して何等の言明を爲さず、英國が露國に抗議を提起したりしと云ふは滿州保全にあらずして單獨運動を否とするにあり、彼れ狡猾なるヂヨン、ブルは微笑を堪へて滿州問題を見物しつゝあり何等の卑劣ぞ。

既に日獨の間に係る解釋の相違ありとせんか、英獨協商の條項は死文のみ反古のみ無効力の協商のみ、北清事變の終局をして益々延引せしめ東亞の變亂をしていよ／＼暗黑ならしむ。嗚呼大日本帝國の責任亦大なるかな。

露國の對韓活動

外には北清事變の終局を知る可らざるあり、内には政界の紛々たるあり。此時に於て露國は獨り堂々北清に横行列國の外交家を相手として盛んに靈活靈妙なる大手腕を振へり。撤兵問題を提起して滿州密約を締結し元凶處罰問題を弄して清廷の歡心を買ふ、何等の妙手ぞ。而して嚴肅なる日本政府の態度に憚るや、露國は機鋒一轉藹然として鷄林の山野に活動するに至れり。何等の機警ぞ。朝鮮に關する日露協商の締結以來露國は勉めて其野心を藏め愼重の態、無心の樣子を以て半島に臨めり、然るに昨今に至り忽然として對韓活動を開始し、馬山浦の經營は步武を進め鎭海灣の艦隊は寬嚴の措置を取り漢城の公使は傍若無人の手腕を振ふを観る、そも〳〵之れ何等の奇觀なるぞ。

露國果して半島に野心を有するか、然り夫れ或は有するならん。露國果して眞面目に活動を繼續するか、然り夫れ或は繼續するならん然れども吾人は信ず、露國の對韓活動たるや之れ牽制運動に過ぎず所謂敵本主義を弄して外交界を攪亂せんと欲するのみ

露國の敵本主義とは何ぞや、曰く滿州に對する自己の野心を貫徹せんが爲め日本國民の注意を滿州より轉換せしめんが爲め、列國をして日韓の關係を豫知せしめんが爲め忽然として對韓活動を開始し以て本尊たる滿州密約を成立せしむる手段即ち之れ也。

朝鮮に於ける日本の實力はいよ〳〵發進しつゝあり、露國如何に眞面目を裝ひ熱心を見せて活動するも其前途や知る可きのみ、去れば今日の時局に於て帝國政府の勇進す可きは朝鮮に非ずして北清に在り北清に非ずして滿州に在り。英獨協商を眼中に置かず猛然邁往東亞の將來帝國の前途を考慮し斷々乎として威力を發揮するにある而已。

政界の分水嶺

立憲政體の下政黨の存立するは爭ふ可らざる事なり政黨の存立するや其主義に據り或は二黨或は三黨又は小黨分立するに至るは勢ひ免る可らざる事と爲す。政黨の首領として政治の運用に任じ政治の得失を論ずるものは須らく政黨を善用するに努む可く之をして弊害百出ならしむ可らず。今や我邦に於ける政界を觀察するに所謂元老なるもの又は守舊派の人々は歲月と共に衰落し新進有爲の輩扼腕奮起して活動するに至れり、而

も尚欽定憲法を尊崇の餘頑固の頭腦、執着の感情を以て政黨を悪み黨員を冷罵する者鮮からず。貴族院の多數結托して政府を苦しめ衆議院に反對したる其源因を究めんか。或は政界失意者流の不平もあらん或は人物に對する憎悪の念もあらん或は施政の失策を憤慨するものもある可く又は眞實邦家を憂ふる衷情に出でたる者もある可きか。然れども多數黨派の跋扈政黨政治の形式を嫌悪する感念は慥に有力なる原因なりと云ふも不可なからん、洋行還りの松平男爵の政黨不必要論の如き谷子爵の潔癖の如き何れも貴族院連合の動機となりしもの、切言すれば政黨の弊を見て其利を見ざるの致す處之を今日の政黨に徴すれば誠に至當の事なりと云はざる可らず。

今や政界の分水嶺に到達せり。一歩進んで善良なる立憲政治の花園に遊ぶも一歩退いて醜怪なる黨派政治の巌窟に陥るも實に政黨の運用如何に繫れり。伊藤侯爵手造りの模範政黨は世人をして其害毒を恐れしめ貴族等をして其利を知る能はざらしめたり。既往は問はずも可、吾人は向後に於て政黨の緊肅政治家の自重を乞はざるを得ず。

政治家と宗教

政界の妖怪等は狼眼炯々として利慾の獲物を覘みつゝあり、見よ彼等が衆議院議員たるの肩書を振廻して種々の醜行を演じつゝあるを。又見よ彼等が運動と稱し奔走と云ひ巧に多忙なる樣子を裝ひ以て自家の勢力を示しつゝあるを。彼等はかくして現ナマに有り附きかくして幾多の問題を作り出し種々の方面に關係を有するに至る、何等の陋劣ぞ。

我邦の政治家は宗教上の智識に欠乏せり。比較的に敬遠主義を採りて宗教を度外視せり、之れ一は以て憂ふ可く一は以て賀す可き次第と云はざる可らず、然るに近頃彼等の擧動を覩るに彼等はソロ／＼其毒手を宗教界に擴げ次第に其の悪德を教徒間に傳播せしめつゝあり。曩に宗教法案の議會に提出さるゝや教界二派に分離して其得失を爭ひ激烈なる對抗陰險なる手段を以て教界に大波瀾を起生せしめたりき、爾來宗教家の政界に接觸するにつれ政治家の教界に奔走するにつれ双方の内幕は茲に暴露し、政治家を利用して自己の勢力を扶殖せんとする山師坊主と、宗教を利用して自家の利慾を遂げんとする堕落政治家と意氣投合同氣相求め互に

密接の關係あるに至れり、宗教を敬重して國家の福利を增進せしむるは善良なる政治家の爲す處、宗教を利用して國民に害毒を與ふるは無識なる政黨員の爲す處なり。俗諦門に誠實なるは宗教家の盡す可き義務なり俗諦門を害用するは山師坊主の喜ぶ處なり。

今日の政治家は果して宗教を敬重するか、今日の政黨員は果して宗教家を敬重するか。大野心ある政治家を見よ、宗教を政界に利用せんと其機會を待ちつゝあるに非ずや、小野心ある政黨員を見よ宗教を利用して自己の利慾に供しつゝあるに非ずや。

政治家と宗教なる問題は早晩世人の注意を喚起し其解決を要するの時あらん。而も之れ邦家の慶事と爲す可き乎。吾人は政界の領袖教界の長者に向ひ其覺悟を促さゞるを得ざる也。

●政界日記（從二月二十二日 至三月二十二日）

▲法官躍氣　六十餘名の法官增俸問題に會議を開く（二月廿二日）

▲樞密顧問　清岡公張氏逝去（二十六日）

▲停會詔勅　上院增税案の否運終に十日間の停會となる（二十七日）

▲露清密約　電報詳報來る（三月三日）

▲元老參上　山縣松方の二元老御召しに依り關西より來る增税案に就て貴族院調停の爲なり（五日）

▲夢物語り　日本倶樂部に於ける藤侯隈伯二老の夢物語り（仝日）

▲再停會詔　五日間再停會（九日）

▲增税勅語　降る（十二日）

▲國民同盟會　錦輝館に大懇親會を開く（仝日）

▲市參事會　收賄事件第一回公判を開く、此日隈伯の邸燒く（十四日）

▲首相進退　十三日首相以下各大臣の出せる進退伺却下の恩命あり（十五日）

▲上院增税　を議決す（十六日）

▲元老退京　上院の增税案通過と同時に山縣松方西鄕井上の諸元老皆閑地に行く（十八日）

▲彈劾の案　進步帝國兩黨より現内閣の彈劾案出づ、二十七名の小數にて否決、此日伊侯の演説ブランデーの氣焰殊に甚し（十九日）

▲公債暴落　龍動市場我公債暴落の報あり（二十一日）

▲豫算成立　兩院協議會の結果官製鋼所費を上院の主張通り否決し、其他は下院議決通りとして下院の滿場一致豫算案を成立す（二十二日）

▲英露衝突　を初め、露國の清韓に對する運動切迫、外交界大に色めく（仝）

▲常備艦隊　航海演習を對島近海に開かんとす（仝）

教育時評

竹　友　子

中學校令施行規則

中學校令施行規則は、文部省令第三號として、去る三

月五日發布せられた。まづ第一に痛癢に觸ッたのは、文部省自身の提案で、高等教育會議の諮問を經て、廢止することに決定した漢文科を、自分勝手に存することゝしたことである。しかしこれは別に論ずるとして法制、經濟、及び唱歌を必須科としたのは、我等の宿論と合して居るから、異議のあらう筈はない。また教授時間も、數學の方で非常に減らされたから、漢學者連の妄動のやうに、數學者連が騷ぎ出すかも知れない、文部省は無定見で腰が弱いから、騷げば必ず成効する。數學者連たるもの、一奮發なかるべからざるところであらう。

我等は、常て小中學の學年の始期と終期とを、高等學校やその他の學校のやうに、九月始めの七月終りにする方が適當だ、といふことを論じて置いたことがあッた。此の規則では、從來のまゝになッて居るが、甚だ遺憾のやうな氣がする。それから、假名遣について、小學校とは、どういふ風に連絡させるつもりであるかといふことが明瞭でない。まさか近古の文を讀ませ、文法の講義を聞かせて置きながら、アコーゴザイマスとか、ヨロシユーゴザイマスとか書かせるのも、何だか變なものだらうし、さりとて小學で習ッた假名遣を、ぶちこわすといふ譯にも行くまい。又中學の生徒數は、特別の事情あるものでも六百人を越えることが出來ないとあるが、現に七百人八百人といふ多數の生徒を收容して居る學校は、畢竟どういふことになるのだらう。要するに、此の施行規則は、確に一般の進歩はしたものに違ひはないが、尚幾多の缺點は免れないやうである。

文部の無定見

無能、無氣魄、これは曾て我等が文部省に奉ッた尊稱である。しかるに、今また新に無定見といふ尊稱を奉らなければならないことゝなッたのは、帝國の教育のため、誠に悲しまなければならないことである。

文部省自身もその必要を悟り、天下の輿論もその急務であるといふことを認めて居るところの、二大學三高等學校の增設、及び國語調查會學制調查會の創設も、たゞ大藏省の故障によッて、立消えにしてしまはうといふのは、無能でなくてなンであらう。無氣魄でなくてなンであらう。

自身が、中學校の漢文科は廢してしまはうといふ案を立てゝ、高等教育會議に提出し、諮問の結果、廢する

ことに決定したのだから、誰が何と言はうとも、廢して置かなければならないのに、自己の利害を外にしては、教育の精神がどうあるべきものだやら、教育の効過がどうなければならないものだやら、一向譯のわからない迂儒輩の妄動に恐れて、愧かしげもなく自分の意志を枉げ、圖々しくも高等教育會議の決議を無視して、もと／＼通りに漢文科を存することゝしたのは、無定見でなくて何であらう。

苟も堂々たる文部省ともあらうものが、一部小數の人士の妄動のために、當初の意見も變更したし、高等教育會議の決議をも無視したとあッては、その威信が全く地を拂ッてしまッて、餘計なことだが、我等は、その行末が甚だ案じられてならない。

松田文相を葬る

一省の大臣として廟堂に立つ以上は、自分の責任がどの位のものであるか位は、心得て居なければならない。若し人が、文部大臣の椅子を占めて、帝國の教育施政を司ッて居るとしたら、その施政上の一言一行、悉くこれか責任を負はなければならないのは、もとより言ふまでもないことである。一時出鱈目の間に合せを並べて、後は野となれ山となれ主義を振廻はされた分には、實に帝國教育の將來が思ひやられる。

二大學三高等學校の増設國語調査會學制調査會の創設是等の甚だ急務であるといふことは、實に天下の輿論である。文部省がその設立費を追加豫算として大藏省に請求したのは、定めてその急務であるといふことを自覺しての上のことだらうと、頗る心強く思ッて居た。勿論自覺の上の請求であッて、決して天下の輿論にフラ／＼ッと逆上せて、一時出鱈目の間に合せを並べたのでないとすれば、飽くまで此の請求の容れらるゝやうに働かなければならないし、又どうしても大藏省が承知をしない時には、斷然冠を掛けてその責任を明にするのが、大臣たるものゝ道である。世間の評判では、どうやら此の追加豫算は、大藏省が承知しさうにもないといふことである。若し此の評判が事實であるなら、松田文相はどうするつもりであるか、言ふまでもなく大藏省と奮鬪するのである、戰敗れたら潔く討死するのである。若し鬪もせず、討死もせず、後は野となれ山となれ主義を執ッて、愚圖々々の中に、七十五日の人の噂を通り越さうなンてやうな太い考があるなら、我等は、帝國教育の將來のために、その首を貰はなけ

れば承知が出來ない。厭ではあらうが是非共、我等の手で葬らなければ、止むことが出來ない。

殊に今度發布になッた、中學校令施行規則の漢文科一件は、一躰何といふ失態であらう、汪儒輩の妄動に恐れて、自分の意志を枉げるさへあるに、高等教育會議までを無視してしまッたといふのは、何といふ意氣地のないことだらう。何といふ無定見のことだらう、ただこれだけでも、葬ッてしまふだけの價は十分である。

マクスミユラア博士の遺書

高楠博士が、去る三月四日の『讀賣新聞』に寄せられた「マクスミユラア博士の遺言及び同夫人の書簡」と題する文章を讀ンで、マ博士の遺書一萬數千冊が、賣物になるといふことと、獨逸の某大學が、これを買はうといふ交渉を始めたといふことと、マ博士の未亡人は、該遺書の全部が日本に渡來せむことを希望して居られるといふことと、該遺書の大半は、我學生のためには新書であるといふこと、今後三萬圓出しても、その半をも得ることが出來ないといふことを知り得た。

一躰なら、あれ程の東洋學者の遺書だから、縱令それが甚だ珍とするに足るものでなくとも、また三萬圓の價値のあるものでなくッても、東洋學研究の中心とならなければならない日本の大學では、これを買入れて永久に保存し、マ博士の靈を安ずる位の雅量がなけねばならぬのである。高楠博士が、「予は、法科大學が、臨時に議院の協贊を得て、其教授の遺書全部を買得せる例に依り、文科大學が、馬翁の遺書全部を購求せむことを希望す」と言はれたのは、當然の要求であると信ずる。

言文一致

言文一致といふことが唱へ出されてから、まだ幾歳月も閲しないのに、早く既にその聲が天下に響き渡つて、そこにもこゝにも、反響を聞くやうになッたのは、勿論唱へ出した時が好かッたからでもあるが、第一日本今後の文躰としては、言文一致躰の右に出づるものがないといふ程の長所を具へて居るからでもある。

今更言文一致の長所は是々だと言ッて、一々數へ擧げる必要はない、新聞の上でも雑誌の上でも、近來はめッきり言文一致躰の文章が殖えて來たのと、各府縣に、言文一致會の支部が續々として設立せられるのと、此の二ッの事實は、優に言文一致の長所の多いといふこ

とを證據立て居る。此の勢では、亂雜なる日本現代の文躰も、言文一致躰に統一せられることが、遠い後のことではなからうやうに考へられて、甚だ心嬉しいのである。

言文一致躰と言ッても、決してその文躰は一定して居るといふのではなく、現在の狀態では、寧、亂雜至極と言はれてもしかたがない。演說とか、議論とか、紀行文、記事文、書翰文とかいふやうに、文の性質の異ッて居るのはまァ取りのけとしても、第一言葉が滅茶々々であッて標準がないし、第二假名遣がまち〳〵であつて、人々勝手な書きかたをして居るといふやうな譯で、佳いのもあるが惡いのもある、つまり言文一致は、まだホンの生れたばかりであるから、これからだン〳〵發達もしなければならぬし、進歩もしなければならぬ。發達させ進歩させるには、是から大に研究もしなければならぬし、幾多の練習も重ねなければならぬのである。

予は、此の頃言文一致會の會員となッた。能文なる本誌評論記者諸君の間に介在して、我一人未熟にして味なき言文一致を振り廻はすのは、即ち是がためであるといふことを、本誌の讀者諸君に向ッて謝して置く。

●ちりづか（二月二十日から三月十九日まで）

●**公德養成**　來る四月十三日から、仝十五日まで、三日間、東京で開かうといふ全國聯合教育會へ、諮問案として文部省から出さうといふ問題は、(一)小學校及び中學校に於て公德を養成するの方法如何、(二)小學校中學校師範學校生徒の禮式を一定するの可否、(三)半日小學校實施の方法如何の三つたさうだ。流行に逐はれて、公德養成の方法を問ふなどは、よく文部省の文部省たる眞面目を表して居る。それに、今始まッた事ではないが、かういふ會合に出て來る連中は、多く東京見物をあて込ンで居るのだから、諮案も諮問案もあつたものではない、蛙啼蟬噪の小田原で終るのに知れきッて居る。

●**大橋佐平氏の圖書館**　博文館の主人、大橋佐平氏は、今度、石黑忠悳　上田萬年、田中稻城、等の諸氏の協贊を受け、財團法人の方法を以て、一圖書館を市內に設立し、その資金に拾萬圓、維持金に二萬五千圓を寄附するといふことだが、誠に結構なことである。世間の多くの大商人、暴利を貪ッて大商人となり濟したものどもは、こふいふ公共的事業でも起すのが、せめてもの罪滅しである。

●**村井兄弟商會の圖書出版會社**　烟草トラストで有名な村井兄弟商會では、また〳〵莫大の資金を外國から得て、圖書出版會社を起し、大にもうけるのださうだ。それもよからう。

●**島津家の外國教師聘傭**　島津公爵家では、子女教育の忽にすべきものでないことを悟つて、其家庭教師に、英國人ミス、ハアウオルド女史を傭聘したさうだ。女史は、先年獨逸に聘せられ、現皇帝陛下の皇子達に、語學を教授し、且つ家庭教育を擔任して、宮庭の信用もあッたし、皇子達も深く愛慕せられたといふことだ。又その外に、駐英遥

羅公使の子や、英國知名の士の子女を教育したことも多いさうだ。由來門の拔けて居る華族の中で、家庭教育の必要を感じたといふことへ喜ばしいのに、かやうな良教師を招聘し得たといふのは、たゞ島津家ばかりの幸福ではない。

◉大學增設　教育上の問題は、豫め私心を挾んで解釋すべきものではない。夫の帝國大學增設のことなど、眞に天下の輿論であつて、誰一人不同意を唱へるものはなからうと思つて居たのに、有力なる『時事』『讀賣』の兩新聞が、筆を揃へて反對をしたのは、その膓が見えすいて、甚だ氣の毒なやうな氣持がする。

◉私立大學　學問は、官學の專賣品ではない。我等もとより、私立大學の勃興を望んで止まないものではあるが、しかし、『時事』や『讀賣』のやうに、己が私立大學に密着の關係があるからつて、それで官立大學の增設に反對するといふのは、まるで贊嚢の小さい商人が、向横町へ新しい同業者の開店しやうとするのを嫉んで、百方これを妨害しやうとするのと、同じい列のものであるとしか思はれない。

◉國語科實施方法要領　高等師範學校では、昨三十三年八月、文部省令第十四號、小學校令施行規則第十六條により、同校附屬小學校の國語科實施方法取調方を、同校教授、後藤牧太、那珂通世、三宅米吉、畠山健、桑原隲藏、岡倉由三郎、小泉又一、吉田彌平、同校教諭、三土忠造、石川倉次、及同校訓導、佐々木吉三郎の十一氏に命じたが、此の頃調査を了へて、官報で發表せられた。評に及ばず。

◉東京府第一中學校の生徒監督　此頃同校の保證人會で、校長勝浦鞆雄氏が、學校教育と家庭教育との關係について、一場の演說をなし、最後に左の監督注意を、各保證人に託したさうだ。

(一)、勞苦に堪ふる習慣を養成せしむ(二)、自然的の保養を爲さしめ人爲的なるは務めて避く(三)、衞生に注意して體質の强健を謀る(四)、閑居せず必利益ある何事をか爲し光陰を空費せざる習慣を養成せしむ(五)、姿勢を端正にす(六)、酒及煙草を禁ず(七)、長所短所を併せ知る(八)、生活の狀態をして規律的秩序的ならしむ(九)、遊戲の性質の善惡に注意し例令善良なる遊戲と雖も其度を過ぎざらしむ(十)、一方に偏したる習癖を矯正す(十一)、怠らず動作の優雅高尚を謀る(十二)、不規律なる勉學を避け必ず一定の日課表に從はしむ(十三)、稗史小說の閱讀を禁ず(十四)、朝夕の起臥時間を定め出來得べくんば外出歸宅の時間も正しからしめ且つ出入必ず父兄に告げしむ(十五)、金錢の支給を嚴にし必要已むべからざるもの丶外與へず(十六)、儉素の德を守らしむ(十七)、朋友の撰擇に注意す

◉曉星中學校　は、三月廿三日、徵兵令の特典を得た。

◉學習院の分院　同院では、今度協議の上、尋常科の生徒の便利を計るため、本鄕附近に分院を置かうといふので、目下地所選定中である。

◉早稻田實業中學校　大隈伯は、近頃東京專門學校や早稻田中學校の教員などゝ相談して、早稻田實業中學校を創設し、本月中旬から開校するさうだ。

◉日本女子大學校　は、本月廿日から開校するのださうだ、各科とも、入學志願者は定員を越えたといふことだ。

◉蒲生重章翁逝く　一代の鴻儒、蒲生褧亭翁は、三月八日永眠せられた、洵に悲しむべきの極である。行年は六十七歳であつた。

◉江馬聖欽翁逝く　京都の詩宗、江馬天江翁は、三月七日永眠せられた。洵に悲しむべきの極である。行年は七十七歲であつた。

◉加藤弘之博士　は、今度、東京帝國大學名譽教授といふ稱號を

受けられた。

●書籍雜誌　『實践倫理要義』(山本夏吉氏編)。『道德實践法』(大町桂月氏著)。　國語綴方教授法』(有馬騰氏著)。『教育的心理學』(寺内頴氏述)。その外に、道義の頽廢を憂へ、腐敗の匡救を志して起ッた、『廿世紀』といふ月刊雜誌が出た。

文藝小觀

風俗壞亂と誹毀中傷

春湖

吾人は、平生ひそかに怪んで謂へらく、わが爲政者は、何が故に風俗壞亂の文書を遇するに嚴にして、誹毀中傷の記事を取締るに寛なるかと。それ、風俗を壞亂すべき文書の社會に毒を流すや、もとより論なし。しかれども、他を誹毀中傷せる記事の公衆に加ふる害、また決してこれに讓るものにあらず。否、前者は、當社會の審美識如何によりて、その毒を流すの度、或は多からざるを得ることなきにあらずといへども、後者は、ひとり被誹毀中傷者その人に對つて、その面目と名譽とを損はしむるのみならず、いまだ、その人を知らざりしものをして、なほ、その如き敗德者なりと誤り信ぜしむ。この點よりいへば、後者の害は、決して前者の如く小なるものにあらざる也。しかるに、わが爲政者は、風俗壞亂に關しては、これを遇すること、頗る苛酷、些も文字の猥雜にわたる所あれば、たちまちかの忌むべき刑名を加へて發賣を禁止し、甚しきは、學殖ある鑑識者が見て、實感を挑發するものにあらずと認めたるものに對してすら、法に處して敢て憚らず。これに反して、誹毀中傷に當たるものは、事の當路の有司もしくは知名の人爵者に關するものにあらざるよりは一切措いて問はず。或は、これがために禍を得て冤を窮途に泣くものありといふとも、恬として加害者を罪せんとはせざる也。こゝに於て、近時世に出づる刊行物を見るに、多くは競うてこれを事とし、私怨を以てふくむ所あるもの、流俗の歡心に投じて、賣らんことを求むるもの、もしくは風潮を趁うて雷同するもの等、滔々相率ゐて無禮を人に加へ、他がこれがために恥辱を蒙りて窮困せるを見て、かへつて喜ぶ、甚しきは、道路の風説を聞いて、そのまゝに記載して顧みざるものすらあり。かの金錢を强請せんがために、機關として新聞紙を發行するもの、如き、また實にその一也。こは、もと社會公德の缺乏に基く所多しといへども、そも／＼また、當局者が誹毀中傷の罪を等閑す

るの弊に座せずんばあらず。かくの如き惡德の流行は、をのづから文壇の墜落を表するもの、まことに憂ふべきの至といふべし。今や社會道德の標準定らず、畏くも皇上親ら詔を下して國民道德の嚮ふ所を示し給ふに至るまで、倫理思想の缺乏を告げたるの時、かくの如き敗德のことある、實世間に於ては決して異むに足らずといへども、世間以上に卓立して精神的事業に從事せる文士の間に於ては、甚だしく慨すべきにあらずや、吾人は爲政者が、今の世態に省みて、誹毀中傷の記事を取締ること、風俗壞亂の文書に對するより更に大に嚴ならんことを望む。

詩文人と素行

このごろ、詩文人の汚行、頻々として傳へらる。これを傳ふるものゝ中には、もとより人の言に聞いて輕々しく信じたるもあるべく、もしくは、意ありて故らに捏造したるもあるべし。されど、それその凡てを擧げて悉くしかりといふにあらず、間々かくの如き虚構のことありといへども、中には、倣ふべからざる事實の存するを否むべからざる也。けだし、思ふに、文學は出世間の學也、言を換へていへば物質的羈絆を脫したる精神界の所産也。隨うて、これに從事するものは、すなはち出世間の人、精神界に捿息するもの也。しかれども、これは、たゞ、その職業の上よりしてしか分つものにして、職業を離れて社會に立てる時に於ては、その國の法律を遵奉し、その社會の制裁に服從すべきこと、なを、かの世間の人々と異る所なし。何となれば、これは個人として、國民として、その國、その社會に對する正當の義務なれば也。しかるに、この義務あるをさとらず、口を出世間の人、精神界の捿息者といふに藉りて、國家の法律と社會の制裁とを無みし去るものあらば如何、これは、いふまでもなく、個人及び國民としての存在を認めざるもの、換言すれば、わまりに自家の職分を覺知するに過ぎて、却つて社會人（ゾシヤルマン）としての人格を顧みざるもの、要するに、文學あるを知りて人格あるを知らざるもの也。吾人は、今の汚行を傳へらるゝものゝ中、果してこの類の人あるか否かを知らず。されど、かの「ぶる」といはれ、「氣取る」と譏らるゝものゝ、或はこの種の謬見を抱くよりして來り、少なくとも、自家の構成せる小天地の埒内に拘束せられて、小天地以外、別に社會あるを知らざるに本づけるにあらざるかを疑ふ。

或は説をなしていはく、詩文人は天才也。天才者の行爲は放縱也。常人の規矩を以て律すべからずと。しかり、詩文人は天才なり、天才者は時に常人の規矩を以て律すべからざる異常の事をなすことあり。その詩文の業に從事するものにありては、詩火(ポエチカル、フヘイア)燃えて熄まず、神興湧いて禁ぜざるの時、しば／＼我を忘れ、社會を忘れ、身外の諸物を一切忘失して、所謂忘我の境に入ることあり。されど、こはたゞ紙をのべて、これに對するの瞬間のみ、案を構へて想を練るの刹那のみ。この以外に於ては、決して常人と異なる行爲をなすことなし。況んや、二六時中、異常の事をなして放縱みづから處るが如きに於てをや。かくの如きを以て詩文人の常事なりといふは、敗德者の非行を曲庇せんとするもの、しからざれば、天才者を以て異常識者と同視するもの也。異常識者の危險なるは、世のすでに知悉せる所、天才もし異常識なりとせば、巣鴨病院の寄食者は、悉く詩文人たり得べきにあらずや。もしそれ、詩文人は、その想像を豐富ならしめんがために、親しく境に臨んで實驗を試むるの要ありといふか。その言の蒙なるは、すでに美妙氏の時に於て道破せられたる所、今に於てまた言を費すの要なし、實驗にあらずんば想を構ふる能はずとせば、想像の泉源すでに涸れて詩作の能ほとんど缺けたるもの、よし材を經驗に借るといふとも、之を醇化して想像を助長せしむるの能あらんや。かくの如きの輩は、速に文壇を去つて、經驗の奴となるべき職業を求むるに如かざる也。

人を責むるの道

人に非行あり、これを責めんとするに方りては、すなはち、まづその事の實と否とをたゞし、もし眞に事實なる時は、ひそかに、その人に向つて反省を促すべし。而して反省を促すこと一再、しかも、なほ聽かずんば、この時に於て、はじめて、その事を公にして、現社會の制裁と公衆の審判とに訴ふべし。こは、けだし人を責むるの順序也。しかるに、かくの如き順序を經ず、非行ありと聞いて、たゞちに、これを暴露するは、決して人を責むるの道を得たるものにあらず。かくの如くんば、たゞに、その人をして悔悛の時機を失せしむるのみならず。或はこれがために反抗の勢を增してかへつて非を重ぬるに至らしむるとあれば也。吾人、近時の人を責むるものを見るに、多くは、この順序を經ず、他に失態ありと聞いて、たゞちに筆に上

すものの如し。中には訐發の不德を知らざるにあらず、これを知るといへども、その罪を惡むの餘、なほ、忍んでこれを敢てするといふの意、行文の間に認めらるべきものなきにあらず。しかも、吾人は訐發を不德と知るの良心あらば、その不德をなすに先だつて、その人を反省せしむるの慈悲なかりしかを疑ふ。要するに、近時の文筆者が人を責むるの態度は、決して道を得たるものにあらず。吾人は、これがために、一種の悪風習を釀出せしむるに至らざるかを恐る。

露伴氏のモーラルトーン

近者、露伴氏の作を批議するもの、その作にモーラル、トーンありとして甚しくこれを揚ぐるものあり。氏の作にモーラル、トーンあるは事實なり。されど、モーラル、トーンといふもの、藝術美に於て幾何の値かある。藝術は美を對境とするもの也、而してモーラルは善を目的とするもの也。美を對境とするもの、善を目的とするものを示現したりとして、これ豈甚しく揚ぐるに足らざるにあらざるか。モーラルを捉へ來るやよし、されど、そは美を示現する料として遇すべし。これを描かんがために藝術を借るに至つては、本末を轉倒せるもの也。吾人が氏の作にとる所は、モーラル、トーンそのものにあらずして、これを詩化し想化せる氏の藝術的伎倆にある也。

むしろ悲むべし

近時一流の批評家は、客觀詩よりもむしろ主觀詩を歡迎するの風あり。言を換へていへば抒事的よりも抒情的、すなはち作中の人物箇々の性情を示現したるものよりも、作家その人の主觀想を表白したるものを喜ぶが如き傾向あり。これ、思ふに現代の主我的なる思潮が文壇に入りて、この傾向を喜ぶに至らしめしものなるべしといへども、批評家にしてこの事ある、むしろ悲しむべき也。何となれば、批評家は時潮の前頭に立つて一代の文運を指導するもの、しかるに、時潮に飜弄せられて、これを脱離する能ざるは、前頭に立つて標的を示す能はざるものなれば也。

（前一ヶ月）

風塵紛々

測觀先生

▲今度の『帝國文學』は甚だ讀むべき文字に滿ちて居る。

▲其中で、高山君の「天平時代の美術」といふ一篇は、いつか『國華』と

いふ專門雜誌に出た仝上題のに次いで頗る注目すべきものであるが、世間では未だ何とも是非の聲が揚がらない。

▲一體我國の人は美術にはひどく冷淡で、學者といはるゝ方々でさへ、口の先きではやれ東洋の美術だの、美術の前途だのと、とも〳〵議つたやうなことをいつてるが頭の中はまるでゼロで……、たま〳〵手に取るかと思ふと、床にかけて直段の高い安いを話すが關の山、筆や色どころか、畫家の名さへ碌に知りもしない。それはもう、雜報かきや、美術界の彌次馬……なつと失敬、事業家ト——研究家といふより事業家——を引つ張り込んで審査を頼むやうな國だから、こんなことをいふのも……あゝ〳〵駄目か。

▲『帝國文學』といへば、仝誌の「雜錄」に登張竹風君の「自然美と藝術美」といふ一篇があつて、井上博士の美論を難じて居られるが、博士も恐らくばこれに對して答ふることは出來ないであらう。

▲本誌の時文記者は、前號に博士の論を評して、常識上の說明であるから淺薄といふ譏は免れない、どふか、も一層精しい美學的說明を拜見したいとお願ひ申したが、『太平洋』の天宮士と名乘らるゝお方は、これを評して、博士の淺薄なことは判りきつたことである、是迄の時代は博士のやうな多能の學者を要したのだ、といふやうな意味を述べられた、これ、またわかりきつたことであつて、別にお答へ申すまでもない。

▲紅葉君の『金色夜叉』は、とかくの批評はあるが、まづ明治年間の大作で、さすがに硯友社頭領の作たるを失はない、あの分では未だなか〳〵終りさうには見えぬが、自分が早く知りたいと思ふのは貫一が宮の悔悟を容るゝか容れないかといふので、早くいふと、貫一は是迄推し通した意志を終ひ迄推し通して行くことが出來るか、或は人間の自然に復つて宮をいとほしといふ情が出で、その情が意志に打ち勝つことはないか、つまり貫一の性格がどふ描かるゝかを知りたいのである。鹽原へ引つ張つて行つたりなんかなさる所を見ると、貫一を心機一轉せしめんとして其動機（モーチーフ）を與へて居るのではないかと思はるゝが、しかし、まださうと斷言は出來ない。

▲斷言は出來ないといつたものゝ、是迄の仝君の作と情死の相談を聞かせられる所などから見ると、貫一の性質ががらりと變る……といつては少し云ひ過ぎるが冷灰のやうになつた情の火がだん〳〵と燃え出して宮に笑顏を見せるやうになるに相違ないと思ふ。失望と怨恨の大打擊に逢つて、あれ程まで冷却した情であるから、それを呼び起すには、人間情の極といふ心中でなければ……といふので、仝君はこれを持つて來られたのであらう。

▲熱海と鹽原とは貫一にとつて煩悶の場所である、しかし、同じ煩悶とはいふものゝ、それが違つて居る、熱海では、宮及び宮一家へ對する怨み——たゞ此怨みの一念であつたが、鹽原になると、此怨みといとほしいと、即ち意と情との二つが戰つて居る、熱海の時も此煩悶を現はす心理的描寫が足らぬやうに思はれたが、鹽原でも或は此感がありはしないかと思はれる、しかし、之は此稿をかいて居る時、即ち『金色夜叉』(十三)の三迄についていふので……。

▲露伴君が『新小說』に載せられた「一國の首都」は、近來の大文字で、文人ばかりでなく、他の社會の人達も精讀の値がある、『洒落本』を安永天明時代の代表者とし、『梅曆』の丹次郎と米八仇吉を江戸滅亡時代の理想的人物とし、京傳と春水の差違を勘校して、夫から左の如くいつてある。

　德川氏の長州征伐は丹次郎對奇兵隊の戰なりしなれば、其威を墜し武を瀆したるに止りしは當に然るべきのことなるが薩長土肥對遊廓藝妓

娼妓の勝敗は如何なりしや、事實は眼前にあり、……丹次郎對奇兵隊は丹次郎の敗北に終りしが長の奇兵隊、薩の兵兒及び土肥の同盟軍對米八仇吉の結果は、一も二もなく米八仇吉等の勝さなりぬ、政府は西南の人の有となれる觀ありさ雖も、其實天下は藝者の天下さなりぬ、嗚呼、明治小說も、美術も、詩歌も、演劇も、新聞も、雜誌も、其實は藝者の德を頌するに止まんとするさあらずや

▲『小天地』の浩々君は、その「時文私觀」で露伴君の「一日ものがたり」を褒めて、その後で『文藝倶樂部』の蝶二學士と『太陽』の桂月學士と、そして自分との批評を援いて、態度を冷淡で、淺薄で、輕浮だといつて居られる、しかし、あの論は自分に對してさいふよりも、他のおふた方に對つていつて居られるやうであるから、自分がお答へをしやうさ思ふなら、も一應自分に對する御議論を承はられればならないが、自分は今一度あの一節を御覽にならんことを願ふ。そして自分のは物語の後節の分だけをさしていつたものさいふことも御承知を願ひたい。

▲「散文にてさへあらば單に美文なり、小說なりさするか」といつて居られるが自分は「修辭」さ申したのである、しかし、これも外のおふた方へ向つてゞあらうさ思はるゝが、引合ひに出されたので一寸辯して置く。

▲浩々君は、また、花袋君の『太陽』にお出しになつた「新潮」からひいて「わが社會の一面に懷疑、對物質的反動の思潮潛流」があるさいはれたが、いかさま、それに相違ない。今度はどんな形をさつて文壇に現はるゝか知らぬが、ごふか此まへ獨乙學風に伴うては入つて來た反動思潮――――反動といはれるか知らぬが――――のやうに危險でないものが望ましい、あれば、或る一派のお歷々がいはれた通り果してウエルテルズムやバイロニズムといふやうなものであつたか、ごうか知らぬが、兎も角も、あれがために厭世や自殺さいふ聲が高くなつて、社會の一面に不健全な影が現はれたことは未だ記臆して居る方があるであらう。それが征清事件の餘波とくつ着いて、暗黑小說とやら、悲慘小說さやらいふ一種の潮流が出來たが、何さま有難くないものであつた。

▲今後もし一種の思潮が小說の上に現はるゝさするさ、それは恐らくば勞働問題さか、社會問題とかで、資本主に對する反抗さいふやうなものではあるまいか。

▲今の小說界には、まだほんさふに深いといふ評を與ゆるやうなのはないやうに思はれる、これは、ひさり小說ばかりではない、繪畫でも、彫刻でも、また演劇でも……、たゞし、注意してをくが深は澁いといふことではないから……。

▲鏡花君の小說は、無論人のよくいふ幽怪さやら申す方で、深いさいふ方ではないが、何となく奧行があるやうに見うける、しかし、その奧行も登るに從うて花はいよ／＼多しさいふ吉野山ではなくつて、行けば行くほご迷ひ入るさいふ八幡知らずだから磁石を持たないものは容易に步かれない。今度の『新小說』に出された「水鷄の里」といふのは、何か意味があるのか知らぬが、神仙譚さも見えず、一種の怪異譚さ見るより外はない。もし寓意小說として作つたものとするなら、その意味は未だ充分に現はされて居ないといはなければならぬ。

▲同じ號の『新小說』にある春葉君の「逸話」は憚らずいふと、あまり佳い作ではないが、何さなく垢ぬけのした處がある、何物をか摑まうさした趣は能く認められるが、瀬山が餘り理窟をいひ過ぎたので折角の苦心をこはして了つた。

▲『新小說』は本月から「海外文壇」さ「流行」の二欄を一新設するさうである。

▲話はさぶが、今月の歌舞伎座は「黄門記」の通しさ、中幕が「大徳寺焼香場」さである、菊五郎の吉識は無論揃り役であるが柴田勝家は太閤の團十郎に對して一歩を讓らざるを得ない。形式の上に於ては流石に日本一、苦心の程も察せらるゝが白に至つては殆ざダメで、朗讀調の八百藏にさへ壓せらるゝ傾がある。元來時代的の白は、今から見ると文章さ思はれる程、一種の調子が備はつてあるのに、渠は全然世話物化していつて居る、たさへは、にてさいふ所をでさいひ、それから難しさいふ文章語の所を難いさ平談にくたけて了ふが如きて、世話から進んだ渠のことであるから巳むを得ないとするも、まことに惜いことではないか。

▲早稻田派の文士土肥春曙君は今度某學團から演劇取調を囑せられて歐洲へ視察に赴かれるさのことである、我國に學者は隨分多いが未だ劇學研究のため洋行するものはなかつたが、仝君は實に初めてである。ごうか充分視察を遂げて歸朝の上、我が劇壇に新曙光を與へるさともに、見もしない僻に通がるハイカラ共へ一泡吹かして貰ひたい。

▲展覽會が開かれたかさ思ふさ、すぐもう何處かで騷動を始めたやうだが、何故美術家さいふものは、あんなに品性が陋劣なのであるか知らん……。

▲本鄕の弓町二丁目に女子美術學校がたつたことは、前號に報じてあつたが、いよ〳〵今月十二三日頃から初めるのださうで、學科は普通、高等の二科に分れて三ヶ年と二ヶ年、それから研究科と專修科が、ごちらも一ヶ年づゝあつて校長は藤田文藏君、

▲靑年文士が文學の方面から轉じて、社會の側へ筆を執るやうになつたのは、新現象として注目すべきことであらう。

▲それから、今一つ注目すべきことは一旦ずんさ靑年に擔ぎ上げられた人が、暫時すると逆比例で眞つ逆樣に顚落されることで、介石君、鑑三君があの通りで、今はまさに、鐵幹君がそれである。金箔が剝げたのか、もしくは、初めからニツケルさ見究めることが出來なかたのか。「ちよいと、團扇はごつちに揚ります」と行司が居たら諕れたくなる。

▲眞正か噓か知らないが『文壇照魔鏡』といふのは隨分酷いことを書いたものである。此次きにはピーヤホール御前さやらが出るとのことであるが、あゝ、卑なことをするではないか。

▲『文學界』が再興になるさいふ噂がある。

▲『小天地』に出た永井荷風の（山谷管垣）といふ作は、ちよいさ詩趣がある、それから今號の「劇さしての不如歸」といふ一篇はなか〳〵熱心にかいたもの、

▲「不如歸」だの「巳が罪」だの「寒牡丹」だのが歡迎さるゝのを見ても判るであらうが……文壇は暗默の間に歩調を轉じつゝあるので、

（以上二十一日記）

宗教評論

日本に於ける救世軍の成功

桃華

明治二十八年九月四日英國同軍の本營より英人ブラード氏夫妻以下十四人の初めて橫濱に着せし以來、僅に六年、世人は今猶同軍の擧動を以て茶番視し、冷笑を以て迎へつゝあるが如きも、隱約の間其實際の傳道功

果は驚くべきものあり、今救世軍戰爭記なる同軍發行の冊子に依りていさゝか同軍の實況を紹介し、眠れる宗教界特に佛教徒の一醒覺に資せんとす

救世軍營所在地

○救世軍日本々營（東京市芝區芝口二丁目三番地）
○東京第一小隊（東京京橋區入舟町三丁目）
○東京第二小隊（東京牛込區改代町）
○東京第三小隊（東京本郷區元町二丁目）
○東京第四小隊（東京神田區三崎町一丁目）
○横濱小隊（横濱市壽町三丁目）
○横須賀小隊（相州横須賀町）
○八王子小隊（武州八王子八日町）
○岡山小隊（備前岡山野田屋町）
○玉島小隊（備中玉島本町）
○笠岡小隊（備中笠岡町）
○高松小隊（讃岐國高松）
○伊勢崎小隊（上州伊勢崎町）
○熊谷小隊（武州熊谷竹町）
○足利小隊（野州足利町）

社會事業部

○出獄人救濟所（東京神田三崎町三丁目）
二十九年十月創設、現在被保護者三十三名

○醜業婦救濟所（本營）
昨年八月創設、自由廢業の成功は全く同軍の急劇なる運動方法に依る、酌婦娼妓等の自由廢業を取扱ひ、正業に就かしむ、

○水夫館（横濱山下町百廿三番館）
四年前創立、水夫の流浪せるものを實費を以て宿泊せしめ、精神上の保護を與へ、仕事の周旋をなし、又世界救世軍人の寄港せる時の宿泊所に宛つ、六十人を宿泊せしめ得る規模なり、

同軍事業成功の一覽表左の如し

日本に於る救世軍の統計表

項目	明治卅三年一月	明治卅四年一月	一年間の增加
小隊の數	十二箇	十五箇	三箇
分隊の數	六箇	十箇	四箇
士官の數	三十八人	六十四人	二十六人
下士官の數	二十八人	四十三人	十五人
少年兵の數	八十二人	二百七十四人	百九十二人
少年候補生の數	無	十九人	十九人
賛助員の數	四人	百二人	九十八人
鬨聲發行高	三千六百五十部	八千三百部	四千六百五十部
出獄人救濟所に收容し得べき人數	十二人	四十人	二十八人
醜業婦救濟所に收容し得べき人數	無	二十人	二十人
軍營に容れ得べき人數	五百二十人	千五百四十人	千二十人

又偉大なる成功に非ずや、冷笑も熱罵も意とするところにあらず、一意實際の運動に着手せば宗教的成功は皆此の如けん、同軍に

克己献金

なる組織あり、一年一回唯一週間丈けを期して世界中の救世軍同時に身をつめて節し得らるゝ丈けの費用を節し、集めて布教及び社會事業費に宛つるなり、我國の救世軍が信者より得たる明治三十二年克己週間の献金四百五十圓、全三十三年は千五百八十圓、則ち一年三倍の増加なり、知らず我國の佛教徒中かゝる組織を勵行して傳道及び社會事業の費目に供しつゝあるもの果して幾人かある

因に世界に於ける救世軍の着手せる國は

英、北米合衆國、加奈陀、濠洲、佛、獨、瑞典、和蘭、諾威、芬蘭、丁抹、伊、南亞弗利加、印度、錫蘭、氷州、瓜哇、南米、西印度、布哇、日本、

明治三十三年これらの國に於ける事業統計は

一、小隊及び分隊の數　七千二百九十六箇
一、士官の數　一万四千八百二十三人
一、下士官の數　三萬八千八百七十一人
一、樂隊員の數　一万五千八百五十八人
一、新聞雑誌(廿一ヶ國の語にて)　五十五種
一、同毎號の發行部數　九十八萬千五百六十八部
一、出獄人救濟所、醜業婦救濟所其他の社會事業部　五百八十三箇

五百八十三個の社會事業部中の細目は三十二年の十二月に於て

一、社會事業に從事する役員　二千四百九十九人
　内士官及び候補生　千八百五十三人
　雇人　六百四十六人
一、醜業婦救濟所の數　九十四箇
　醜業婦救濟所に收容し得る人數　千九百三十七人
　一年中に醜業婦救濟所より出だる人數　五千百五十八人
一、安宿及び安料理店　百八十八箇
　安宿に止宿せしめ得る人數　一萬四千〇四十一人
　一年間に止宿せしめたる數　三百八十四萬六千〇四十一人
　一日平均止宿者の數　一萬〇五百三十七人
　一年間に食物を調へし數　五百九十七萬七千八百九十八人前
　一週平均食物を調へし數　十一萬四千九百五十九人前
一、授産場の數　三十六箇
一、工場其他の數　六十箇
一、貧民街出張所の數　百三十二箇
一、育兒院の數　十七箇
一、出獄人救濟所の數　十一箇
　一年間に引取られし出獄人の數　千五百七十人
一、探索部其他の數　七箇

此出獄人救濟所より出たる者の内八割は、一年の後に

於ても皆其正業に從事し居ることを發見し、醜業婦救濟所より出たる婦人は、三年の後に於ても八割五分迄、立派に堅氣な世渡をなすを見ると云へり

佛教界の統計

問 貴君は何宗の信者に候哉

答 小生は日本佛教の信者に候

問 日本佛教の信者は幾人有之候哉

答 約三千五百万人と申候

問 年々減少致し候やまた増加致し候や

答 知れ不申候

問 年々の宗教統計は如何に之を示し候哉

答 統計表は無之候

問 然らば何を標準として信徒の數を定められ候や、又勢力の增減を知り得られ候哉

答 無標準に候

問 併し各教會の本部にて問へばそれ〳〵精密の統計を知り得らるべくと存じ候

答 否本部の首長、教役者、總ても自宗勢力の消長は數字にて擧ぐることは出來不申候

日本佛教徒が外人の質問に逢ふての返答、常に此の如し、其組織最も完全に其勢力最も盛んなりと稱する本願寺すら統計の出版せられたること一度もあらず、一派一万の教會を持つと云はれ乍ら、社寺局の統計には僅に教會として十個に滿たざる數を擧げられ居るを見る、況んや自餘の各宗派に於ておや、丸で支那の人口と一般宛て推量の外あらざるなり

非文明の組織宗教界の如きは今日他の方面に類無し、これにても猶二十世紀の社會に生存せんとする抑も烏滸の沙汰なり

●卅日間の消息

自二月二十二日至三月二十三日

◎基督教界の大學傳道は中央首府にては音沙汰無之候へ共地方にては餘程良結果の由同教の人々より承はり候

◎東亞佛教會三高僧の托鉢今後も繼續の事と存じ候、某々居士連は見世物興行人の如き觀有り、何にも知らぬ無垢の高僧達には誠に氣の毒なる心地致し候

◎何を感じてか神道連も騷ぎ初め候、本月の十四日とかには扶桑、實行、黑住、大成、修成、御嶽、禊、神習、大社、神宮、各派の面々錦輝館に集りて聯合協會を開くとか定めて目覺しきことに候はん、天理、蓮門二教會の加はり居らざるはいさゝか物足らぬ心地致し候

◎富士、顯本の法華宗論中止と相成候、此滑稽劇が僅かに一二幕にて中入となりしは見物人に取りて何んぼうか殘り惜しきことに候はん

◉新聞界の名物明教新誌は二月二十八日四千六百三十號を以て日出國新聞に合併との口實にて廢刊致し候、兎にも角にも二十八年間終始佛教界の爲に盡したる功勞は沒すべからざる事に候、創立者たる肯髯翁の感慨は察せられ申候

◉日出國新聞は肯髯翁全盛時代に、やはり全盛なりし櫻痴採菊など云ふ新聞記者の元老院に候、これに明教新誌の合せられしも何かの因縁に候はん

◉兩本願寺共に大學も中學も本年より東京に移し又は新設することに候、東都の宗教界はいよ〳〵賑々敷相成候

◉東本願寺の紀念法會流石に負債償却の爲めさ云へる程有り人氣を集めることに全力を投じ居り候、各地新聞記者の參拜者には旅費も宿泊費も免れ申候

◉小石川の女子大學は本月廿日開校生徒申込は滿員とか申す事、坪内雄藏、浮田和民、關根正直、荻野由之の諸氏を始め外國婦人等が之に教授たる由に候

◉池上の本門寺は九日奥津の清見寺は十三日回祿の災にかゝり候惜しき事の限りに候

◉押川方義氏は支那にて一の學校を建てんと奔走中に候

◉佛教毎週新聞といふもの丹鬢源氏の主幹にて芝の廣町より發行せられ候、舊明教新誌と粗相似たる新聞に候

◉今年の佛教夏期講習會は多分清水港に相成るべく候、釋尊降誕會は四月八日例年の通り行はるべく候

◉桑港佛教青年會の會報は新に「米國佛教」と改題し大に海外にて氣焰を吐き申候、全地開教師西島覺了、水月哲英二氏は一月二十五日カリホルニヤ大學の教授ジョンフライヤー氏の招に應じ、日本佛教に關する講演を開き、其後同校内にて日本佛教研究會なるもの組織され申候又同地白人傳道は從有望との報知有之候

◉久しく中央政界までを騒がせ候眞言宗の問題は衆議院へ四百餘通まで出で候請願書も、内務大臣と政友會交捗の結果、全く院議に附すべからずさ排斥せられ候、これにて當分は一段落を告ぐ可くさ存じ候

社會小評

不品行者の德義談

堀田析虹

世は腐敗せりと云ひ、德義地に落ちたりと云ふ、宗教者は勿論、政治家も叫び、實業家も叫び、學者も唸り、書生も唸る、猫も杓子も口を開けば、以て公德養成と云ひ、私德の修養と云ふ、何ぞそれ盛なるや、何ぞそれ尊きや、有り難き哉、世はまさに黄金世界とならんか、然れども試みに其これを叫ぶ者の品格如何をみよ、彼等はしかく眞面目にしかく有難さうに德義を口にするの權利ありや否や、太陽に公德養成意見なるものあり、貧叟加藤先生の說なりとて世の腐敗は老人の罪なりと云ふ、吾人は實に其言の當れるを思はずんばあらず、青年者が深く覺悟すべきも、亦此點に存せずんば

あらず、滔々たる天下の俗物老輩、彼等は遂に今の世に立て歩みうべきものにあらず、青年者が自重自愼、以て取るべきの態度は、偏へに彼等の言行を學ぶにあらずして、彼等を疎外するにあり、彼等を重んずべからず、彼等は道德の敵なり、從て我等の誘拐者なり、彼等を敲き仆すべし、彼等は我等をして同じく彼自身の如くなさんと務めつゝあるなり。あゝ切に青年諸君に望む、彼れ等の愛顧を望むべからず、彼等に出身の前途を委ぬべからず、一意專心かの公敵の老骨を驅逐蹴蹶すべし、かくの如くして、初めて德義の刷新を期すべし、汚物掃除は決して市内のみの事にあらず、まづ汝等老骨自身を掃除車にのせて運び去るべきなり。

善行美擧とは誰れのするものぞ

鑛毒事件に關しての美擧として、新紙の報するもの二、一は麻布中の橋の寫眞師荒川某、鑛毒被害民が、耕作物被害の狀況を寫眞せんとするを、無料にて其撮映を承諾せること。一は講談師松林伯鶴なるもの「公判實談鑛毒事件」なる題名にて、講談をなし、其收益を被害民の家族に義捐せんとすと云へること、あゝ此寫眞師、此講談師彼等は自らの職を以て、自ら能ふの力を以て、此慘絕の被害民に幾分の同情を表するを措まず、乞ふ其心事の如何を問ふこと勿れ、其何の爲にするかを怪む勿れ、天下涙を賣るもの德を賣るもの、義を賣るものにして、果してよく其賣る所の涙、德、義を以て眞によくこゝに同情するもの、十年一日の如くなる、田中正造君の外果して幾人かある。吾人は深く此二者の美擧を喜ぶものなり、

●社會欄日誌

自二月廿三日至三月廿三日

二月廿三日　神奈川縣の星學者井上四郎氏此夜九時半新星を發見す

二十五日　世界の富豪ウイルヘルム、ロスチヤイルド男七十三歲を以て逝く

二十七日　奧村五百子女史首唱の愛國婦人會成る

二十八日　鑛毒被害民七十餘首相邸に押しかく

三月一日　日出國新聞風俗壞亂罰金二十圓○日月會美術展覽會を神田萬世倶樂部に開く

二日　柳派落語家桂榮賀死す○美術院第十回繪畫展覽會を上野に開く○社會主義演說會を神田青年會館に開く

三日　俳優學校設立の計畫有り

八日　社會學研究會講演を神田青年會館に開く

九日　東宮妃殿下御着帯式
十四日　醜類公判開始
十五日　内務省より十二歳以上男女混浴の取締勵行を地方長官に訓諭す此日千葉縣勝浦町に鰯の大漁あり價格十萬餘圓
十六日　未成年者飲酒禁止法案衆議院に否决さる
十八日　大坂府抽籤賞金を以て鼠の買上法を决議す
二十三日　田中正造氏下院に鑛毒問題の大氣焔を吐く

雜評

都下の論文家

（友人へ通信の斷片）

小觀生

都下の文章家を紹介せよとの御依頼に候へども餘り漠然として答へ様も無之候間先づ論文家位にて小生の承知致候ことのみ左に申上候

曾て大兄等と村塾に在りし時、朗々快誦夜の更くるを覺えざらしめし「新日本の青年」の著者徳富蘇峰氏の勢力も「國民の友」廢刊已來は一向振はざる氣味にて國民新聞の社説には時々奇警の觀察を見ざるには無之候へども文章としては光炎もなく氣魄もなく恰も老婆の緒言を聞くが如く相成たるは猥り氏が政治的野心に忙はしき故にもあらざるかと惜しみ居候。

又た其頃「日本人」の主筆たりしヒマラヤの山三千尺とかなんとか詩を讀む様な流麗の文章を書きたる志賀矧川氏も同様一向振はざる様子にて「政友」とか申すハイカラ雜誌に餘喘を留め居るとの事に御坐候。

三宅雪嶺氏のみは十年一日の如く例の勃窣なる議論を「日本人」や日本の紙上に掲げられ候へども同氏の文は重に他人に口授して成る由に候へば小生等の目に上るものの多くは全く氏の文章とは申され間敷と存候。

陸羯南氏の文は「日本」紙上にて時々拜見致し、愛讀の人も澤山有之由に御坐候へども優容促らざる態度に乏しく小生は餘り好まざる方に御坐候。

朝比奈知泉氏は健筆縱横隨分奇躰な論理を如何にも奇躰ならざる様にコヂツケ政府の辯護に悉さるゝ處中々恐る可き手腕に有之舞文の妙を得たる當今第一人と存候。

曾て「世界の日本」の記者竹越三叉氏の文は德富氏と同調異工流暢人を悦はしむるに足るものに御坐候へども洋行して後は音沙汰無之候。

北村紫山氏も明清八家を讀むやふな清新の文字を驅使

して盛に豪語を吐き一時は評判ものに有之候へども何とかの嫌疑にて拘引されしより頓と聞えざる様に相成候。

鈴木獨聲子も文壇の氣炎家なりしが今頃如何致し居候や相分不申候。

此頃にては如何なる風の吹廻はしにや福地櫻痴居士も「日出國新聞」の社説にて時々氣炎を吐かれ、昔取りたる杵にて文章は中々ウマイものに候へども齋藤別當のそれならで若ひ者と弁べば何となく引き立ぬ様に相見候。

高山林次郎氏が太陽に筆を執りたる頃は隨分スサマジキ勢にて八方應戰、議論文章も達者と相見候が洋行間ぎはに病氣にかゝりたるは惜しむ可き事に存候、

大町桂月氏高山氏に代て博文館に入り前任者の八方應戰を引き機ぎ頗る遣らるゝ様に候へども、高山氏に見比べて太だ劣るとの評に有之候。

國府犀東と申す人も論文家との事にて昨年頃は「萬朝」社說に六ヶ敷理屈を書き立てたるを以て有名となりしが此頃矢張博文舘に入りたる由に御坐候。

內藤湖南氏は雪嶺門下の俊才にて學問あり、識見あり、文も達者に候へども是も讀むには中々骨の折れる文章にて關西文運論など傑作に候、今は大阪朝日に客となり居候。

內村鑑三氏は大兄の兼て愛讀されし「獨立雜誌」の主筆として文章も思想も今更御紹介申上る必要も無之候へども其人物の實際は毀譽紛々太だ言ひ分のある男との事に御坐候、此頃萬朝紙上に時々氏が不平的短文を見受申候、

松村介石と申す人、耶蘇教の教師に有之、半政治家といふ様子にて講話など開らき、スキナ熱を吹きて青年の煽搖をツトメ居候「警世」と云ふ雜誌は其人の機關にて隨分亂暴の議論も有之候へども筆は辯舌の如くアドケなき處賞す可きものと存候。

大學出身の學士連中にて上田敏氏の文は玲瓏玉の如く太だ上品と評するもの有之候へども、小生には左程にも感嘆出來不申候。

久保天隨氏の健筆兎角感心の至に候、爾し餘り金もふけに忙はしく多くは「焼き直し」やら「書きさし」やらにて立派なものとては一向拜見仕らず、別して「漢詩評釋」などの杜撰は一驚を喫し申候、コンナものにても能く賣れ候とは實に盲目千人の世の中に御坐候。

境野哲海氏理屈を捏ねるには中々達者也佛門已外の論

文家にても餘り澤山無之人物と存候。杉村縱橫氏の文章スラ／＼として品よろしく而も光彩あり、イッモ論旨のねぢくれたるに似ざるものありと存候。

此他本社中央公論にて多少筆を握るもの有之候得共聊か手前味噌の恐れあり別に申上げず候。

已上掲げ候ものは唯九牛の一毛とも申す可く、其他にはまだ／＼大家も中家も小家も小々家も實に數の知れざる程に可有之候へども一々そんな人々を擧げ候こととは小生には出來不申之にて御免を蒙候唯今日の文士だとか思想家だとか云はるゝものは多くは新聞紙上雜誌紙上の文豪にて思想や文章は第二として兎角遠慮なく書き散らすものがワイ／＼連のみならず氣のきゝたる人にまで賞讃を博し候、併し一紙を露かず、一文を賣らず、深く藏して世の未だ多く知らざる幾多無名の潛龍其人あらんことは御承知置願上候。　已上

一掃百塵

彗星

◉禿頭病は昨今の人氣問題なり、下院の元田肇又之に罹る、臼井哲夫の見舞に答へて曰く「小生の禿頭は老境に入りし徴候と諦らめ候」と一詩を附けて贈る

酸辛幾歲逐風塵。一事無成又入春。
鏡裏無端知老至。後頭錢大禿痕新。

江藤新作次韻に曰く「文明才學何人比。休歎又迎一樣春。眼識能非徹紙背。何看頭後禿痕新。」臼井も亦和して「燦々盛名不受塵。洒々風貌四時春。皇天有恵爲君待。更點光明頭後新。」

◉渡邊國武唸りて曰く「梅見舟柳は遠くなりにけり」渡邊昇即座に「心々に雲雀さへづる」

◉水田榮雄と云ふ人の「大英國漫遊實記」と云へるを見る、開卷第一頁の第一行に曰く「世界第一の大都龍動は其廣袤百二十萬方哩」と、龍動の市は日本の十倍もあるそうな

◉日通社の通信に曰く「新造岩手艦の長さ十三万一千九百十九米突、幅二万三千百九十六米突」長さは三十里幅は六里、イヤハヤ

◉有名なる某雜誌我國の躰育問題を論ずる冐頭に曰く「井蛙の如く喧しき躰育問題が」と、中央首府の大新聞記者曾て妃殿下の御慶事を祝して「皇統連綿絕へざることと縷の如し」

●宗教雜誌によく有る誤りは孤兒院佛蛇

●雜誌「佛教」中央公論記者古河老川を悼む文の標題に曰く笑古河老川君

●島地默雷大內靑巒有り勝ちの事

●日蓮宗に釋日本と云へる僧有り、麹町に三井銀行と云ふ人有りカチユキと讀む

●福田會育兒院の湯島麟祥院にある時拾ひ上げたる棄兒に命名して曰く福田麟

●江湖俱樂部滿州問題に關する報告書を兩院議院に配付し貴族院議員中皇太子殿の御名あるを何の氣も付かず、出狀して「東宮御所にて嘉仁親王殿下」と、委員大に叱責を受く

●每日新聞に下の記事有り「某尋常中學校の一生妾を蓄へぬ、爰に於てか校長は其亂狀を記して其の故鄕に報ぜしに、某生の父は左の如く挨拶し來れり」と。

近頃の如く姦淫の悪風吹き荒さみ候東京の眞中へ愛兒一人を手離し置候事何分心配に堪へず依て一妾を選で同伴せしめたる次第に候云々

●陸前鹽竈の小學校燒けたり、長森某の一子正平九歳數日の休校を待遠しく思ひ自分の所有せる四十七錢五厘を町役場に持ち行き是にて早く學校を建てゝ下されと云ふ、可愛き小供心なる哉

●敎育時論記者曰く僕が此の間或る所へ行つたら、明治九年の官員錄があつたので、當時の文部省には、何んな人物が居つたのかと披いて見たら、此の時の大輔は田中不二麿で、辻新次が中島永元といふ者と共に權大亟であつた、權大亟は六等出仕で、月俸は二百圓である、久保田讓が大錄といふので、大錄は、八等出仕で、月俸は七十圓である、伊澤修二、高嶺秀夫、手島精一等の面々も皆月俸七十圓の八等出仕であつた。と頻りに敎育界の主權者が二十餘年の昔も今も變り無きを口說く

●友人某に妙なことを信仰するものあり、前月大阪東京に於ける法官のストライキ起るを見、膝を叩ひて曰數月來ストライキ節の流行せる全く此前兆なり、今に見よストライキ熱は全國に蔓らんと

●此筆鋒にて行けば昨今露國大學生のストライキも何等かの關係有りとコヂツケ得べけん

●越中富山に喫煙家の大ストライキ起る、曰く「市內の煙草店ヒーローの代價三錢を三錢五厘とせり、これ吾人の恩顧を無視したるもの、宜しく一致同盟ヒーローを喫むべからず、之を犯すものは敵愾心なき馬鹿者

なり絶交すべし」と、ストライキ節益す前兆有り
●大分縣宇佐郡天津村大字宮熊の近隣に呆痴けたる男あり、或時此男宮熊の某々等に向ひ宮熊には昔より曾て芝居のありしことなし此後とても若しあつたらば井戸から火事とでもいふべし其時は已れは一番コノ頭で地上三尺の穴を掘つて見せやうと放言せり宮熊の者大に立腹し此程早速芝居を興行しサア頭で穴を掘れと責め立しかば男子の一言金鐵の如しと云ひ二日がゝりにて三尺の穴を掘れりと、東朝子の報ずるところ

睥睨錄

白眼翁

●先月十四日伊藤首相は貴族院で演説を遣つた、近衞公之を評して曰く、「今日の伊藤侯の演説は、前々内閣の時は斯ふだ、前内閣の時は斯ふだ、十年前は斯ふであつたと列擧して、自分の計畫が一番エライといふ吹聴に過ぎない、而して其の結局は、ドウも内閣が短命では財政が紊亂するから困るといふに歸した」△成程サウだ伊藤の演説は法螺と愚痴との配合に過ぎなかつた、大演説でもあるかと思て詰め掛けた連中は咸な失望した

●同類相集るとやらで、伊藤の幕下に集るものは、何れも放蕩家、好色家である△衆議院書記官長の林田龜太郎なども中々頁ひ頭腦を持つて居り、手腕も中々有るが、惜しい事には矢張伊藤のだらしの無い處を見習て遊蕩を初め、此頃は毎夜大廣袖を被て赤坂の待合を遊んで歩くさうだ△林田は又赤坂四季の眺と唱へて左の如き俗謠を作り、待合に醜業婦を呼んでは、之を歌はして喜んで居るさうな、困つた若者だ、

（春）　赤坂の四季の眺を春もとにこめて彌増す花の色、手折たいではないかいな

（夏）　柳堤の橋に涼める藝妓衆は、奴姿や若衆振、可愛らしいぢや無いかいな

（秋）　山王の秋の景色は類なき、大和錦や京鹿の子、飽かぬ眺めぢやないかいな

（冬）　降る雪に操をためす松ヶ枝に辨慶橋の冬景色、頼もしいではないかいな

●先月十一日の萬朝報に、豫算案本討議の日田尻稻次郎は書記官室で大氣焔を吐た事が記してあつた△其氣焔に曰くサ「島田三郎や加藤政之助の演説と來ては耳も當てられぬから逃げて來た、田口、武富などゝいつ

ても少しも豫算案に對ずる智識が無い、議員には是から學問のある若手を擧けるか、左も無ければ地雷火で此の議事堂を粉徴塵に壞してしまふ方が宜からふ」△スルと氣の逸い議員中には、朝報の此の記事を證據に田尻を詰責しようなどと意氣捲く者もあつた、けれど田尻は一向平氣で又も大氣焔を吐いて曰く「僕も貴族院議員じやから一つ財政上の質問でもして見やうか、僕の質問に答辯し得る者は政府委員中に一人も無い、貴衆兩院議員中には勿論の事だ、已む無くんば僕が自ら出て答辯するのかナ」

●此頃進歩黨の代議士野間五造を强請らうとして「拙者は貴公の傳記を書くつもりだが、中には貴公の爲めに甚だ宜くない節もある、殊に臺灣で入牢召されたなどは何の爲めでムるか」などと妙にからんで出掛けた者があつた、處が五造君一向平氣なもので「左樣さ拙者の經歴で善い所などは少しも無ひ、全然惡事ばかり働いて居ましたから、若し一つでも善ひ所があるなどヽ言ふものがあつても、其は揑造です、臺灣の犯罪は全く强盜殺人でした」と答へたので、强請た奴も呆氣に取られて、呆々の躰で逃げ去つたとサ

●東京市廳の役人曰く「市の事は星の撿印さへ取ればサツサと捗ぶ、山のやうに積である書類でも星丈けは一々目を透してチヤンと鑑識するが、他の連中は斯んな書類を見ても其の何たるかを了解し得ぬ、唯だ星の撿印を見てベタ〳〵盲判を押す丈けぢや、流石に星はエライものだ」

●誰が何と言ふても星はエライよ、彼は豫算委員でも無いのに豫算委員會の決議を翻す魔力を有て居る△先月の初め豫算分科會は雇外國人カークウツドの恩給三千圓を二千圓に減じた、之を聞いた星はカークウツドから今の邸宅を買た緣故もあるから、一千圓許の事でカークウツドに嫌な思をさせるにも及ぶまいとて、直ぐ分科會室へ飛び込んで往た△此の分科會では、ボアソナードすら恩給四千圓であつたのに、其程の功勞も無いカークウツド如きに三千圓は多過ぎるとの說が多かつたが、臼井哲夫はイヤ功勞を標準としては種々の說が出るから原案は俸給の何分の一と見積てあるのぢや三千圓より減ずるに及はぬと論じたけれど、多數に制せられて終に二千圓と決定した△丁度其處へ星が飛込んで來て、外國人の恩給などを減ずるとは見ツとも無いと怒鳴つたら、其もさうだ今一度評議し直さふといふとになつた、スルと臼井は豫算委員でも無い星が

此處に濫入するさへ無法なるに、其の容喙に依て一旦決議をしたものを復評議をし直すとは奇怪千万だと、眞赤になつて力んだけれど誰も贊成するものが無く、到頭星の注文通り原案の三千圓に復活した

●田中正造は鑛毒問題の質問書を議會へ提出しやうとして政友會の代議士連中にも贊成を求めた△所が連中は皆嫌な顔をして、質問でも何でも總て星の承諾を得ねば贊成する譯に行かぬと言て、拒絶した△ソコで田中は星に向て果して連中の言ふ通りかと聞くと、星は笑ひながら「ウム左樣だ」と答へたから、田中は「然らば百五十餘人の政友會代議士は皆な君の思ふ儘になるのだな」と問ふた△星はヅッと反り身になり、さも得意げに例の便々たる腹を突き出して、「左樣さ政友會所屬の代議士は總べて此の腹中に在りさ」と答へると、田中はお極りの通り眞赤になつて「君の腹の中に在る者なら糞になるのだ、糞の贊成など求めに來たのでは無い」と言て、席を蹴て立ち去つた△流石の星も苦笑して居たゲナ

●星亨が輿論の攻撃に堪へずして、遞信大臣の椅子を棄て、小山の別莊に去つた時、伊藤は遞信祕書官であつた齋藤二郎を小山に使して一書を星に贈つた△書中の文句は頗る丁寧で、星に對して大に敬禮の意を表したもので、結局星を院内總理に賴むから歸京して呉れと言ふのであつた△星は此の書面を一閲してフヽンと笑て「斯ふ來るのに極つてるワイ」と言つて、酒肴を命じて齋藤に馳走した△夫れで齋藤は星の方が伊藤よりも餘程腹が大いと曰つて、大に感服してるさうだ

●長與專齋翁は昔し福澤翁と共に大阪の緒方洪庵先生の塾に學んで以來四十餘年間無二の眞友であつたが、福澤先生が亡くなつた時、長與翁も病氣で熱海に保養中だから、其の葬式に加はることが出來ぬとて左の輓詩一律を賦して靈前に供へた

夙期文物萬邦同、健筆縱橫啓衆蒙、千載軒昂獨尊氣、
單身皷吹五州風、肯將廊廟辭纓貴、寧比門牆桃李紅、
四十餘年空一夢、長天落日哭斯翁

●政局の困難に成る毎に袞龍の御袖に隱るゝのは伊藤の慣用手段だ、今度の增税案に就ても貴族院の反抗を鎭める爲めに、終に勅語の降下を仰ひだ△尤も表面上は伊藤から願つて勅語を仰ひだので無ひが、實際は矢張伊藤の方寸から出たのだ△貴族院の交涉委員と元老とのゴタ／＼最中、去月九日といふに伊藤は飄然東京を去て金澤に行た、其翌々日内閣書記官長が侍從長を

訪ふて密談數刻に及んだ、而して其翌日近衛議長の御召となつて、恐れ入つたる勅語が下つた△伊藤が東京に居て自分で細工を爲ては又々袞龍の御袖に隱れたと、世論に攻撃されるのは辛いから、それで金澤に往て、其の留守中に書記官長に細工を爲せたのだ、然るに伊藤は金澤から歸て來て、素知らぬ顏して、今回の勅語は拙者等の少しも拜聞するを得なかつた所だなどゝ濟まして居る、

●伊藤の無法は是に止らない、實に不臣とも不忠とも言ひやうの無い事がある△去月十二日の夜、即ち近衛公が宮中に召されて優渥なる勅語を拜受したる時、伊藤は大倉喜八郎の馬車に同乘して、築地の柏屋に赴き、數名の政治屋や商人と、醜業婦を上げて大騷きを爲した揚句、各々醜業婦を擁して築地の某待合にシケ込んだ△聖上が國家の大事を憂ひ玉ひて、日夜軫念を勞し玉ふ時に當りて、此の態は如何だ、かくの如き醜は、早く息の根を引き取てしまはねば、日本の前途は迚も駄目だ、

●勅語の下つた翌日、即ち十三日近衛議長は、貴族院議員を招集して、勅語降下の次第を報告し、勅語の寫を各議員に配付した△議員は幾度か之を拜讀して、感激に堪へざる有樣であつたが、中にも院中の最高齡者たる長谷從二位の如きは、泫然涙を流して「恐れ入た事に成て仕舞た」と言ひながら、貴族院の談話室から階段を下りて來た、又松岡康毅氏も「斯くなる上は聖旨を奉躰するの外なし、一言半句でも批議を加ふる者は日本の臣民で無ひ」などと言て居た

△忠良なる臣民は何れも斯くあるべき筈である、日本には決して西洋のやうな革命の起る氣遣は無ひ、併し當局者たる伊藤が時もあらふに、此の際に醜業婦を相手にして淫樂を貪るやふでは、實に困つたものぢや。

讀者の文壇

短文

（日本の商業に就て）

▲滿州露の有さなりて文明發達し、戰後の支那全國の富源大に開かれ、比律賓米國のものとなりて商業増望み有り、北のサイベリア鐵道、東の二カラガ運河、將に大に世界商界の未來を變化せしめんとす、加奈太に、合衆國に、南米に、濠洲に、支那に、朝鮮に、滿州に、日本人が手を延ばす可き商業版圖は眞に無限なりとす、嗚呼愉快なる哉、二十世紀商界の健兒、立て大に奮へ（大阪堀江生）

▲日本の商業は贅六の支配下に有り、口計り大きくして腸の無き江戸ッ子何の顔色有て贅六に見えんとする阿々、(仝)

▲日本人の外國にて商賣せるものは三井、大倉、高田、正金、郵船、此外には何も無し、只獨り到處に繁昌せるは醜業婦のみ、日本は商業國に非ずして娼業國なり(淸華)

▲目下商業界に欠乏を感ずるものは世界的近江商人の乏きことである(丁稚それがし)

▲これは日本の商業などとは云へないが、一寸云つておきたいのは、日本商人の二大欠點である、愛嬌の少いこと、そして腰の折れ易いこと、一寸見ると反對の現象の樣だが、日本の商人には、明らかに此二個の相反せる欠點を具備して居る、無愛嬌とは永く得意を自分の方へ引きつける力のないこと、腰の折れ易いとは目前の小利に引かれ易いこと、若し今のまゝでやろふなら、皆んな得意はとられ、信用はなくなつてしまう、これは將來の日本商人が深く注意すべきことではあるまいか、(古佛)

▲予は明らかに斷言す、將來に於ける日本商業の盛衰は、即ちこれ日本帝國の興亡に關するものなりと(商學士)

▲商とは「アキナイ」と訓して飽きないといふ事であるから餘程落付てやられはならぬ、之は元より附會な解釋であろうけれとも、六かしく學理上より推論した處で正直と勉强と熱心とか商業の要素である、即ち繼續的事業であるといふの外はない、所が我國の商人は此眞理を十分に會得せぬ爲に一向得意先の利便を考へず、唯我利々々に流れて隨分の大店までも所謂太く短く主義の露店的商人根性を持つて居る、夫も內地ては御互樣の事たから左程目立たないか、外國貿易の上ては常に優勢てなければならぬのに却て逆境に立つ事の多いのは其原因全く此に在るのである、

我國は位置といひ氣候といひ實に申分なき貿易國である、されと年々の貿易表を見るに其數額は着々增加するが其實質は餘り有望てはない、殊に昨年巳來は頗る忌はしい現象を呈して居る、夫れも鐵とか石炭とかいふ樣な原料的物品の輸入超過なれは前途多望といふべしだか、愚にも付かぬ贅澤品が其大部分を占めて居るのだから、昨今經濟界の不振は當然な結果である、之は戰後我國民か償金に眩惑して無望の企業を爲し隨て生活の程度を高めたると近頃灰殼藻か無暗と跋扈するからである、

我國には輸出向商品の生產か出來ぬかといふに仲々そうでない、中にも生糸と茶は世界無比の良質て、加ふるに勞銀は文明國に類なき低廉てある、又此等の品は貿易に比して價格も高く需要も頗る廣いから輸出品として最と適當なもので、若し商界其當を得たならは是斗りても輸出入を平均する位は實に容易な事てあろう、

我國の政治家などは皆國權の伸張といふことには頗る熱心であるか、商權といふ方は一向念頭に無いらしい、之は慥に愛國心の意義を誤解した結果といはれはならぬ、第二十世紀の今日てさへ各開港場の內外貿易商か取引する有樣は殘念なから君主と奴隸との懸隔がある、此んな事一向國權に干係かない樣なれとも現に先年英國で募集した一億圓の公債か其金利殆と市場の倍額であるに、漸く九掛て發行するの止むを得なかつたのは正しく經濟上我國が蔑視せられて居る爲てある、此調子たから迚も近頃喧しい某々私立會社の計畫せる外資輸入なとは覺束ない、代議士連も此邊に御氣が付かれたらヤレ外交が拙ひの、ヤレ國權が縮まるのと大臣斗りを追窮せずに、士農工商なとゝいふ馬鹿らしい人間の番附を取除けて、ドシ〳〵見識もあり學問もある立派な連中を商業界に供給する御工夫か先決問題てあろうと思ふ、

輸入超過とさへいへは日本人は直くと驚く、素より餘り望ましい事ては

ないが、商人間に信用さへあれば之を救濟するは容易な事である、銀行も近頃の樣に虛僞の手形が澤山あつては融通が付けたくても手控せねばならぬ、モー少し我商人が信用を重んじたなら僅かの正貨流出位で限外發行の必要もなく十分に融通が出來るのである、中には確實な商人もあるけれども兎角不信用な虛業家の多い事は實際で、確實なものまでも玉石共に焚かれて完全に出來上つた手形法も殆ど空文に過ぎぬ有樣である故に此利便を享有する商人は其千分の一にも當るまいと思ふ、實に不自由な商業界といはねばならぬ、嗚呼縱から見ても橫から見ても不都合なのは我商業界である、(發空)

▲私は商賈人ですチットは嘘もつきましようよ」と詐僞を平氣でやる間はとても日本の商業は物にならぬ「私は商賈人です外の人とは違ひますドーカ信用して下さい」と云ふ時代となりて世界と競爭が出來る(ち、か)

▲目下の如き經濟界の衰勢が二三年もつゞけば日本は貧血病で倒れん(日本商人)

▲憚り乍ら二十世紀大日本の大商業は我輩一人でも世界の大商業國と大競爭して大勝利を得る大覺悟がある(三井小僧)

▲當地四條通りの或る商店には「正札より二割引」の廣告有之候、將來の商業は此筆鋒にて進み行き元價より二割引など云ふ珍らしき事に出くわせ可申歟(京都鴨水生)

▲日本の商業は五十年か六十年の間に全く支那人の手に奪はれるであろう、歐米は猶太人の爲に東洋は支那人の爲に世界は此二つの先天的商業種族の爲に蹂躙せらるゝのである(窘山)

▲僕はかう云ふことを常に云つてるんだ、日本の商業は猿商賈だつて、なぜつて云ふのかい、人の眞似計りしてるではないか、それもさ、外國の製品を摸造して、其本國のものを凌駕するといふならば、實に結構さ、一寸卷烟草で例を取てみても分るさ、ヒーローが賣れるさ云や、ハーローが出る、パーシンが出りやメイルが出る、天狗が流行りやそれににた紙包をする、うちわ喧嘩の小ぜり合ひ計りで、日本の商業は將來に見込みがあるだろふか、なにをしても猿智慧より外はないので、こせ〳〵して居る、商人先生達しつかり賴みますよ、どうしても商業の發達を計らねば、此日本は持ちませぬよ、(浩然)

▲東洋に於ける商戰の模樣こゝ數年の後を豫測するに、其優勢の地位に立つは支那人が第一で獨逸英國米國の順序となり日本は正しく第五番目米國人の次に位する傾きがある(商界卜人)

▲我國は商業國で無い小業國なり、金貨益流出消業國なり、國債益增加債業國なり、醜婦益繁昌娼業國なり、妾業國なり、笑業國なり(K・G)

▲日本將來の商業に就て對照左の如し

既往	將來
野蠻商業	文明商業
掛値商業	正札商業
向內商業	向外商業
個人商業	組合商業
小人商業	紳士商業
前掛商業	洋服商業
目前商業	永久商業

(芝、白金生)

○日本の商業の將來、これに對して自分は何とも云ひうべき力を持たぬ、有躰に云へば、自分は其術に當れる專門家ではないのである、けれども Made in Germnn と、銘うてる品物を見る每に、轉々長大息をせざるを

えないのである、獨逸の隆盛は陸軍の整備したからではない、學術の淵叢と云はるゝからではない、まさに此保護貿易、自國の物品外、切に他國のものを用ふるを禁じたからではあるまいか、（小ピス）

次の課題

我國の音樂に就て　四月十六日締切

自轉車に就て　五月十六日締切

新刊紹介

◉明治三十四年東京遊學案内　少年園編輯　神田區南甲賀町内外出版協會發行

例年の如く發刊し今回は更に改正増補せり、上京の準備、受驗の格例、學費の概算、修業の年限、着京の注意、宿所の撰定、衛生の注意、各學校の規則、入學試驗問題等を親切に正確に指示したるもの地方學生の爲には此上もなき重寶のものなるべし（參拾五錢）

◉創作苦心談　神田錦町　新聲社發行

文士の創作に於ける苦心は人の聞かんと欲して未だ聞くを得ざる所なりしが今回新聲社より其渴望を醫すべき書、出でたり、書中に收むる所は水蔭、眉山、露伴、骨庵、柳浪、風葉、鏡花、宙外、抱月、天隨、鳴雪、直文拾二名家の談話にして或は材料の出所を說くものあり、或は自家が文壇に於ける閲歷を語るものあり、修辭の難を說くもの、俳句の詩的地位を語るもの等其いふ所、種々にして、中には、評家に向ひて己が作を分疏するが如くに思はるゝものあれど要するに頗る多趣也、此類の書は續々刊行せられんことを望む（二十錢）

◉文壇照魔鏡　横濱賑町五丁目　廓情會發行

文壇照魔鏡の第一、與謝野鐵幹の卷也、文壇の醜態坐視するに忍びず慨然此言を爲して自ら廓情の重任を擔へるものといふ、署名人は田中外三氏なるも執筆者はたしかに知名の文士に相違なし（定價二十五錢）

◉救世軍戰爭記　芝區芝口　救世軍本營發行

世界に於ける救世軍の事情日本に於ける同軍の現狀を詳記したるもの、依て同軍が苦戰奮闘の狀を見るべし（十錢）

◉佛敎の眞精神　大崎信一編輯　京都興教書院發行

南條文雄清澤滿之等諸氏の佛教に關する有益なる談話を掲げたるものなり（十八錢）

◉寒牡丹　紅葉秋濤　春陽堂發行

嘗て讀賣新聞に掲載して當時喝采を博せしものなり、原作は佛蘭西なりといふが家庭小說として好個の讀物なるべし（定價八十錢）

◉倫理界　竹内楠三氏編輯　神田美土代町　開發社發賣

時節柄必要なる雜誌にして二月を以て第一號を發刊す、井上哲二郎中島力造村上專精澤柳政太郎其他の諸氏の有益なる論說有り（十六錢）

◉新小說　第六年第三卷　春陽堂發行

鏡花氏の水鷄の里は小說といはんよりアレゴレーといふに近けれど本號

小說中にて最も優り之に次ぐは宮本此君庵の懸賞小說破馬車なり露伴氏の一國の首都は本號にて終りたれど宙外氏の關西警見記、新たに出でゝ兩文人の兩都に對する觀察面白し、其他讀むべきは時文の日本文明の大導師逝く、藝苑の歌舞伎座の樂屋等なり

●小天地　第二卷第五號　大阪文淵堂發行

春葉氏の都ぶり、荷風氏の山谷菅垣、幽芳氏の已が罪に就て、天遊氏の朝あられ、浩々氏の時文雜觀、甲斐一郎氏の劇としての不如歸、彙報の文學界等あり

●明治文藝　第一卷第三號　芝松本町文學館發行

渡邊光風といふ青年歌人の主として任に當るものゝ如し、日本刀といふ欄ありて縱橫無盡に薙ぎ立つ小氣味よき雜誌なり

●英才詞林　博文館發行

中學世界の臨時增刊なり附錄に大町桂月氏の山中鹿之助あり

近事彙報

社會彙報

●皇族殿下の御年齡　各皇族殿下の御年齡を承るに左の如しとなり

皇太子殿下	廿三歲	同　妃殿下	十八歲
常宮殿下	十四歲	周宮殿下	十二歲
富美宮殿下	十一歲	泰宮殿下	六歲
威仁親王殿下	四十歲	同妃慰子殿下	卅一歲
彰仁親王殿下	五十六歲	同妃賴子殿下	五十歲
依仁親王殿下	卅五歲	同　妃周子殿下	廿六歲
貞愛親王殿下	四十四歲	同　妃利子殿下	四十四歲
成久王殿下	十五歲	同御母富子殿下	四十歲
菊麿王殿下	廿八歲	同　妃範子殿下	廿四歲
載仁親王殿下	卅七歲	同妃智惠子殿下	三十歲
邦憲王殿下	卅五歲	同　妃好子殿下	卅七歲
邦彥王殿下	廿九歲	同　妃俔子殿下	廿三歲
守正王殿下	廿八歲	同妃伊都子殿下	二十歲
博恭王殿下	廿七歲	同　妃經子殿下	二十歲

●廿世紀中の日曜　は五千二百十七回にして年數に計れば十四年と三月十七日

●玩具と繪具　玩具の衞生上有害なる物多きは、珍らしからぬ話なり大學の藥學教授丹波敬三氏が五十四種の玩具につき、調査せしにその着色二百七十九色ありて、內同種のものを除き、實際の色素は二十六種にして、其內十八種は有害のものなりしといふ、眞に無害なるものは、朱、胡粉、ウルトラマリーン、ズミ、鬱金、酸化鐵、蘇枋、銀箔の八種のみなりと、

●世界に於ける死亡の多寡　人口千に對する死亡（死產を除く）の比例左の如し

	年	人
露西亞	一八九三	三三・一
西班牙	一八九四	三一・七
匈牙利	一八九八	二八・〇
塞爾維	一八九八	二六・七
墺地利	一八九八	二四・九
佛蘭西	一八九八	二四・九
獨逸	一八九八	二〇・六
日本	一八九八	二〇・四

	年	人
瑞西	一八九八	一八・九
大不列顛	一八九八	一七・七
白耳義	一八九八	一七・六
丁抹	一八九八	一五・六
瑞典	一八九七	一五・四
諾威	一八九八	一五・四
烏爾圭	一八九八	一五・一

●博文館主の美擧　同館主大橋佐平氏は、圖書館設立資金として、十萬圓同維持費として二萬五千圓を醵出し、之に關する一切の事を擧げて石黒忠悳男、上田萬年、田中稻城の三氏に委託したりといふ、其位置は未定なるが公衆の便利なる場所を擇び許可次第建築に着手す

●鼠の懸賞退治　私立大阪衞生會より建議せし懸賞的鼠族驅除の件は市會にて奬勵金として六百圓下付の決議を經、抽籤懸賞法を實行し其懸賞金額は即ち一等百圓二等五十圓三等三十圓四等十圓五等五圓六等一圓とし抽籤券五萬枚を作り各區衞生組合と巡査派出所に託し買上の鼠一頭に付一枚の抽籤券を交付し衞生會理事に於て抽籤を行ひ賞金を授與す

●馬鐵の收入　春季皇靈祭一日東京馬車鐵道の收入は二百七十九の車輛を運轉し其上り高三萬二千四百圓七十二錢五厘

●愛國婦人會　奧村五百子の主唱により一條岩倉九條近衞三條島津の各公爵夫人始め朝野の貴夫人發起人となり戰死者遺族救護の目的を以て愛國婦人會を設立し弘く會員を募る假事務所は麴町區平河町五丁目十六番地に設置せり

●二月中の變死者數　其筋の調査に據れば去る二月中府下十五區八郡に於ける變死者は左の如し

自殺男一人	女一人	同未遂男二人	女一人
燒死男十人	女一人	窒息男四人	女二人
過死男二人	女〇	同過傷男一人	女〇
倒死男七人	女一人	溺死男八人	女二人
壓死男一人	女一人	轢死男一人	女一人
轢傷男一人		合計四十八人	

●俳優學校　眞砂座主及び作者竹柴萬二等發企となり校長は文學士川田定則、賛成者は眞砂座主佐々木政次郎、三崎座主山越忠吉外數名、演伎評定員市川八百藏、監督主任深澤政德等にて課目の大略は歴史劇の研究、人情的の研究、美術的の研究、平素の動作、化粧法、電氣應用、大道具の組立、英語、法律的演劇、政治的演劇、武術的演劇等又入校者は尋常中學卒業の免狀を有するものに限るとの事

教育彙報

●市立實業學校　東京市教育會が市内に各種の實業學校を設置せんとて、既に設立區及び諸般規程の大要を決したるもの左の如しと。

●徒弟學校　新に設置すべき徒弟學校は、小石川區に金工、染物、芝區に金工、下谷、神田區に木工の各徒弟學校を置き、其の修業年限は二ヶ年とし、特に別科生を設けて、修業年限を六ヶ月とし、授業料は凡て之を徴收せず。

●女子職業學校　女子職業學校は、牛込、赤坂、下谷、本所、芝の五區に一校宛を設け、其の學科は普通科の外、裁縫、洗濯、刺繍、編物、造花、圖繪、割烹、速記、簿記、電信、電話、機織、染色、麥稈細工の一科若しくは數科目として、生徒には二科を專修せしめ、入學程度を尋常小學校卒業以上とし、其の修業年限は二ヶ年、專修生は六ヶ月とす、

●工商業補修學校　は徒弟學校及び女子職業學校に附設し、成るべく小學校の校舍、校具等を使用せしめ、其の校數は高等小學校の半數に達せしめて、總て夜學校とし、毎週教授時間は凡そ十時間以下とし、學科は普通科の外、商工業に關する學科とす。

●乙種商業學校　前項記載の補修學校の外に、差向き京橋、日本橋の兩區に、乙種商業學校を設置し、入學程度は高等小學校二學年修業以上の者とし、修業年限は三ヶ年、其科目は未定

●帝國東洋學會　二月二十七日第三例會を開き會長當維井堯猷、三上參次、高楠順次郎、村上專精、大内青巒、南條文雄、島地默雷、前田慧雲、三宅雄次郎の諸氏來會諸般の協議を遂げ澤柳政太郎、上田萬年、高楠順次郎の三氏新に幹事に就任したり當日南條博士は支那及朝鮮に於て得たる佛教喇嘛教回々教等の材料に就て説明せられたり曾て印度に留學したる故善連法彦氏の藏書は遺族より同會の事業を賛成し悉皆寄附したき旨申出たりと

●東京貧民學校　本年度に於て東京市にては普通教育普及の目的を以て貧民學校設立の計畫あり先日來山田教育課長は横濱市及び市内各區の貧民部落を巡視して醫査せし結果下谷萬年町、芝新網町、四谷鮫ヶ橋及本所淺草の各區に一校づゝ設置し五級に分ちて三百人宛を收容し筆墨紙硯并に書籍等一切を施與する筈にて一校の建設費一萬二千餘圓經常費一ヶ年三千餘圓の豫算にて已に議案も編成せられたるに由り衛生課にて設計したる施療病院と共に市參事會を經て次回の市會に提出の運になり居れりと

●實業高等中學校　早稻田中學校に於ては今度實業高等中學校を増設し實業的學理と實務を教授し實業界に適切なる人材を養成する筈にて本月中旬を以て開校する由

●盲啞學齢兒　東北六縣と北海道で學齢兒童中の盲者と啞者とを調査したるに宮城縣は三百五人福島縣は百四十人岩手縣は百廿九人青森縣は三百十四人山形縣は二百六十八人秋田縣は百四十八人北海道は百八人兒童一萬人に就ての比例は青森山形二縣は盲啞者ともに八人四分六厘乃至八人九分八厘といふ多數を占め宮城縣に於ては啞者十二人一分二厘盲者七人二分三厘といふ大多數の不具者を有す

宗教彙報

●慈善財團寄附　本派本願寺の同財團寄附申込高を聞くに法主の下附金三萬圓と特別寄附金一千餘圓を合せて金三十八萬二千二百四十八圓七十二錢五厘に達したる由

●昨年中基督教の爲に費されたる金額　一月十三日發行の紐育ヘラルドは、昨年中基督教の爲に世界に於て費されたる金額總計を掲載す、總額十億〇〇九百三十六萬九千四百九十四弗にして、其内合衆國は二億八千七百〇四萬七千三百弗を、英國は二億二千三百九十萬九千六百弗を、西北歐洲諸國は二億〇三百九十二萬八千六百弗を、露國は五千一百廿五萬九千九百弗を投し、其他は世界の各所に於て各種の教會事業に用らるゝもの

●傳道の大勢　二月二十二日神田青年會に元田作之進氏『世界傳道の大勢』を說き先つ世界の人口を十五億万と定め之に對し客歲紐育の傳道大會にコンカ博士の出せし宗教統計を示せり

儒教佛教徒	八億万人	回々教	二億万人
猶太教	八百万人	天主教	二億二千五百万人
希臘教及他の宗教團体	二億二千万人	新教	一億五千万人
無神論者(基督教國に生れたる者)	一百万人		

氏云く其割合を示せは佛儒兩教五割三分、回々教一割三分、天主教一割五分、新教一割にして天主教希臘教新教は諸點に於て異なる所あるも齊

しく基督教なる一旗幟の下に在るものにして之を合すれば五億万餘を算し世界人口の三割三分に當る、故に世界傳道てふ意味は三分の一の人間が三分の二に對する運動に外ならず如今果して如何なる勢力を表はすか試に之を統計に考へん、

現に純然たる傳道會社二百四十九あり是れ歐米より日本其他に宣教師を派遣する會社の數なり此他傳道費用を助くる婦人會、矯風會、禁酒會、共勵會等を加ふれは其數實に五百三十七の傳道的團躰あるを見る、而して年々之に收むる資金は一千九百十二万六千一百二十弗を算しその派遣する宣教師の數一万五千四百六十人を見る、而して此宣教師の外其傳道地に於ける牧師傳道師の數實に七万七千三百三十八人也、此他

日曜學校數一万五千、　同上生徒數七十七万一千九百二十八人

ミツシヨンスクール二万餘、同上生徒數百四万一千人

聖書飜譯國語數四百廿七、一年間聖書賣高二百五十三万五千四百六十六册

聖書關係書籍一年賣高(一千四百四十九万册、)聖書及其關係書類活版店百四十八

傳道上の雜誌三百卅六種、ミツシヨン病院三百七十五

等あり、三分の一を以て三分の二に對するの勢力また小なりと云ふべからず云々

●**義和團匪の亂に斃れし新教宣教師**　二月二日發兌の香港「デーリー、プレツス」に「チヤイナ、インランド、ミツシヨン」の幹事スチーヴンソン氏の取調に係る昨年義和團匪の亂に依て斃れたる新教宣教師の人員、國別、所屬傳道局及び致命の場所を揭載せり、今左に譯出す。

傳道局	大人	小兒	合計
チヤイナ、インランドミツシヨン	五八	二〇	七八
クリスチヤン、エンド、ミツシヨナリー、アライアンス	二一	一五	三六
アメリカンボード	一三	五	一八
エングリシユ、バプチスト	一三	三	一六
シエオヤン、ミツシヨン	一一	二	一三
アメリカン、プレスビテリアン(北)	五	三	八
スカンヂナビアン蒙古ミツシヨン	五	〇	五
瑞典蒙古ミツシヨン	三	一	四
エス、ピー、ジー	二	〇	三
英國聖書會社	二	三	五
合計	一三四	五二	一八六

致命の場所	大人	小兒	合計
山西蒙古	一一二	四五	一五七
直隷	一三	四	一七
浙江	八	三	一一
山東	一	〇	一

國別	大人	小兒	合計
英國	七〇	二八	九八
瑞典	四〇	一六	五六
合衆國	二四	八	三二

●**釋尊降誕會**　大日本佛教青年會の釋尊降誕會は例年の通り本月八日第十回降誕會を神田錦輝館に催す、當日出席の辯士は釋宗演、島地默雷、南條文雄、大内青巒、清澤滿之の諸氏受持當番は專門學校の教友會なり

●**成田の斷食者**　新勝寺に於て所願の爲に參籠斷食せしもの昨年

下半期中に斷食せしものは

△總計　三百九十九人にして其内男子二百六十五人女子三十四人而て最多きは十月也

△日數　三日二夜三十六人一週間百六十六人二週間九十人三週間二十七人四週間一人

△目的　斷食者が祈願の目的は如左

	男	女
自已の立身出世を祈願せし者	二九	四
商賣の繁昌を祈願したる者	三	｜
父母の病氣平癒を祈る者	四二	四
實子の病氣平癒	三五	一二
自已の病氣	一二一	八
夫の放蕩	｜	二
難船に生命を全ふせし御禮	一	｜
生計の困難	一	一
痴情	｜	一
前非を悔ひて	四	｜
開運の望み	二七	二
講中安全を	三	｜
記臆力の增進を	九	｜

△縣別　以上の斷食者を全國府縣に分ては

東京	六八	千葉	六二	埼玉	五三
茨城	二〇	神奈川	一六	新潟	一〇

其他一人或は二人宛なり

